

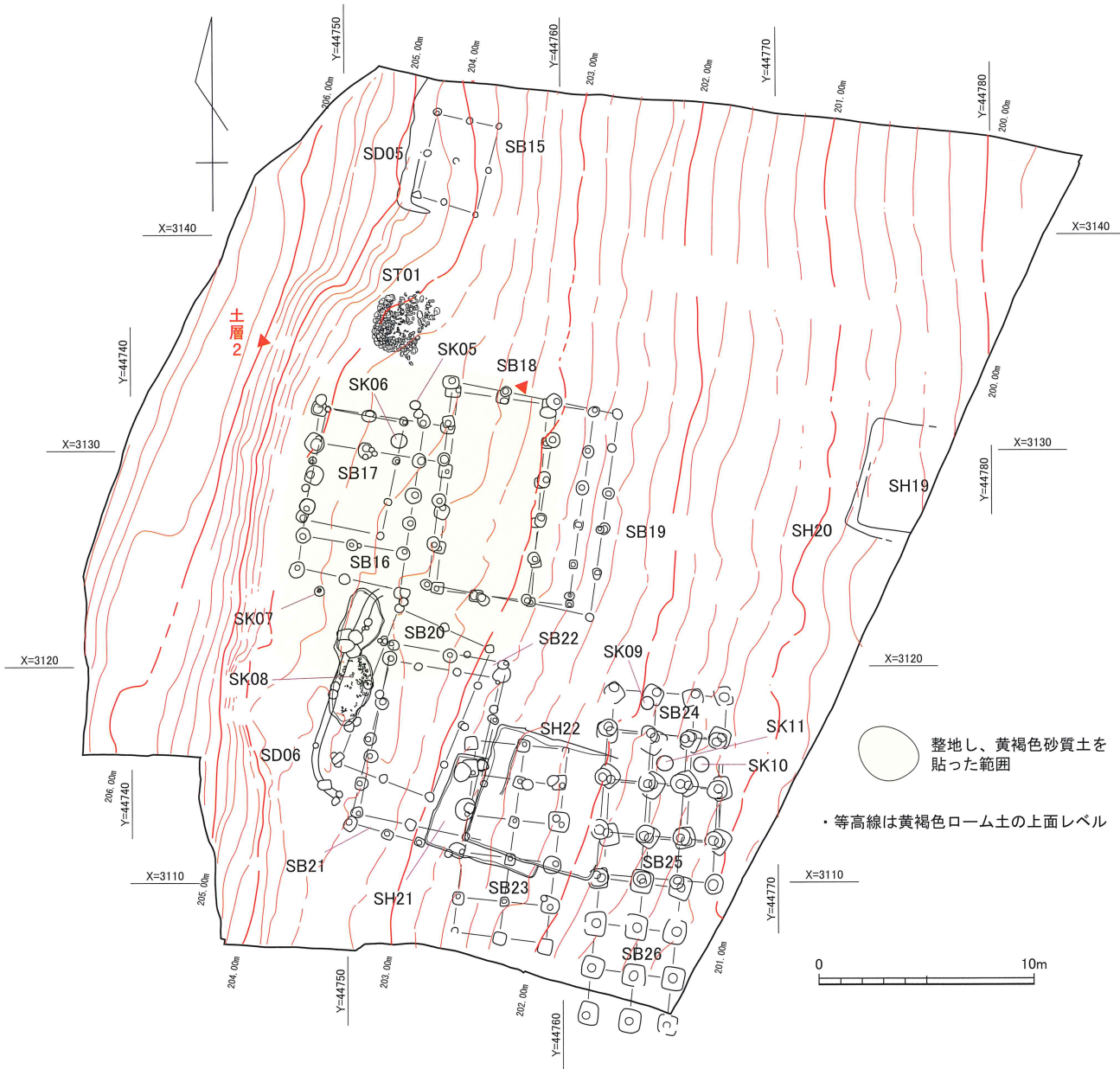
(3) C区

今回の調査ではほぼ中心部にある調査区である。調査前には3段の段々畑であった。表土を除去すると、山側（西側）の最も高いところでは、黄褐色ローム土が現れ、遺構が明瞭に確認できた。しかし、一段下がった畑では表土下に黒褐色粘質土が厚く堆積し、深いところでは1m近くもあった。その堆積土の中に中世から古代の遺物が含まれており、遺構掘り込み面があることが想定できたが、峻別が困難なところは黄褐色ローム土まで削らざるを得なかった。

一方、山側で検出できた黄褐色ローム土を追っていくと、大型の柱穴が集中する箇所では明らかに黄褐色ローム土を削り込んで平坦面を作り出していることが確認できた（第96図）。そして、その平坦面には黄褐色ローム土が薄く敷かれており、柱穴の掘方がその黄褐色ローム土を除去するまで確認できなかったことから、竪穴建物の貼り床の様に地面の整地を行っていたことがわかった。C区では、竪穴建物4基、掘立柱建物13基、溝2条、墓1基、鍛冶炉1基、土坑6基などが確認された。



第95図 C区遺構配置図(1)

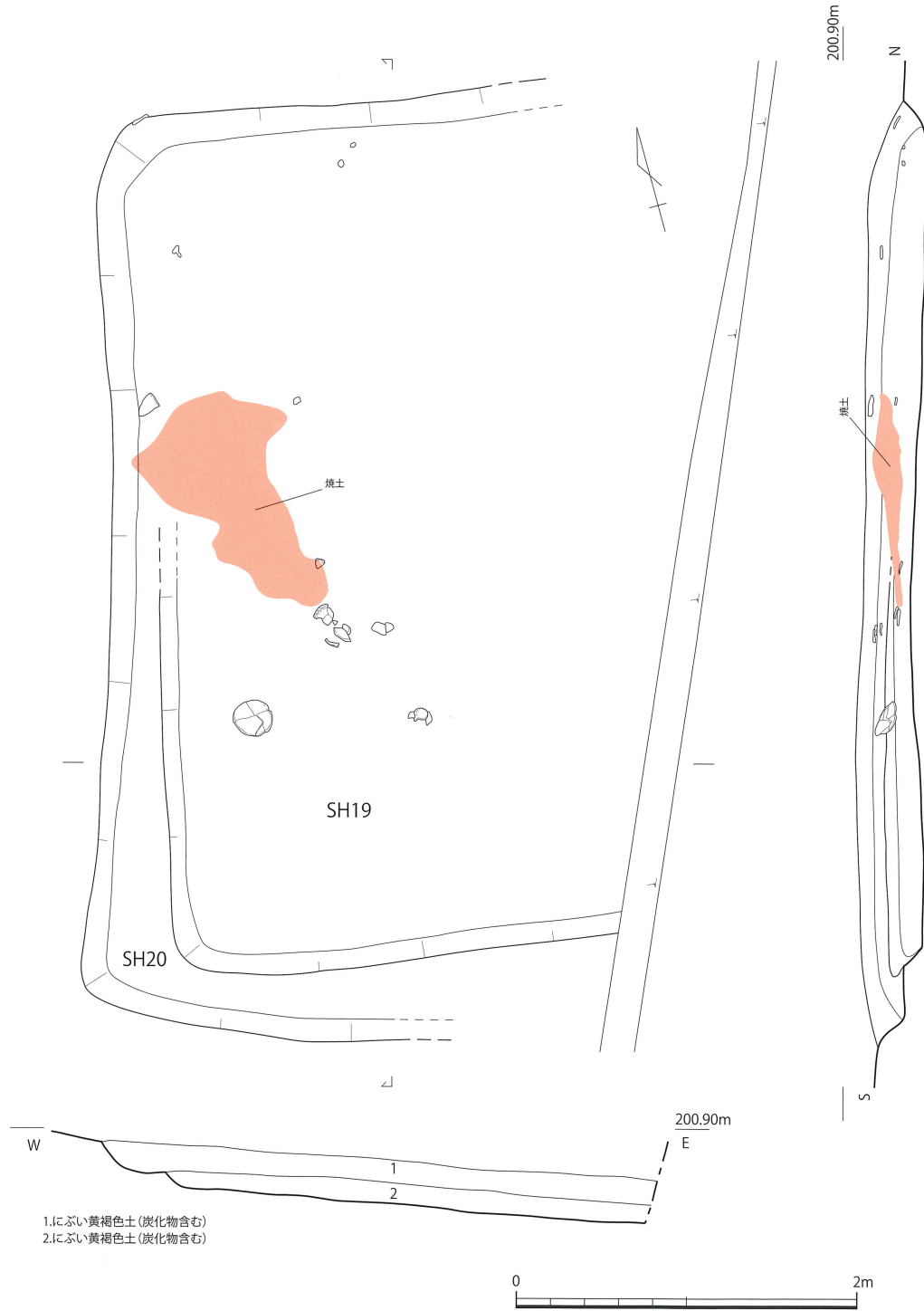


第96図 C区遺構配置図(2)

1 竪穴建物

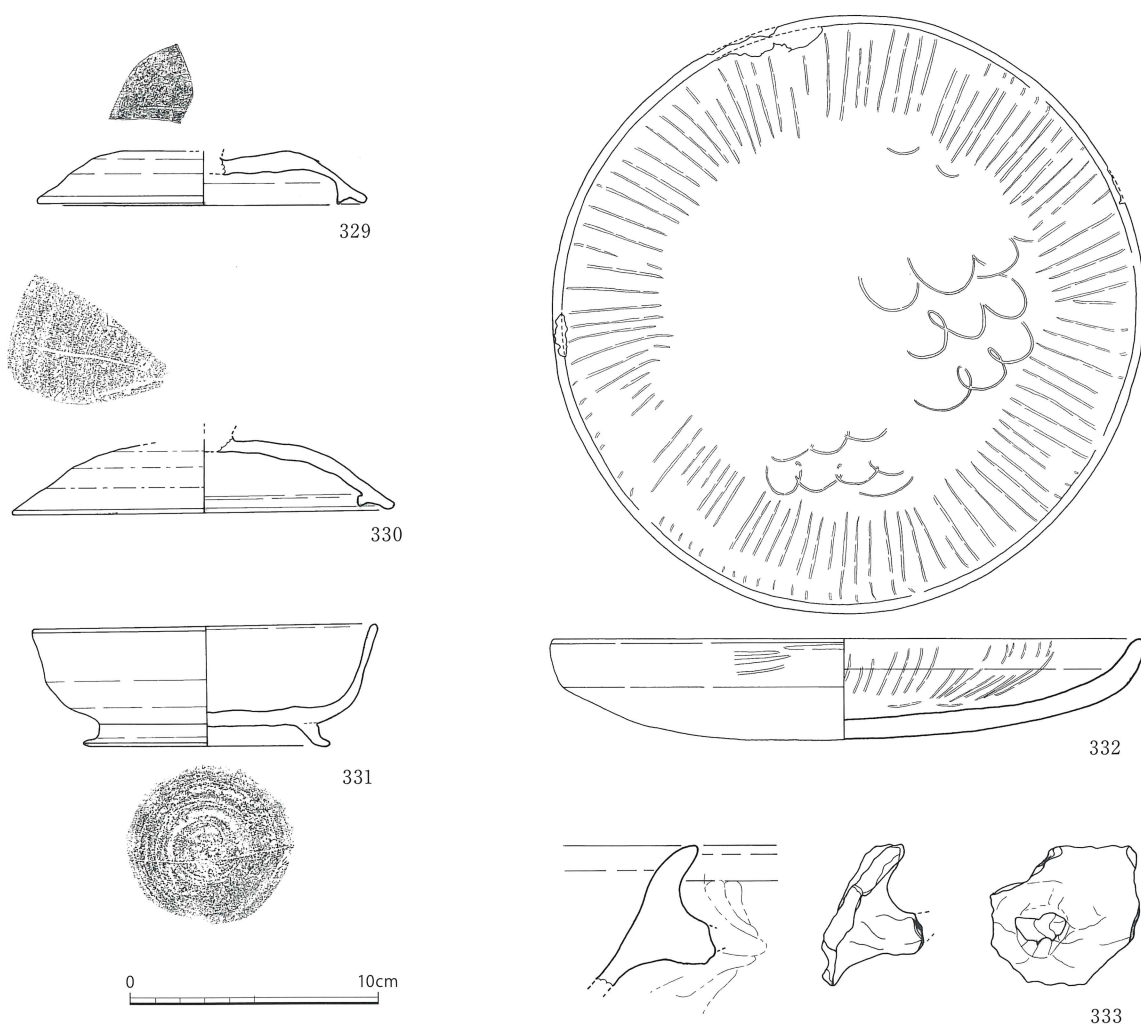
□SH19 (第97図)

調査区の東側壁際で確認された竪穴建物である。3分の1ほどが調査区外となるので、全形は窺い知れない。SH20を切っているが、北側の壁は確認できなかった。西壁のほぼ中央付近で焼土の広がりがあったが、竈の構造を示すような状態では無かった。竈であったとすれば、徹底的に破壊されたものといえるだろう。床面には柱穴なども無かった。



第97図 SH19、SH20

出土遺物は第98図329から333である。329から331は須恵器で、329と330は坏蓋、331は高台付き坏である。蓋にはつまみが付いていた痕跡が認められる。高台付き坏は、外側に踏ん張る高台から横に張り出したのち、外傾しながら開く体部である。332はいわゆる都城系土器と呼ばれるもので、放射状と螺旋状の暗文を施す皿である。全体的に厚く作られ、浅く、口縁部が小さく立ち上がる。発色は赤味がかっている。この種の資料を至近で探せば竹田市直入町久住の石田遺跡がある。同型のものはないが、共伴する須恵器の高台付き坏の形態はほぼ同じで、飛鳥IVから飛鳥Vに比定している*5。333は甑の把手である。



第98図 SH19出土遺物

*5 『市第I遺跡・石田遺跡』 久住町教育委員会 1996

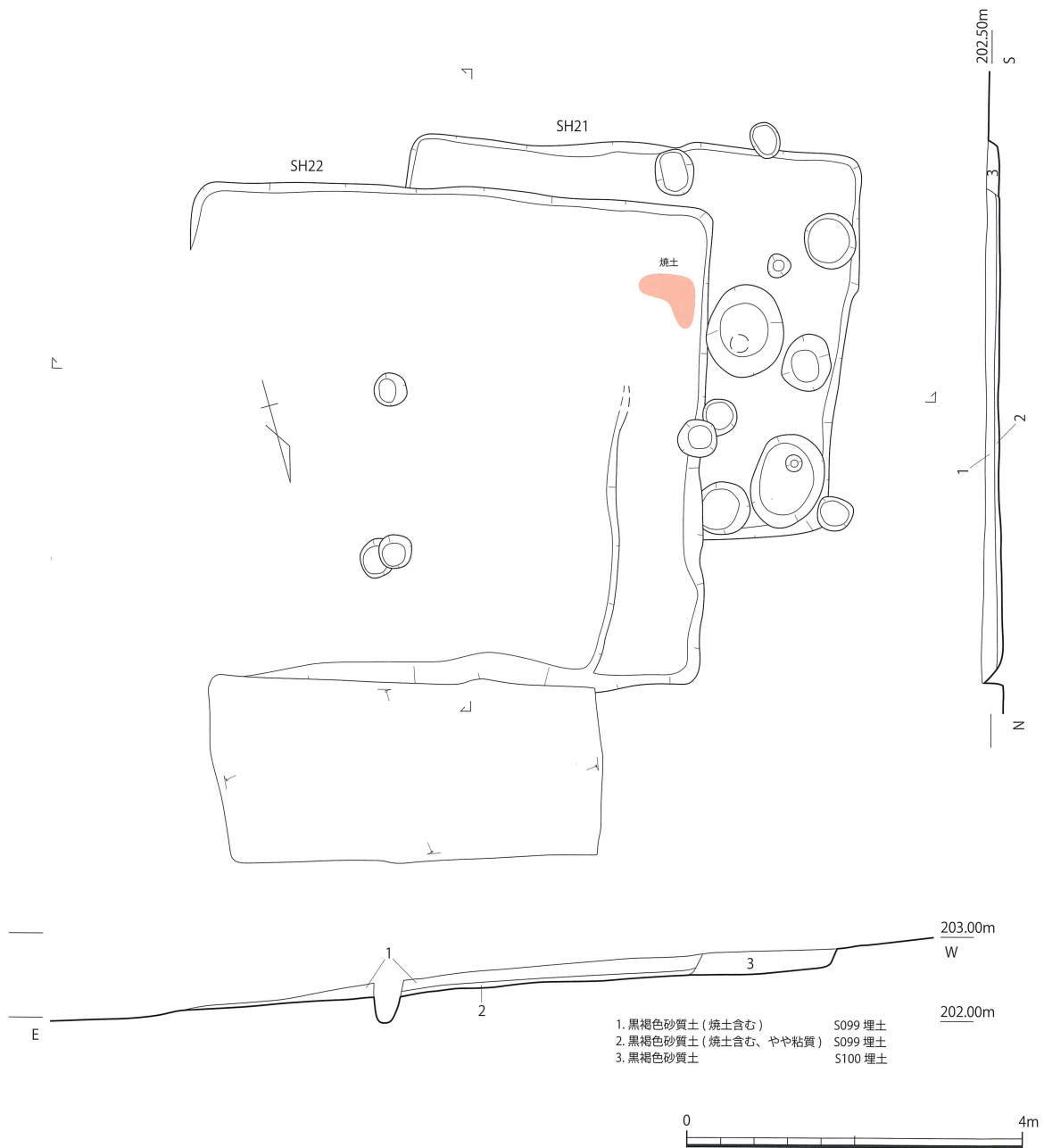
□SH20 (第97図)

SH19によって大部分が切られており、さらに東側は調査区外で全形を窺い知ることはできない。遺物の出土も無く、時期は不明である。

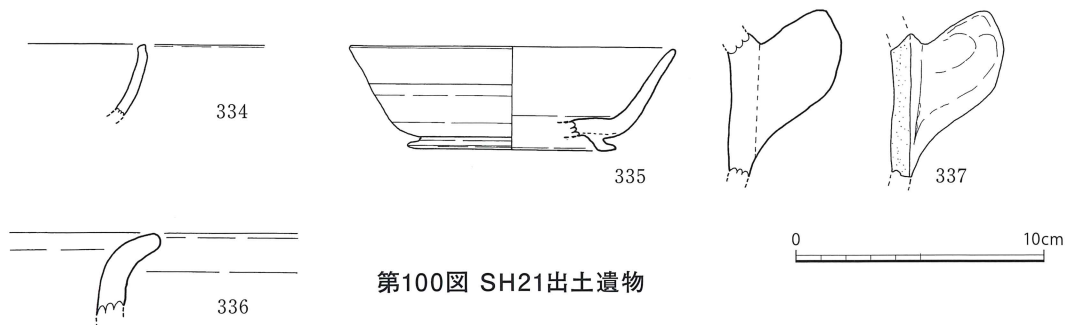
□SH21 (第99図)

調査区の南端で確認された竪穴建物である。3分の2程をSH22によって切られている。南北4.6m、東西5.4mのやや長方形を呈し、深さは0.24mほどである。床面にはピットがいくつか確認できるが、この竪穴建物に伴うものではないと考えられる。

出土遺物は第100図334から337である。334は須恵器鉢の口縁部、335は須恵器高台付き坏である。高台部は端部が外方に小さく開く。336は土師器の甑把手、337は土師器甕口縁部である。



第99図 SH21、SH22

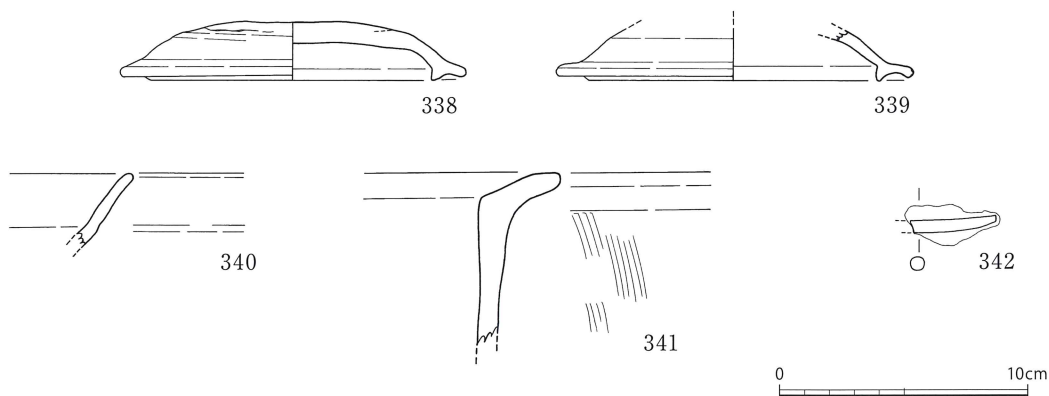


第100図 SH21出土遺物

□SH22 (第99図)

SH21を切る竪穴建物である。南北5.9m、東西6.0mのほぼ正方形を呈し、深さは0.2mほどである。床面は西側でベッド状に一段高くなる。南西部には床面で焼土が見られた。柱穴は2カ所あるが、この竪穴建物に伴うものかは判断できなかった。

出土遺物は、第101図338から342である。338と339は須恵器坏蓋で、338には摘まみが無い。340は須恵器高坏の口縁部か。341は土師器甕の口縁部。342は鉄製の釘か。



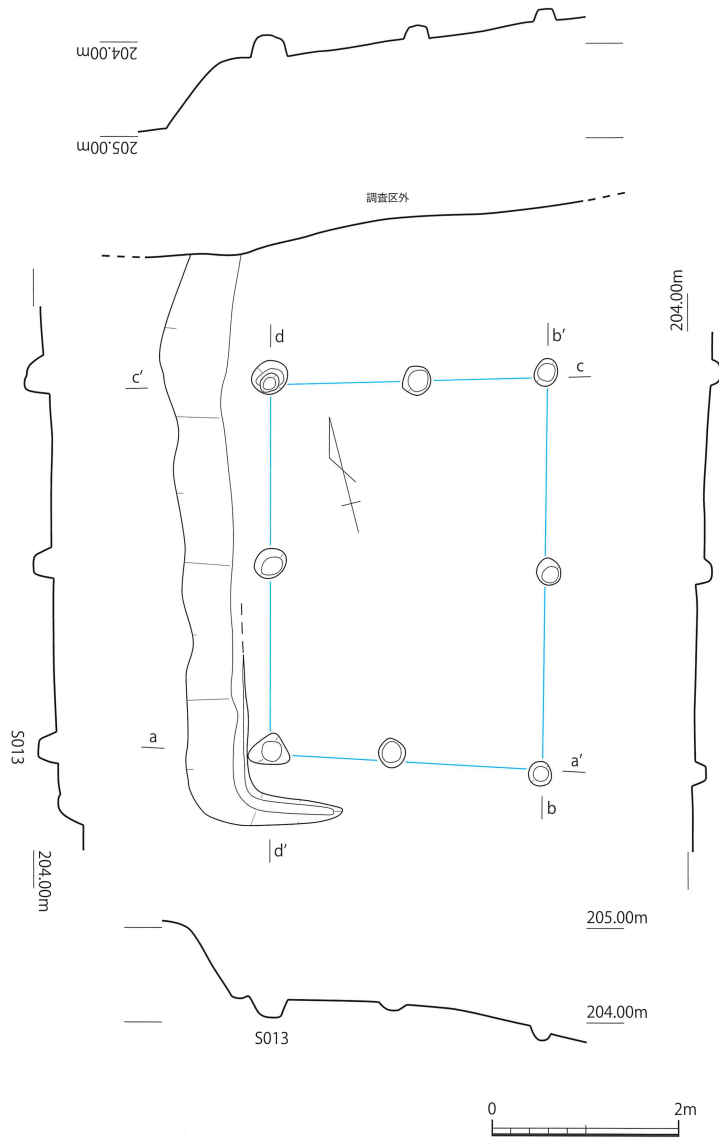
第101図 SH22出土遺物

2 掘立柱建物

□SB15 (第102図)

調査区の北西で確認された掘立柱建物である。2間×2間で、桁行4.0m、梁行2.9m、面積は11.6m²である。西側から南側にかけては幅0.6m、深さ0.2～0.8mの溝が巡る。すぐ西側が段差1mほどの緩やかな崖となるので、雨水の排水溝であろう。

柱穴からの遺物の出土は無いが、隣接するC区の状況などから見て、中世のものと考えられる。



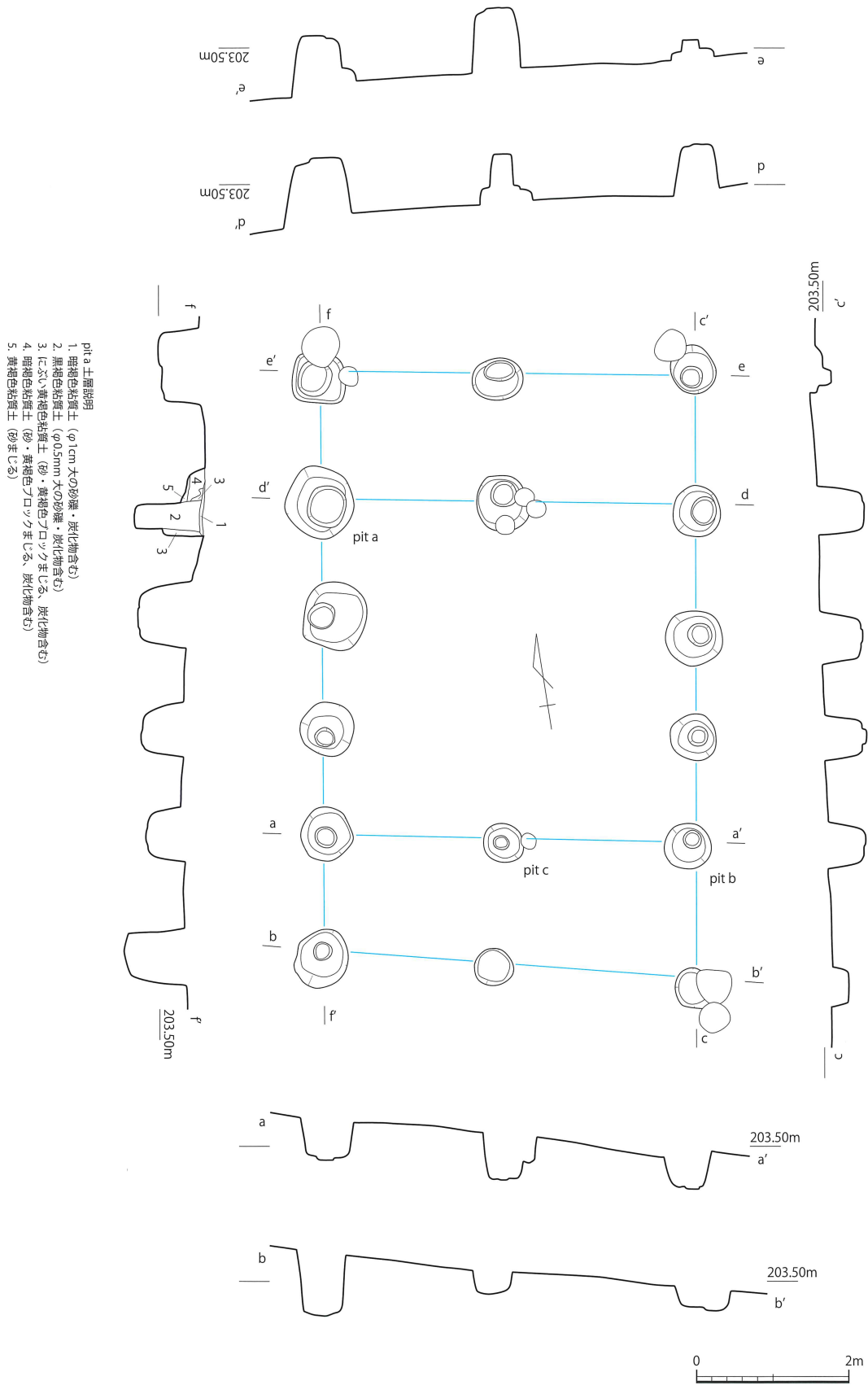
第102図 SB15

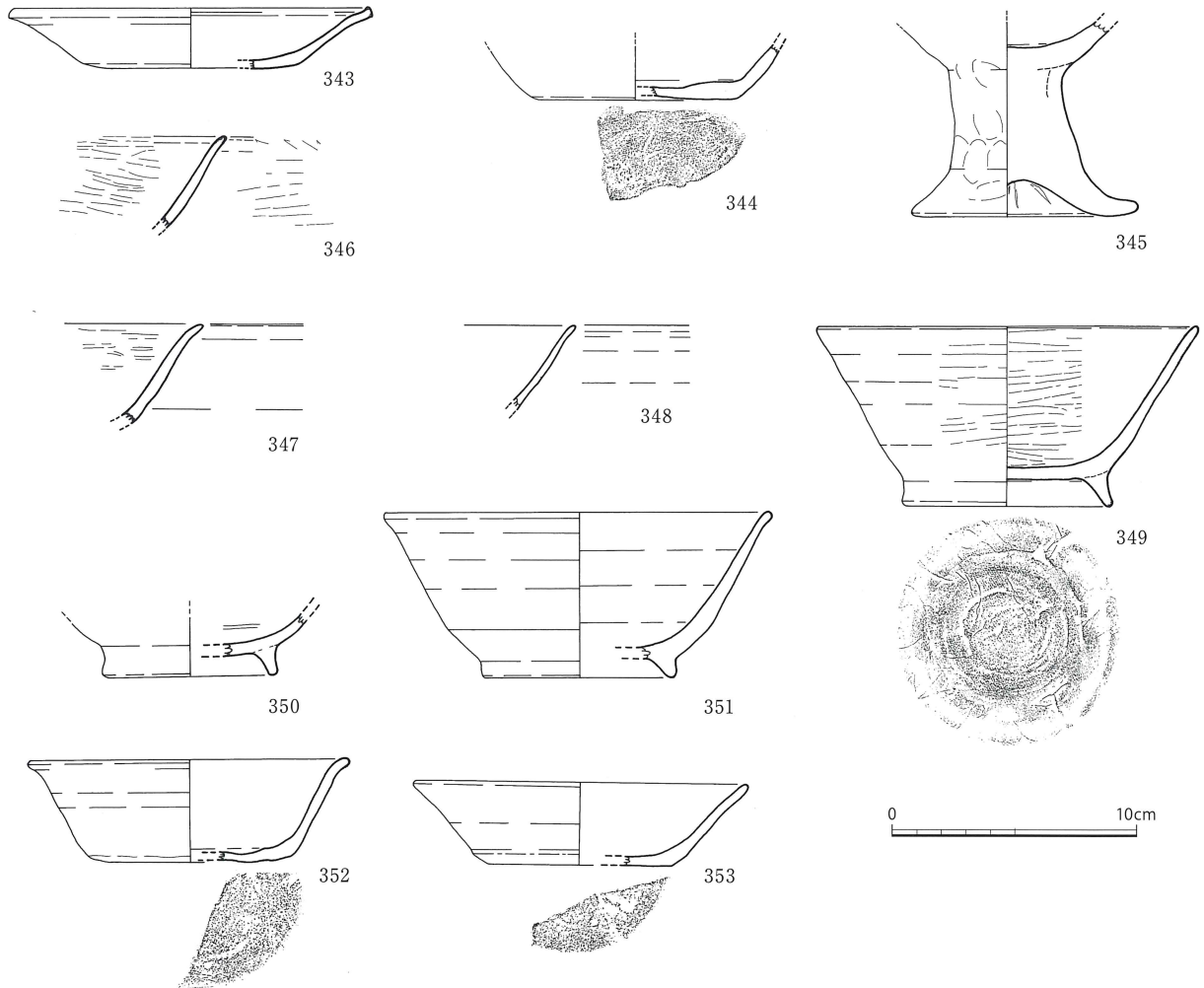
□SB16 (第103図)

調査区の西側、段落ちのすぐ下で確認された5間×2間の掘立柱建物である。背後（西側）の段落ちは、人為的に削平したもので、平坦面を作り出した上に建てられている。さらに、東側の柱穴列は、当初は地山と思われた黄褐色土面で柱痕の大きさしわからなかったが、黄褐色土を10cmほど掘り下げると黒褐色粘質土となり、そこでは大きな柱穴の堀方が確認された。つまり、崖の削平による平坦面の造作→掘立柱建物建築→黄褐色土を使った整地、という行為があったことがわかった。

柱穴は直径0.6mから0.8mの円形で、確認された柱痕は直径0.2mから0.3mである。深さは深いもので1.0mある。柱穴の間隔（柱間）は不揃いで、他の建物に比べて狭い。内部には棟持柱と思われる柱穴が2カ所ある。建物規模は南北7.6m、東西4.9mで、面積は37.2m²となる。

出土遺物は第104図343から353である。343と344は同一のピット出土。343は須恵器模倣の土師器の坏蓋である。344は内外面ともよく磨かれた体部で、碗であろう。345と346は同一ピット出土。345は土師器坏、346は土師器高坏の脚部である。347は内面にミガキがある黒色土器A類の碗。348は土師器の碗。349は内外面にミガキがある黒色土器A類の碗。350から353は同一ピット出土。350は内面にミガキがある黒色土器A類の碗。351は土師器の碗。352と353は土師器の坏である。



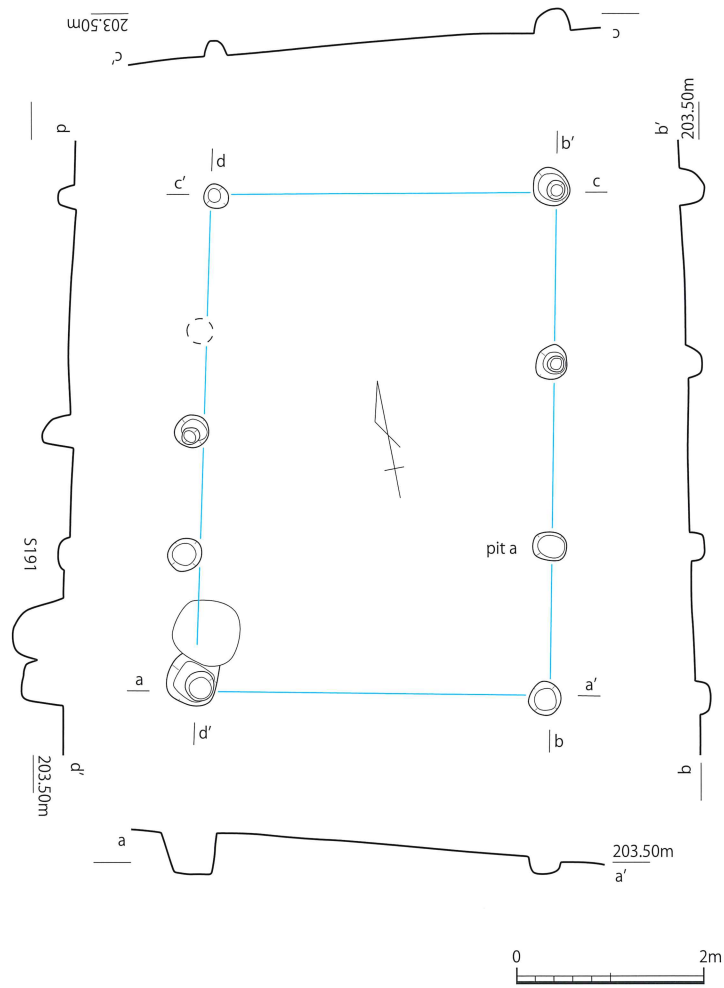


第104図 SB16出土遺物

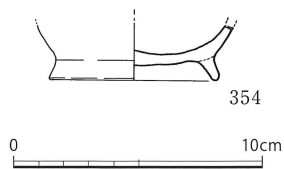
□SB17 (第105図)

SB16に重なるように検出された掘立柱建物である。桁行3間であるが、梁行は間に柱が無い1間となる。柱穴は直径0.3mから0.4mで、深さは0.2mから0.3mである。建物規模は南北に4.2m、東西に3.8mで、面積は16.0m²である。

出土遺物は第106図354の内面にミガキがある黒色土器A類の碗である。遺物は古代のものであるが、柱穴規模から中世と思われる。



第105図 SB17

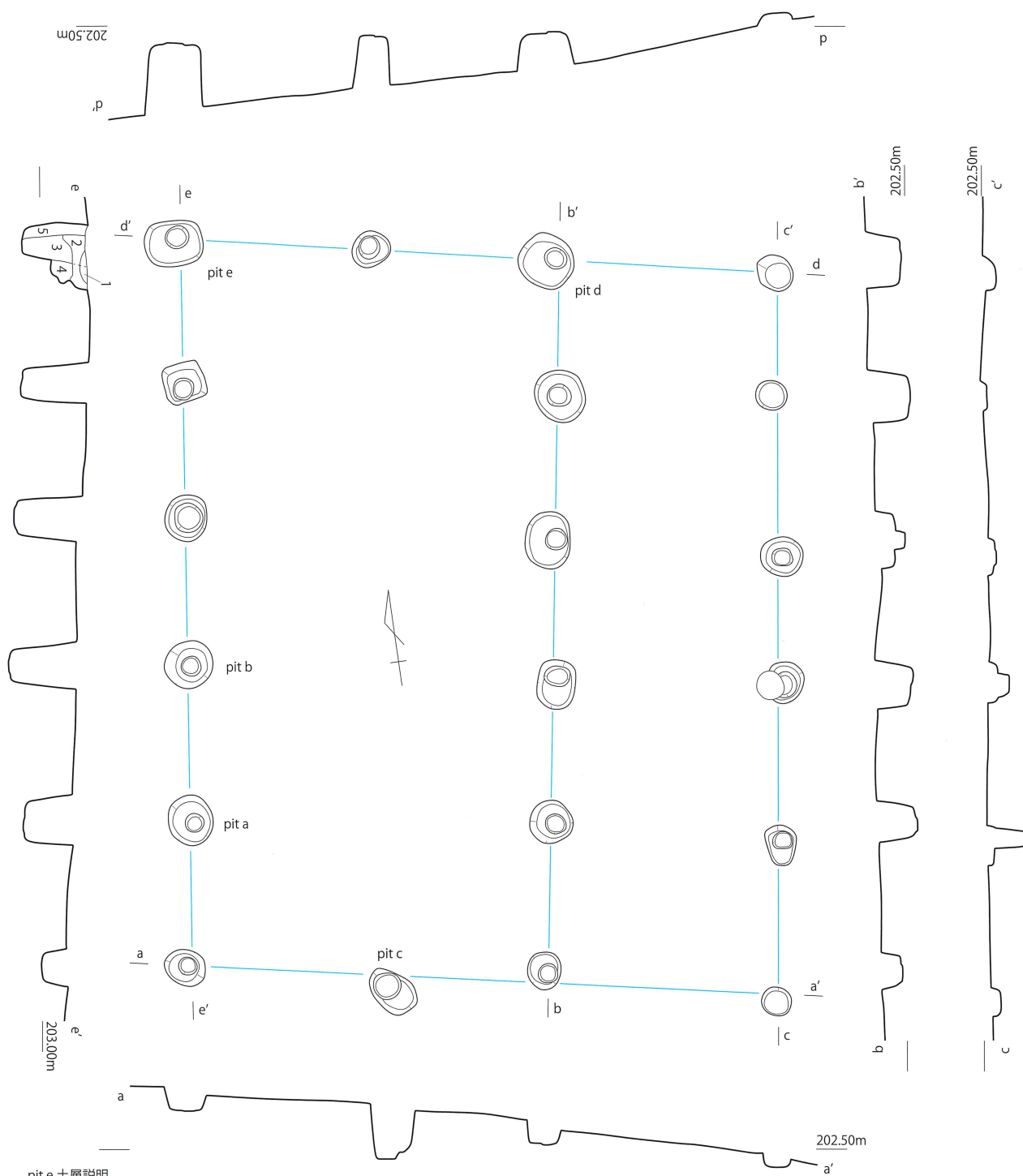


第106図 SB17出土遺物

□SB18 (第107図)

調査区のほぼ中央で確認された掘立柱建物である。2間×5間の身舎に、東側に1間の庇が付く建物で、SB19とほとんど重なりながら切っているの、SB18はSB19の建て替えられた建物とすることができる。柱穴掘方は、直径0.6mから0.8mの円形で、深さは深いもので1m近くある。規模は、南北で9.5m、東西は身舎部分で4.7m、庇部分まで含めると7.7mとなり、面積は身舎部分だけで44.7m²、庇まで含めると73.2m²となる。

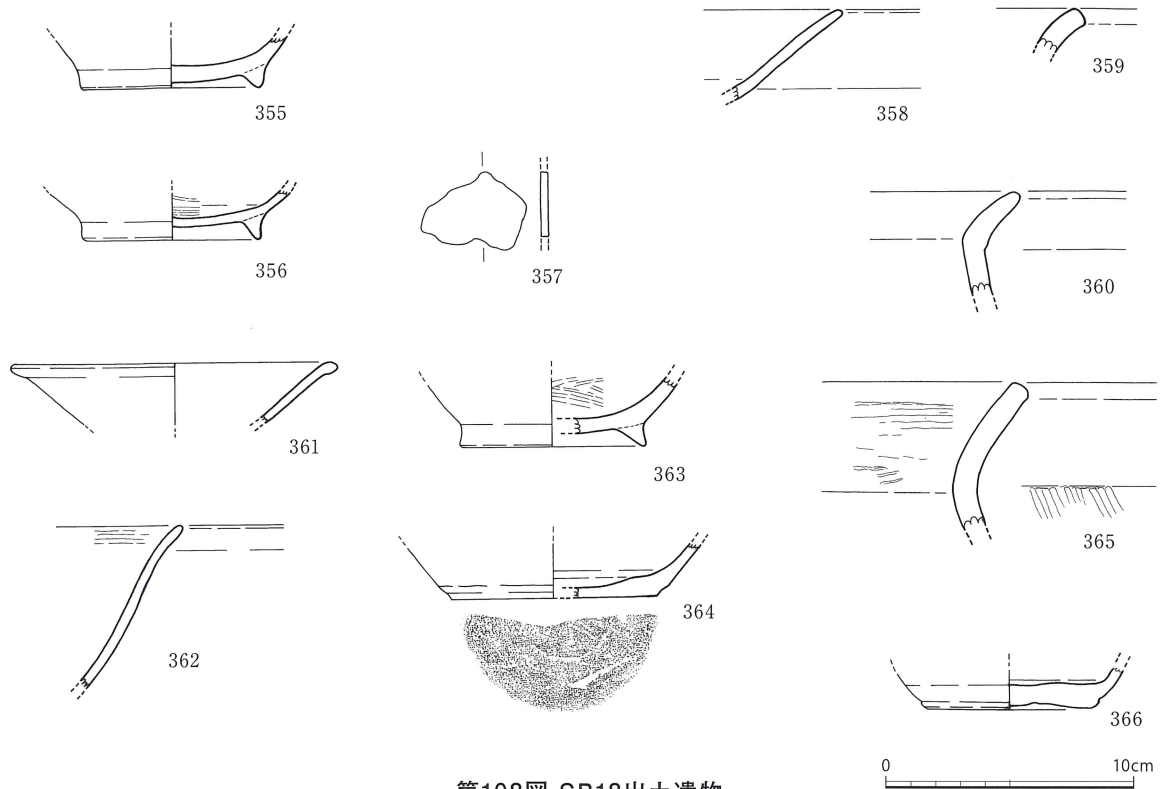
出土遺物は第108図355から366である。355は黒色土器A類の碗。356と357は同一ピット出土で、356は黒色土器A類の碗、357は鉄製品であるが種別は不明である。358と359も同一ピット出土で、358は土師器坏、359は土師器の甕である。361から364は同一ピット出土。361は土師器の坏か。362は内面にミガキがある土師器碗。363は内面にミガキがある黒色土器A類の碗。364は土師器坏である。360と365も同一ピット出土で、土師器甕の口縁部である。366は土師器坏である。



pit e 土層説明

1. にぶい黄褐色粘質土 (黄褐色ブロックまじり)
2. 黒褐色粘質土 (黄褐色ブロックまじり、炭化物含む)
3. 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロックまじり、炭化物含む)
4. にぶい黄褐色粘質土 (黄褐色ブロックまじり、炭化物含む)
5. にぶい黄褐色粘質土 (黄褐色ブロックまじり)

第107図 SB18

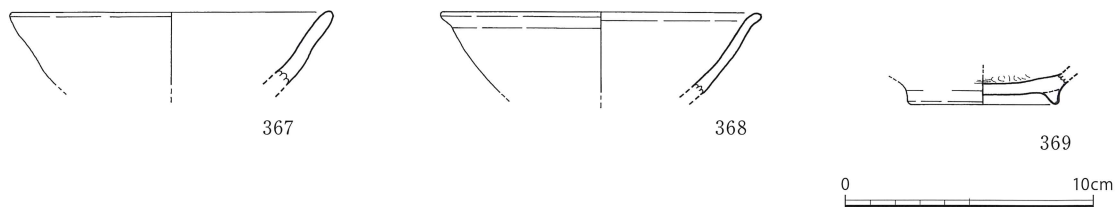


第108図 SB18出土遺物

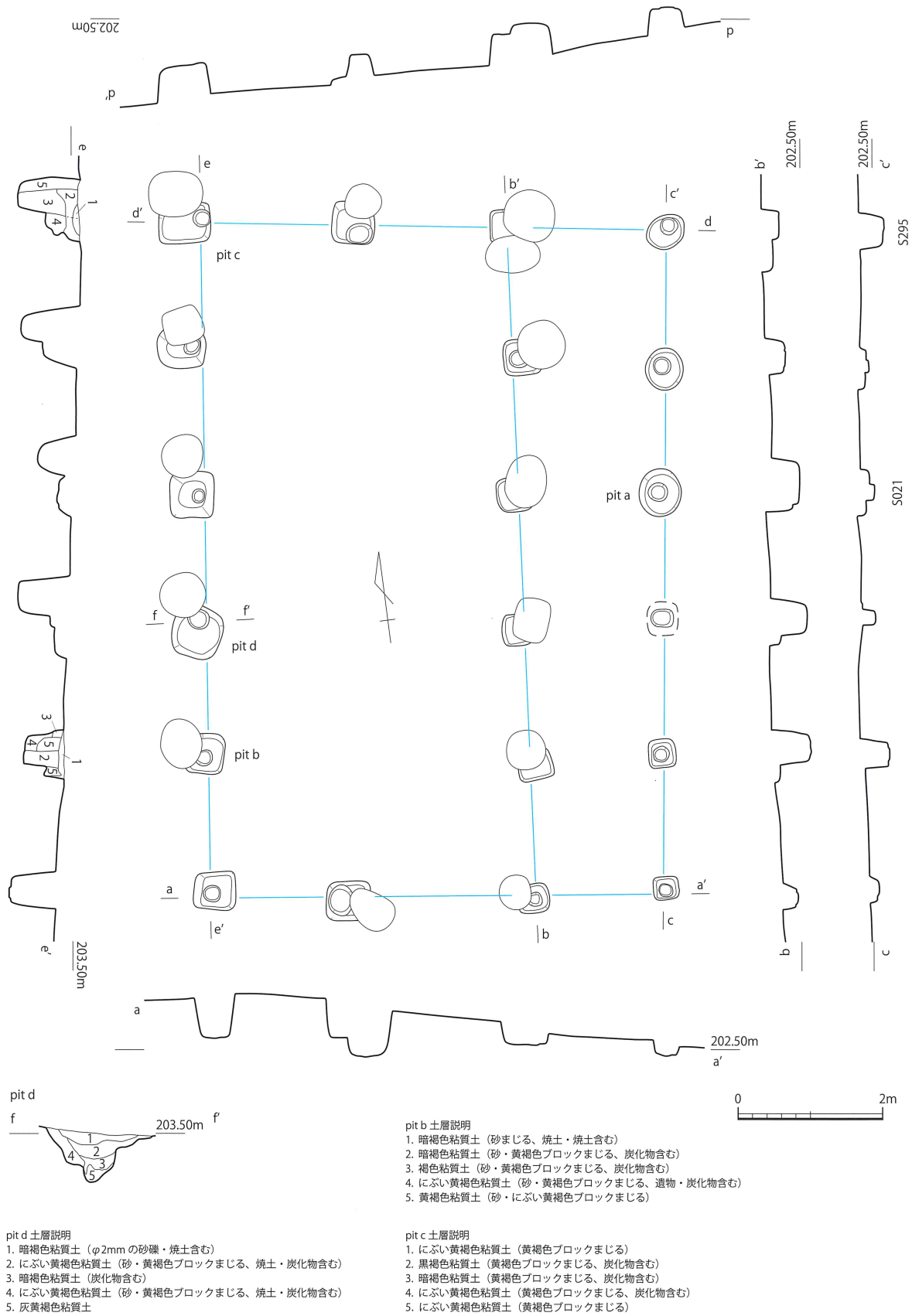
□SB19(第110図)

調査区のほぼ中央で確認された、SB18に切られている掘立柱建物である。5間×2間の身舎に、東側に庇が1間分付く。柱穴堀方は、直径0.5mから0.8mの方形で、深さは深いもので0.9m近くある。規模は、南北で9.1m、東西は身舎部分で4.4m、庇部分まで含めると6.2mとなり、面積は身舎部分だけで40.0m²、庇まで含めると56.4m²となる。

出土遺物は第109図367から369である。367と368は土師器坏、369は内面にミガキがある黒色土器A類の碗である。



第109図 SB19出土遺物

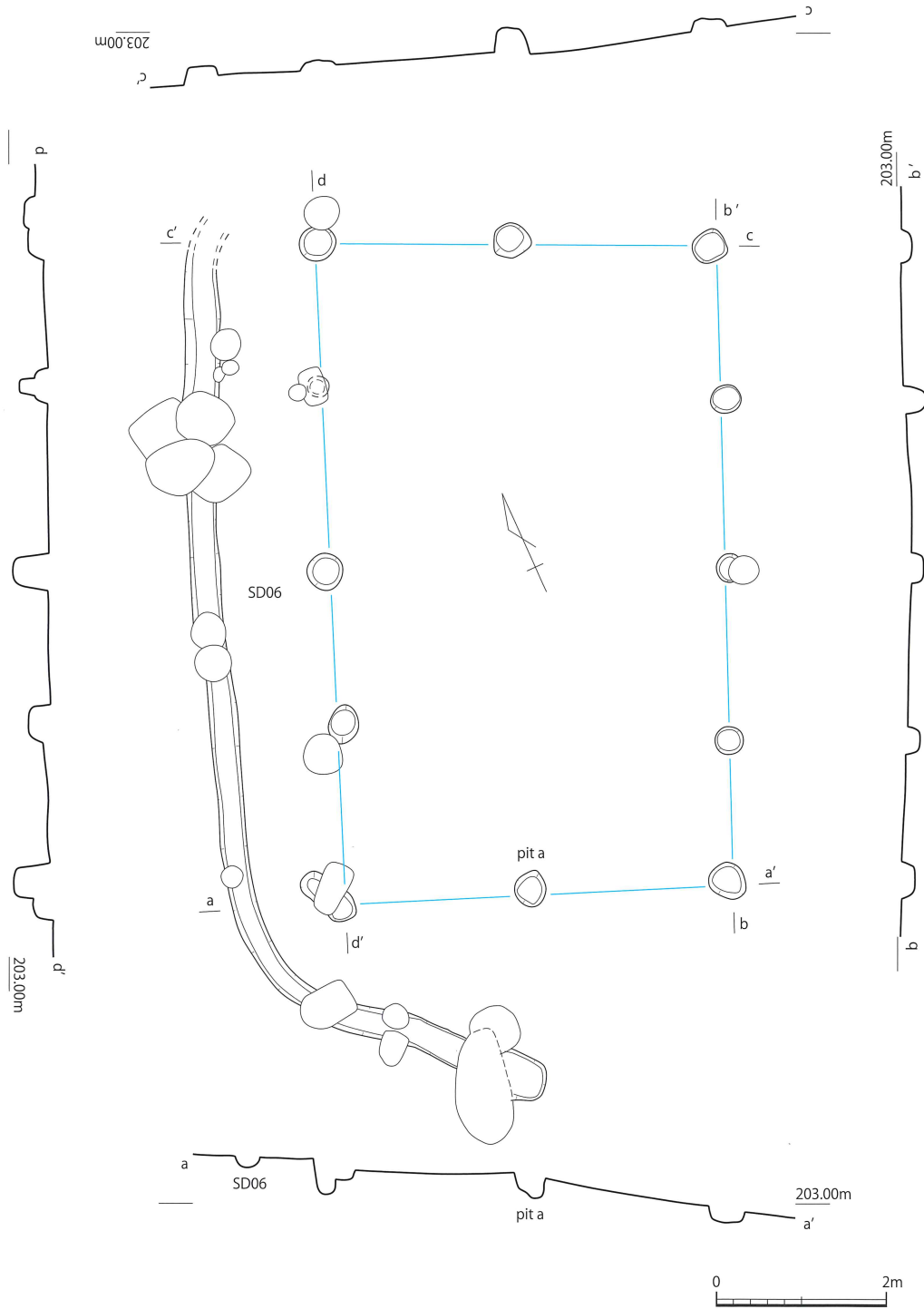


第110図 SB19

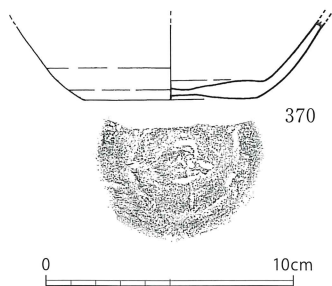
□SB20 (第111図)

SD06に囲われるように建つ掘立柱建物である。2間×4間で、規模は南北7.6m、東西4.6m、面積は35.0m²である。柱穴堀方は、直径0.3mから0.4mで、深さは0.2mから0.4mである。

出土遺物は第112図370の土師器環である。遺物は古代のものであるが、柱穴の状況から中世と考えられる。



第111図 SB20

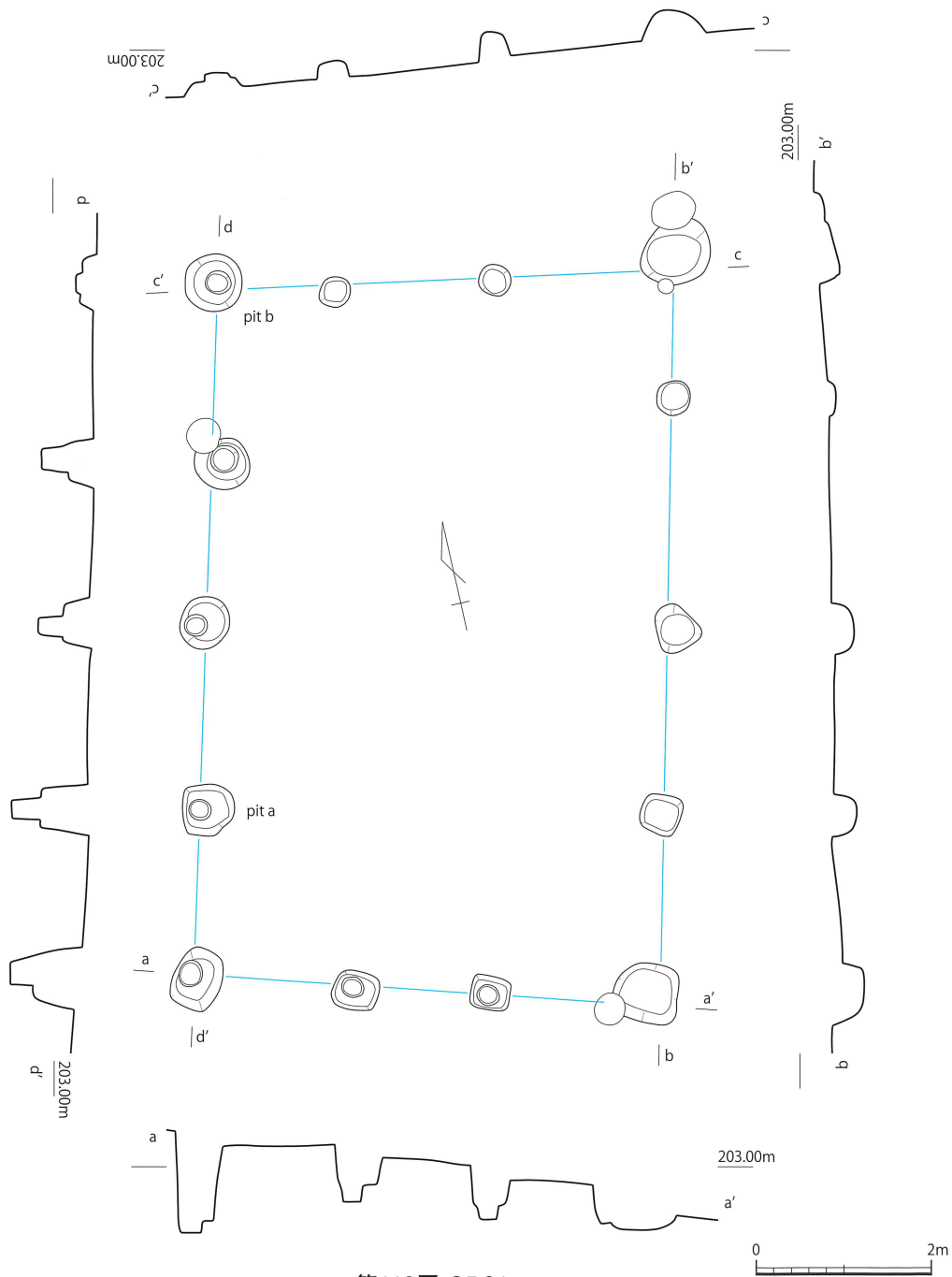


第112図 SB20出土遺物

□SB21 (第113図)

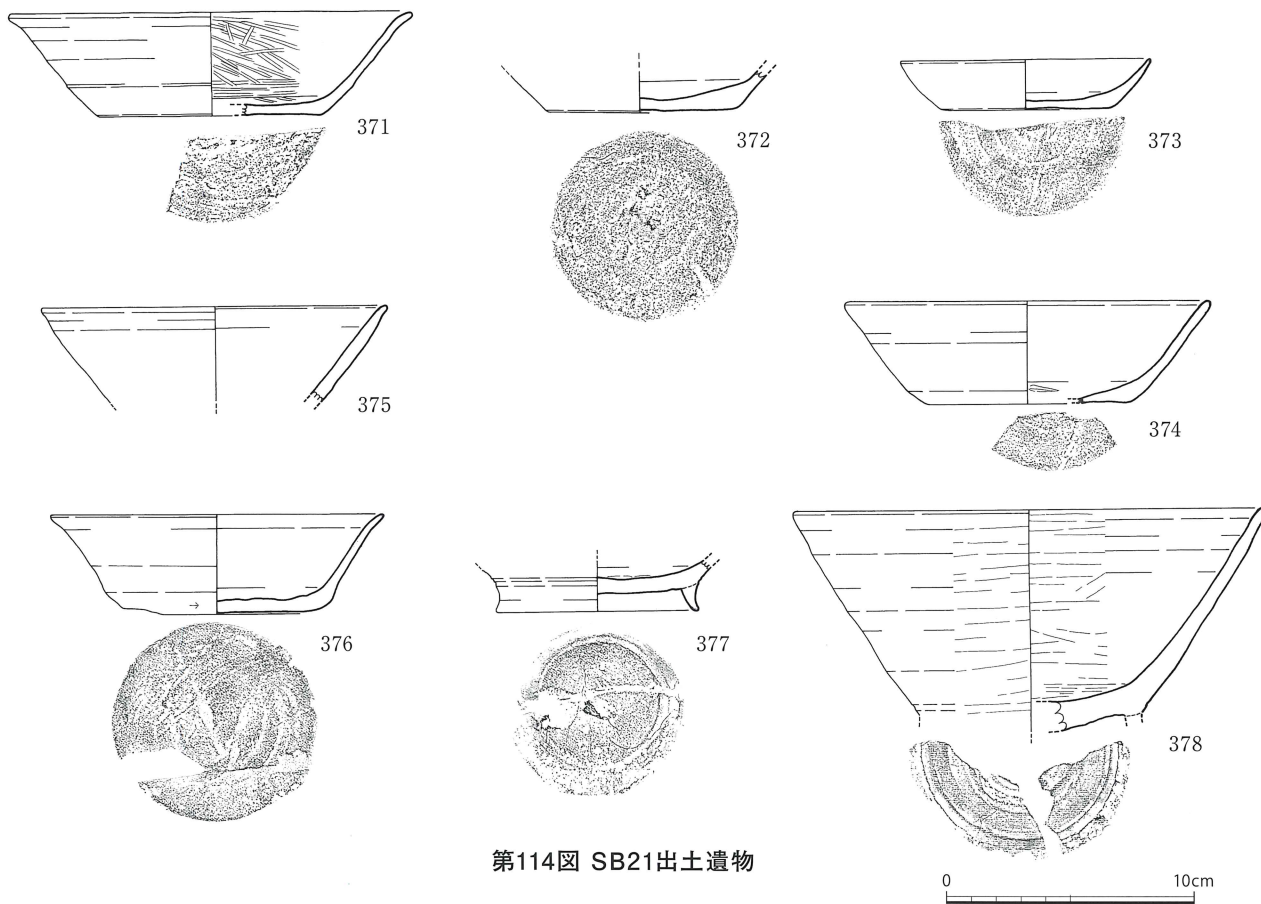
調査区南側で確認された掘立柱建物である。南北方向に4間、東西方向に3間で、7.8m×5.1mの面積39.8m²となる。東側の柱穴はSH21を切っている。柱穴掘方は0.3mから0.5mの円形で、深い柱穴は1.1mあった。

出土遺物は第114図371から378である。371は内面に磨きを施す黒色土器A類の坏で、今回の調査では坏形態は唯一の出土である。372は土師器坏で底部はヘラ切り離し未調整である。373と374は同



第113図 SB21

一ピット出土で、373は口径10.0cmの小型の坏、377は口径14.1cmの土師器坏である。375から378は同一ピット出土。375と376は土師器坏。377は土師器碗である。378は大型の坏部を持つ碗で、内外面ともよく磨かれており、高台は剥離している。口径は18.9cmに復元でき、大きさといい、内外面のミガキといい、特殊な用途を想定させる碗である。

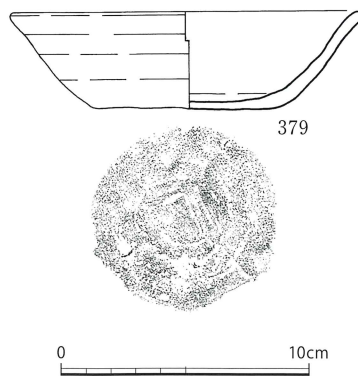


第114図 SB21出土遺物

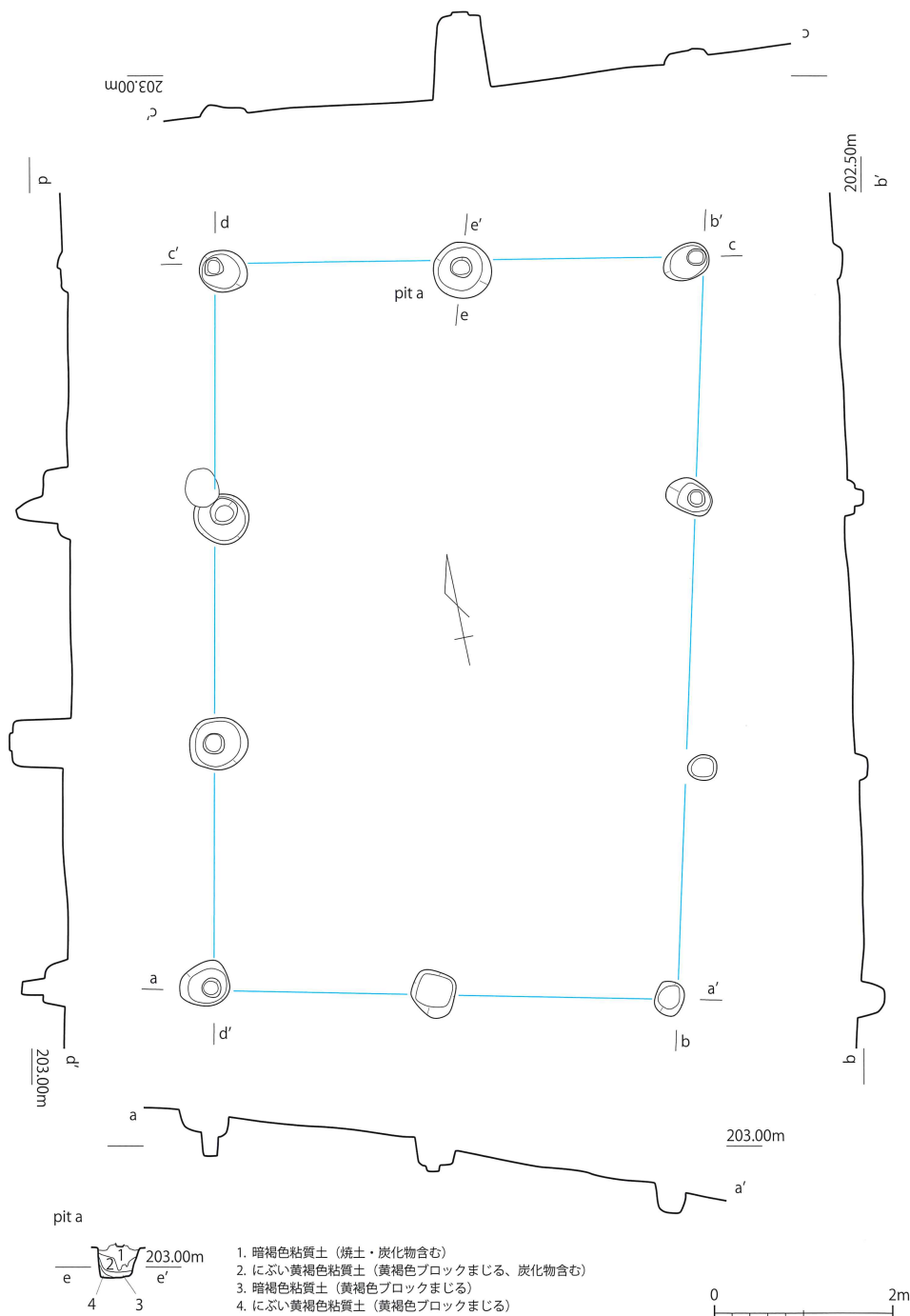
□SB22(第116図)

SB22に切られた掘立柱建物である。2間×3間で南北方向に長い建物である。規模は、南北8.0m、東西5.0mで、面積は40.0m²である。柱穴掘方は、直径0.4mから0.6mの円形である。深さは深いもので0.8mほどある。

柱穴からの出土遺物は第115図379の土師器坏である。



第115図 SB22出土遺物

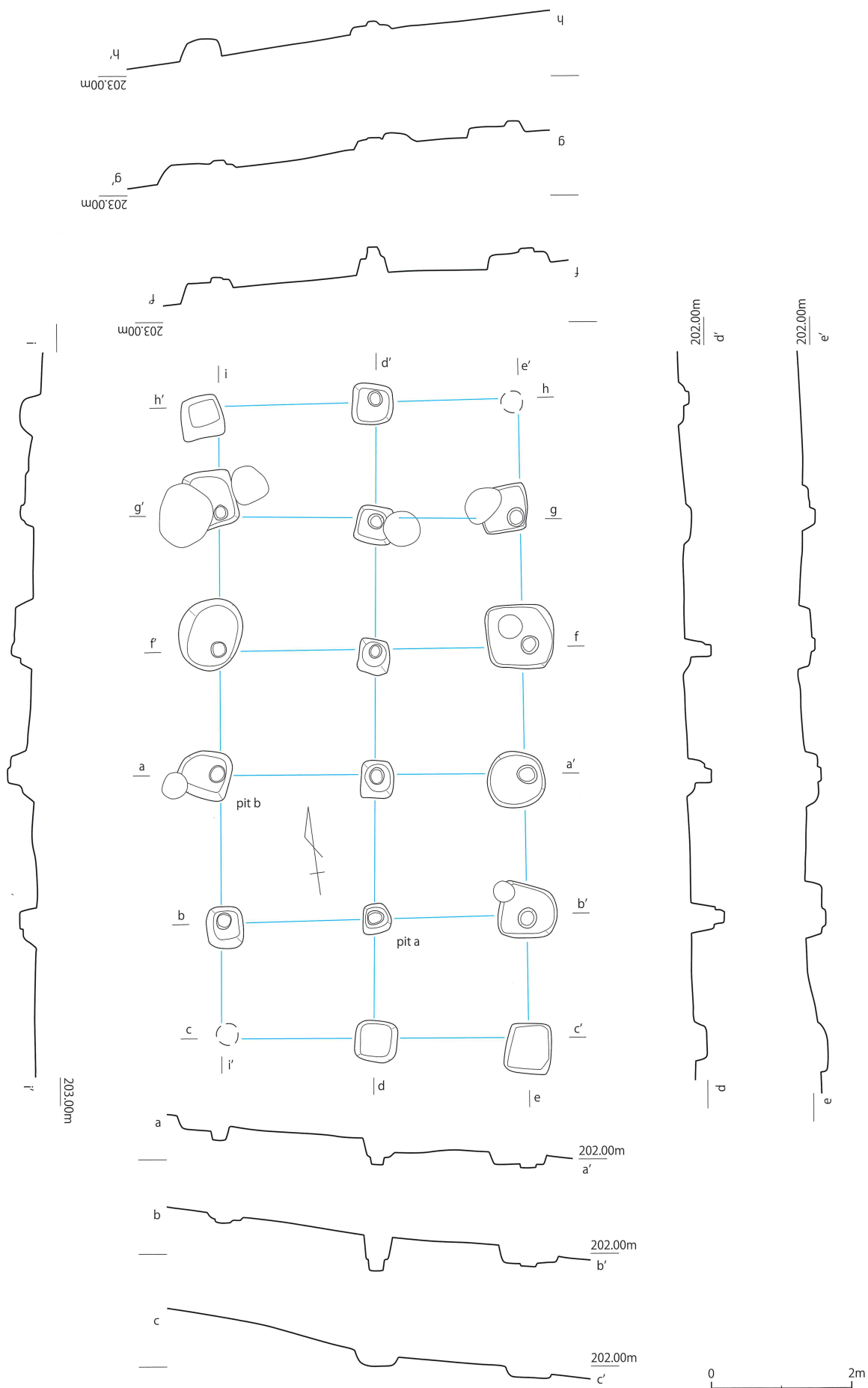


第116図 SB22

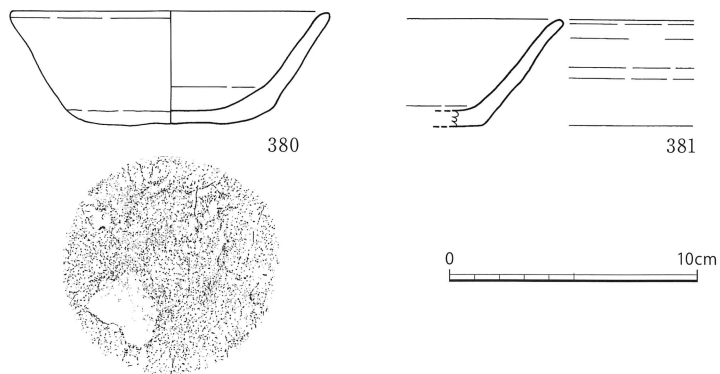
□SB23(第117図)

調査区南側で確認された掘立柱建物である。南北方向に5間、東西方向に2間で、8.8m×4.4mの面積38.7m²となる。柱穴掘方は遺構検出の難しさと削平具合から、やや不揃いの感を受けるが、基本的に側柱は一辺が0.6mから0.9mの方形で、側柱に挟まれた中の1列は一辺0.4mから0.6mと小さな方形である。大きさの違いから、中の1列は束柱と考えられるので、板敷きを伴う建物であったとすることができる。

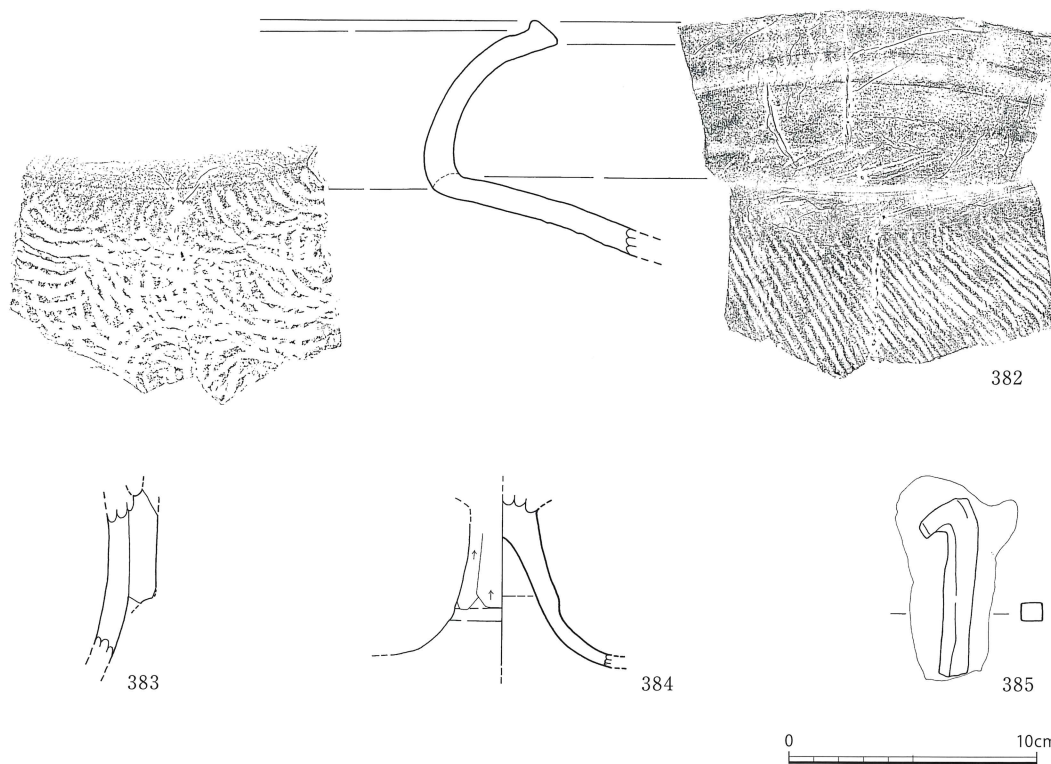
出土遺物は第118図380と381である。両者ともヘラ切り離しの土師器坏である。380は口径12.1cmである。



第117図 SB23



第118図 SB23出土遺物

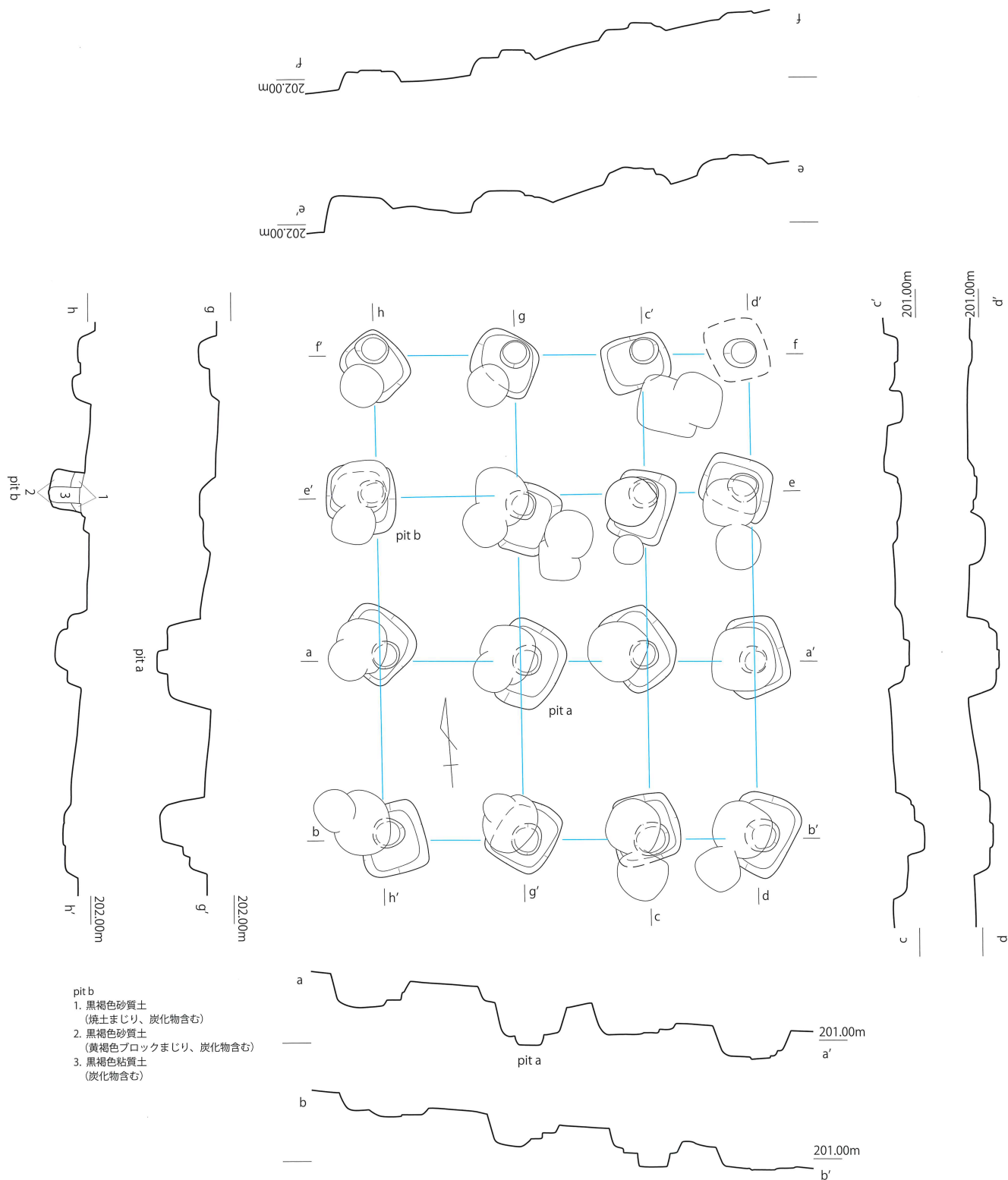


第119図 SB24出土遺物

□SB24 (第120図)

調査区の南東部で検出された3間×3間の総柱建物である。3分の2ほどをSB26と重なる。柱穴掘方の切り合い関係から、SB25が古くSB26が新しい。南北方向に6.8m、東西方向に5.0mと南北方向に長い長方形で、面積は34.0m²となる。柱穴掘方は1.0m前後の方形で、深さは0.2m程度しか残っていない。柱の並びを見ると、東側1列の柱間がやや狭いが、それより東側では柱穴が確認できないので、この建物のものと考えられる。

出土遺物は第119図382から385である。382は須恵器甕の口縁部で、端部が上方に小さくつままれる。383は須恵器壺で、胴部に縦方向に付く把手の部分である。384は土師器高坏で、裾部が大きく開く。385は鉄釘である。

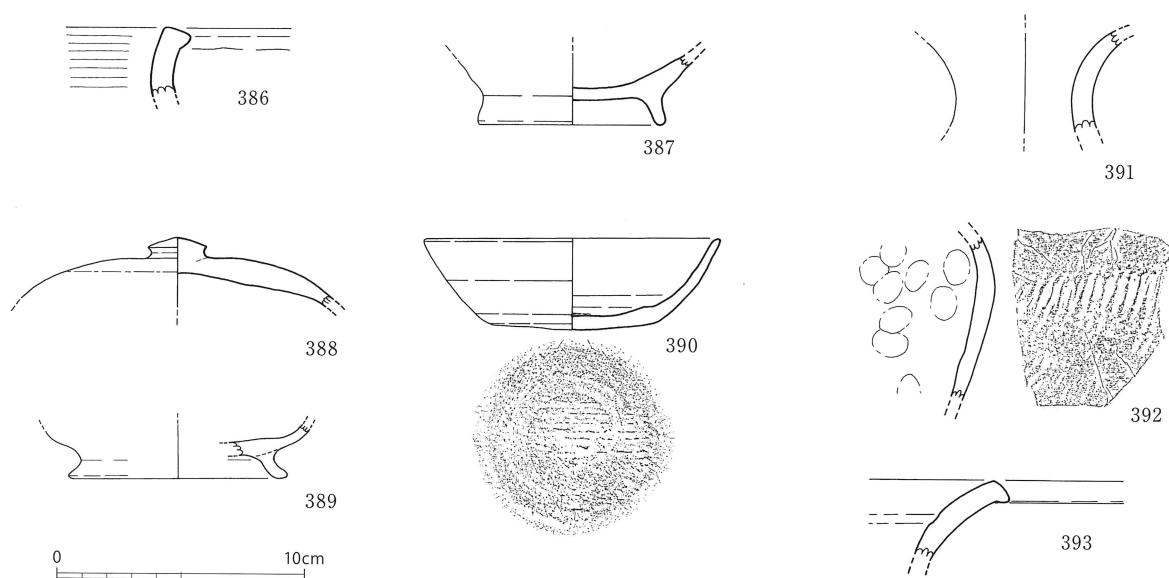


第120図 SB24

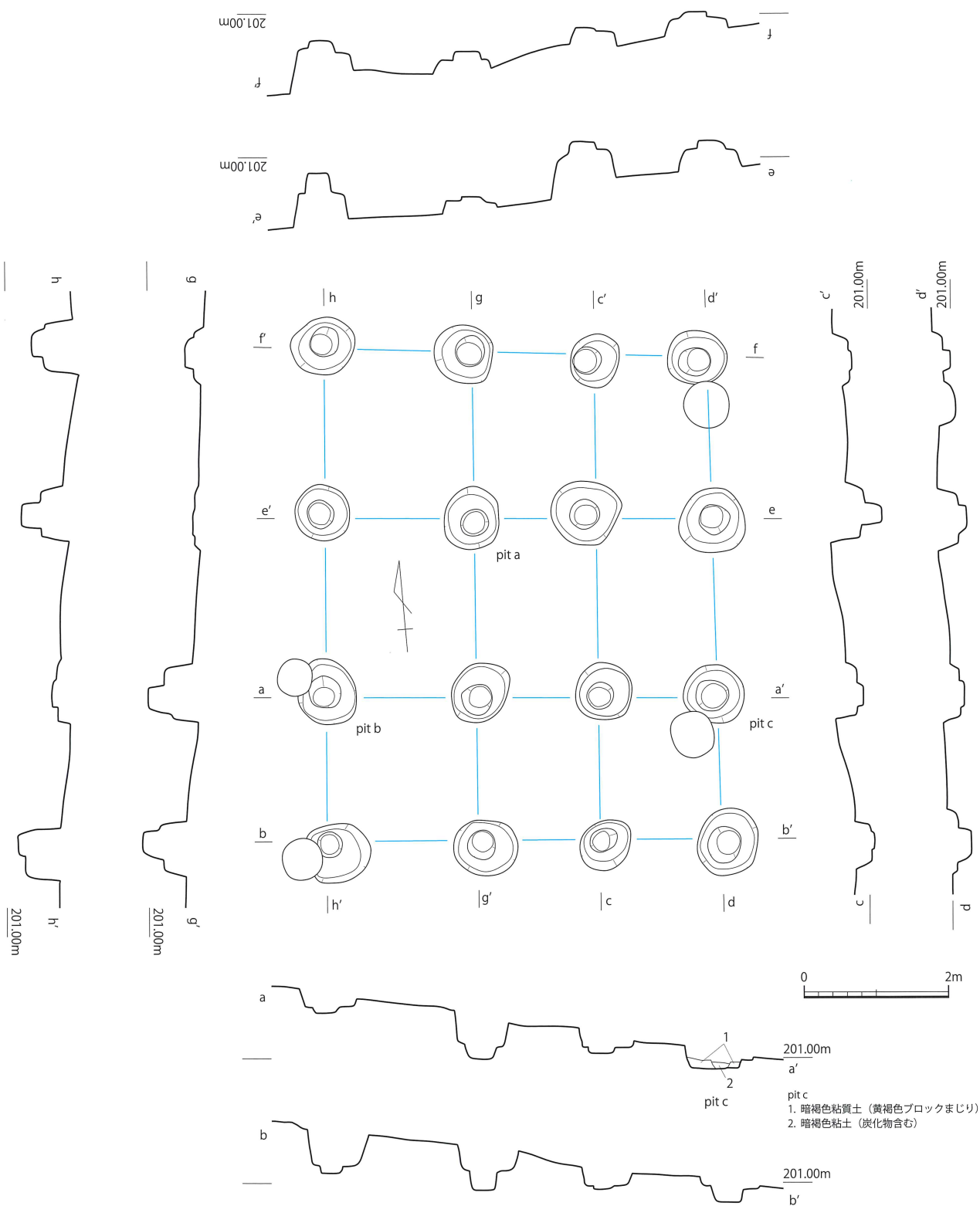
□SB25(第122図)

後述するSB27の北側柱穴列を切って作られた3間×3間の総柱建物である。南北7.0m、東西5.5mと、平面形は南北方向に長い長方形を呈する。面積は38.5m²である。桁方向の主軸はSB25やSB27とほぼ等しい。柱穴掘方は直径0.65から0.88mの円形で、深さは深いもので0.4m程度である。床には柱のあたりの窪みがある。

出土遺物は第121図386から393である。386は土師器甕の口縁部。387は黒色土器A類の碗。389から390は同一ピット出土。388は摘まみを持つ坏蓋。389は高台が外に踏ん張る高台付き坏。390は底部へラ切り離し未調整で、板状圧痕のある土師器坏である。391と392も同一ピット出土で、391は壺の頸部、392は壺の肩部か。393は甕の口縁部。



第121図 SB25出土遺物



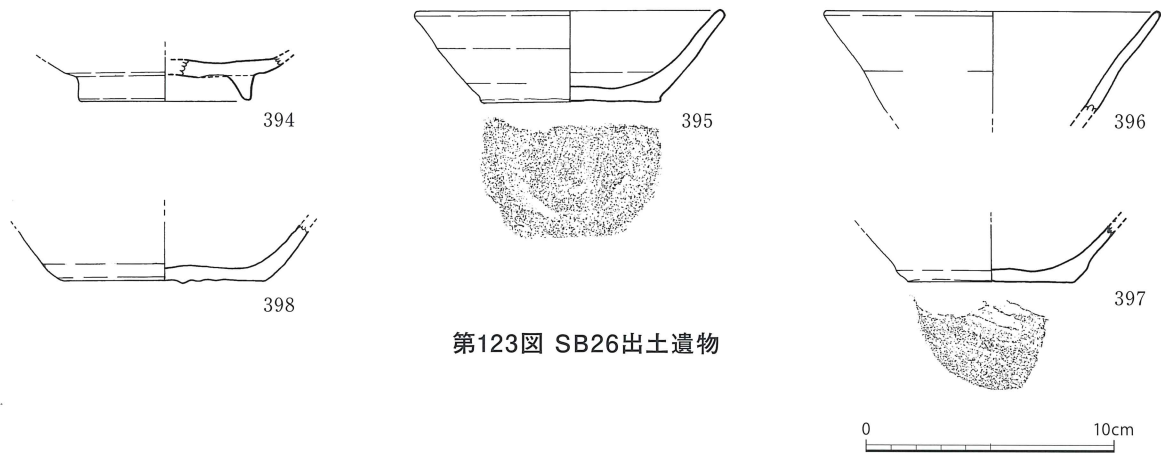
第122図 SB25

□SB26(第124図)

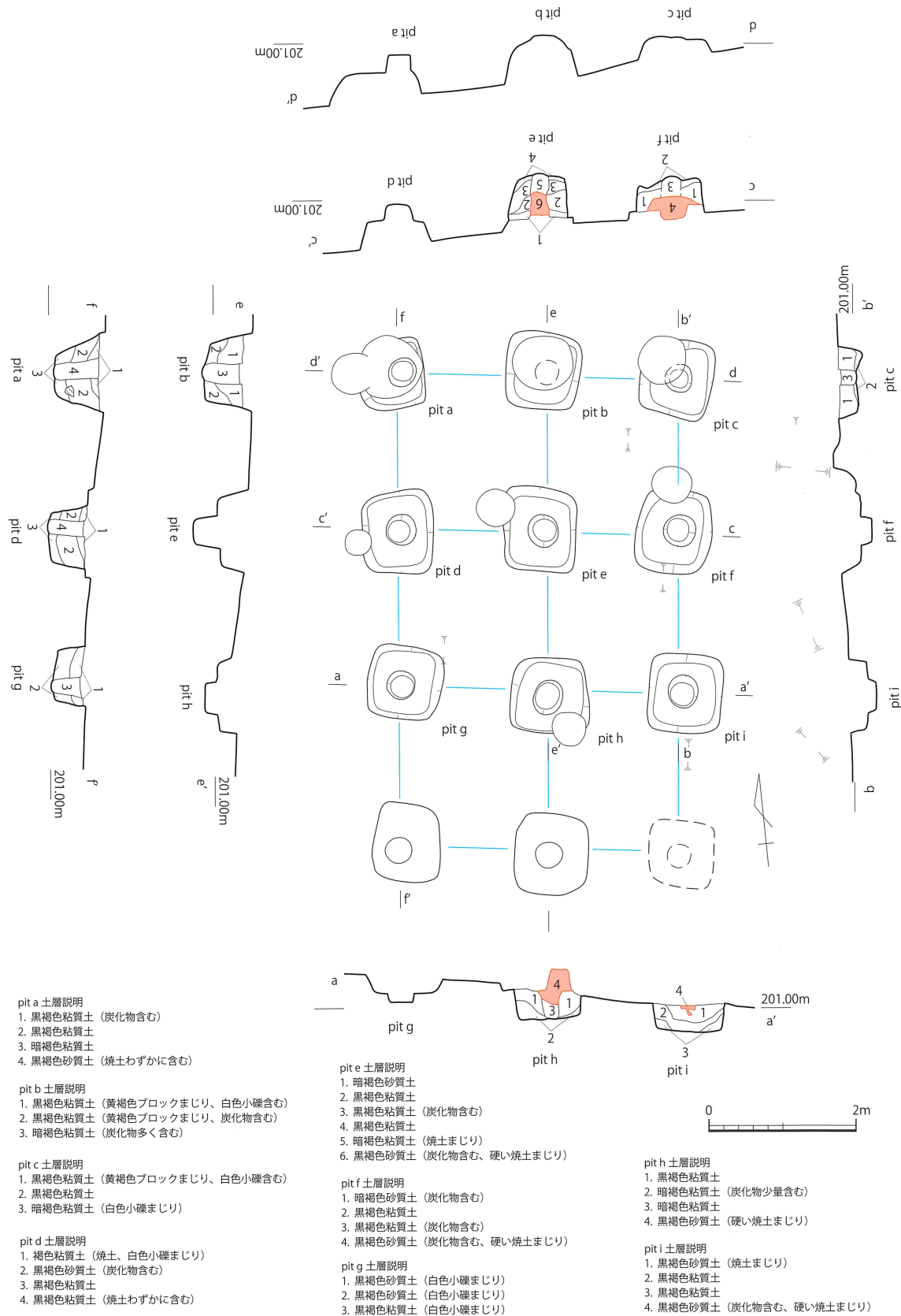
調査区の最も南端で確認された総柱の掘立柱建物である。南側はD区との境界上でわずかに掘り残し部分があったため、南側に拡張し柱穴の有無を確認した結果、2カ所で柱穴堀方が確認できたので(未掘)、この建物は東西2間、南北3間の総柱建物と考えられる。規模は、南北6.4m、東西3.8mの長方形で、面積は24.3m²である。

柱穴堀方はほぼ一辺1.0mの方形で、大部分の堀方のほぼ中央部には焼土が見られたため、焼失建物と考えられる。堀方の深さは0.2mから0.3mほどで、床には柱のあたりの窪みがある。図からわかるように、斜面に建っているため、斜面上側より下側の柱穴堀方の床が40cm程度低くなっている。

柱穴堀方からは第123図394から398の遺物が出土している。394は黒色土器A類の椀、395と396は底部へラ切りの土師器坏である。397と398は同一ピット出土で、397は黒色土器A類の碗、398は土師器坏である。底部はきれいに調整している。



第123図 SB26出土遺物

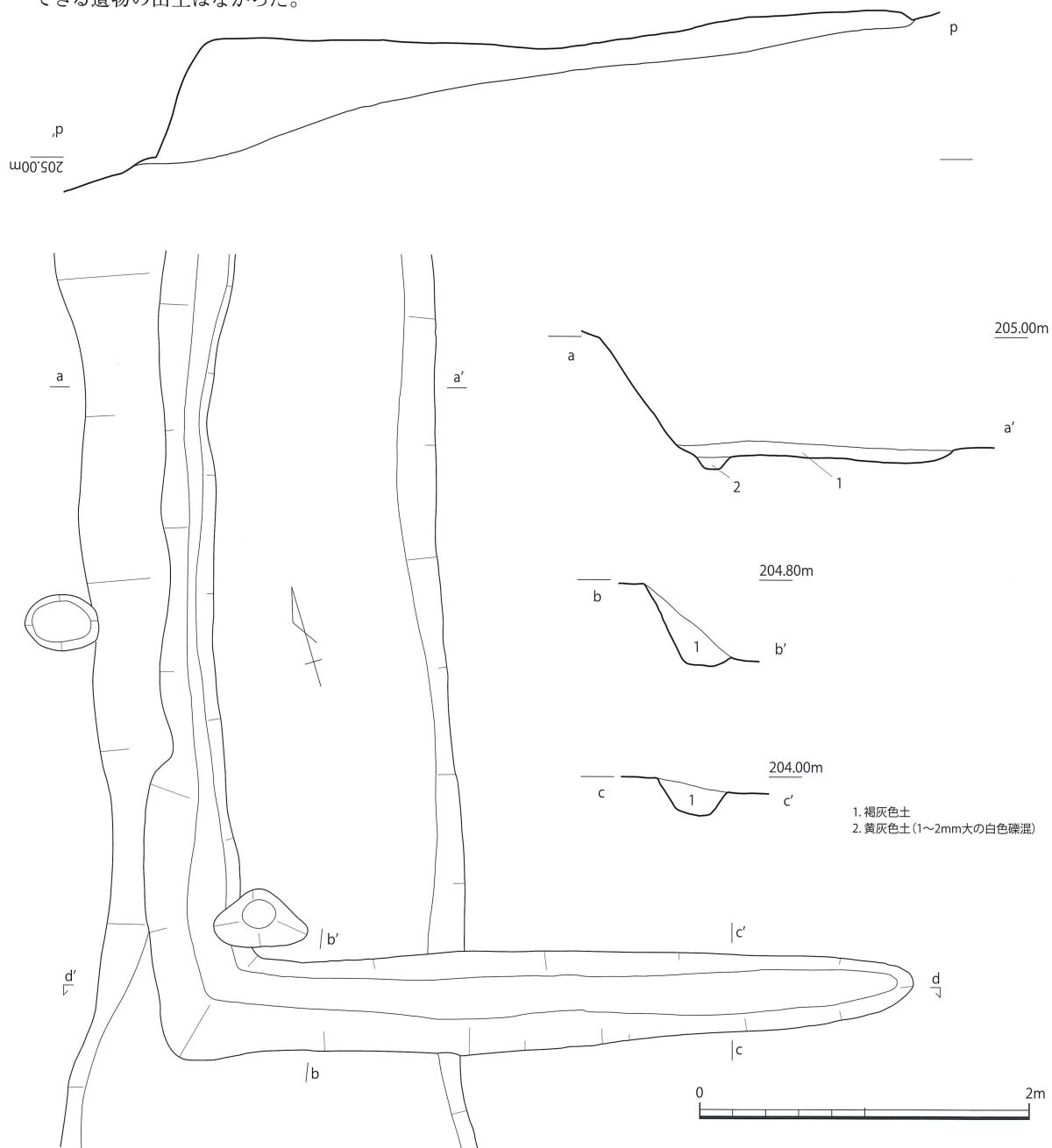


第124図 SB26

3 溝

□SD05(第125図)

調査区の北西部で検出された、SB15を囲むように作られた溝である。幅0.6m、検出した長さ9.4mである。北側はB区の方に向かうが、おそらく現道の下で東に屈曲するであろう。南西のコーナー部では、礫が積まれていた。図示できる遺物の出土はなかった。

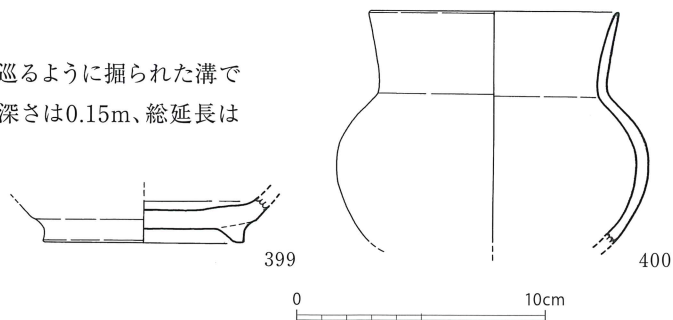


第125図 SD05

□SD06(第111図)

調査区の中央やや南寄りで検出したSB20を巡るように掘られた溝である。SK07の土坑を切っている。幅は0.6mで、深さは0.15m、総延長は12mである。

出土遺物は第126図399と400である。399は黒色土器A類の碗である。400は古墳時代の壺である。



第126図 SD06出土遺物

4 墓

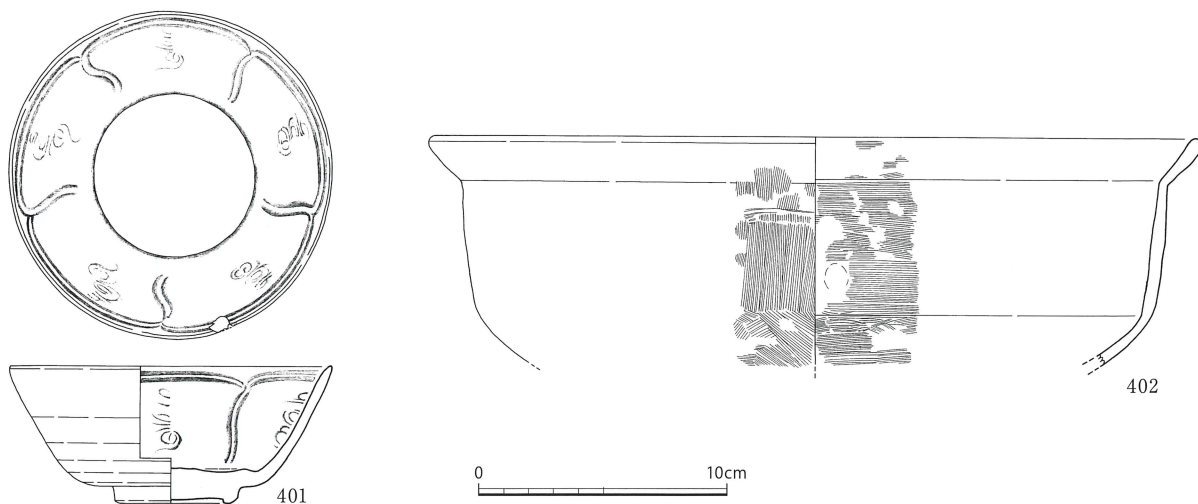
□ST01・02(第128図)

調査区の中程、山側で確認された墓である。検出当初は、厚く堆積した黒褐色粘質土中(第150図1層の中程)に人頭大の礫が集中しており、何らかの掘り込みの中に投げ捨てられたもののように思われた。しかし、遺構掘方ラインは確認できず、黒褐色粘質土の自然堆積とともに礫が何らかの作用で集まったものと解釈した。しかし、礫を丁寧に掘り出していくと、礫が2.7m×2.3mの略長方形に2段程度積まれたものであることがわかった。つまり、掘り込み中に堆積したのでは無く、逆に当時の地山面(黒褐色粘質土中のため判別できず)に積み上げられたものと判断できたのである。詳細に見ると、東西方向(高低差のある方向)は上面がほぼ水平であるのに対して、南北方向(等高線に平行の方向)では、中程が高く緩やかな山形に積まれていた。また、北東角部は礫が崩れた状態を呈していた。これは、後に下部構造の調査で判明したことであるが、追葬に伴うものであろうと思われる。礫を取り除き、約30cm掘り下げると、土坑状のラインが確認できた。上部の礫の状況を見ると、あと10cmほど上から掘り込まれていた可能性がある。確認できた土坑は2基で、礫敷きのほぼ中央に礫敷きの方位と平行する方位に掘られた長方形の大型のもの(1号墓坑)と、その北東角部を切って掘られた正方形の小さな土坑(2号墓坑)である。後者が上部の礫敷きの北東角部を乱した要因であった。1号墓坑は長軸1.72m、短軸1.05mの長方形を呈し、

深さは0.35mである。土坑の北東部床面から2~3cm浮いた状態で龍泉窯青磁碗が出土したので、墓であると認定した。土坑堆積土を見ると、自然体積状態を示しており、一挙に埋め戻された訳では無い。木質の棺などに入れられていたと思われるが、釘などの出土は無く、木棺の存否は不明である。

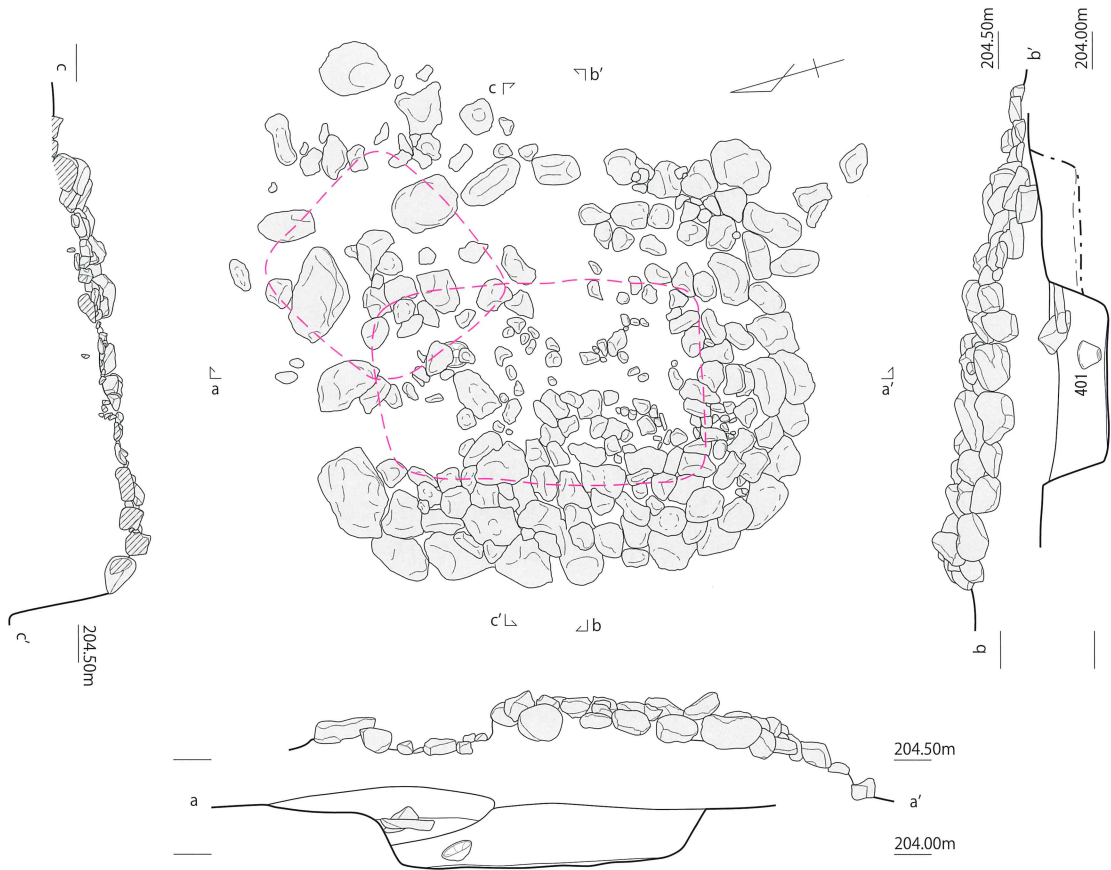
2号墓坑は1.0m四方のほぼ正方形で、深さは検出面から約0.15mと浅い。しかし、礫敷きの上部から測ると、床面までは0.75m程度となる。出土遺物は無く、墓であるとの確証は無いが、わざわざ礫敷きの中央部を避けながらも角部をわずかに切り込むのは、この礫敷きを「墓」であると認識していたことを示唆する。子どもなど近親者を追葬したものと考えておきたい。

1号墓坑からは青磁碗(第127図401)が出土している。内面に劃花文を有するI-2a類である。また、墓坑の上部に敷かれた礫の間から402の土師器鉢が出土している。

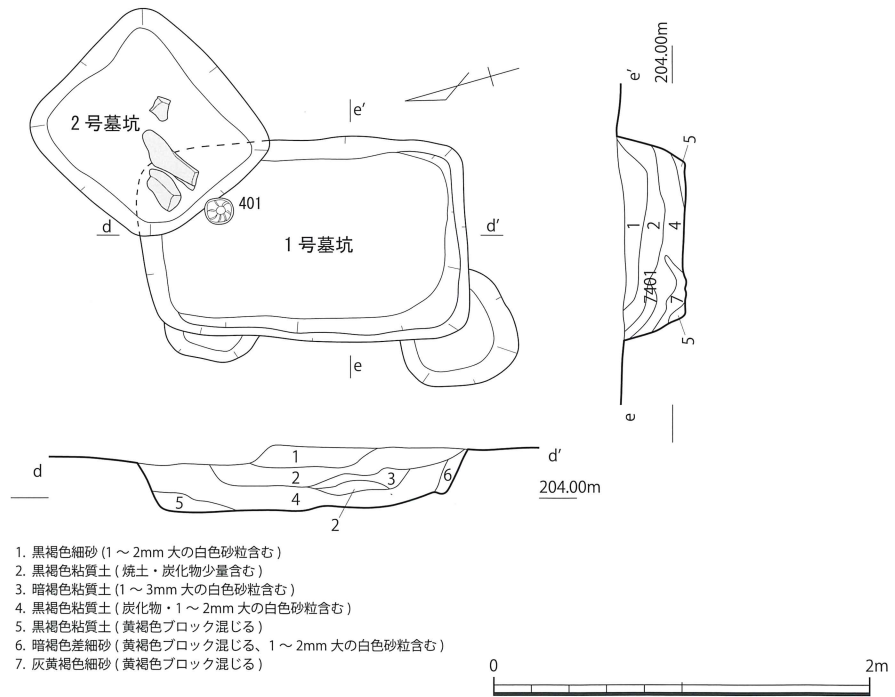


第127図 ST01出土遺物

検出状況



墓坑の状況



1. 黒褐色細砂 (1～2mm 大の白色砂粒含む)
2. 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物少量含む)
3. 暗褐色粘質土 (1～3mm 大の白色砂粒含む)
4. 黒褐色粘質土 (炭化物・1～2mm 大の白色砂粒含む)
5. 黒褐色粘質土 (黄褐色ブロック混じる)
6. 暗褐色差細砂 (黄褐色ブロック混じる、1～2mm 大の白色砂粒含む)
7. 灰黄褐色細砂 (黄褐色ブロック混じる)

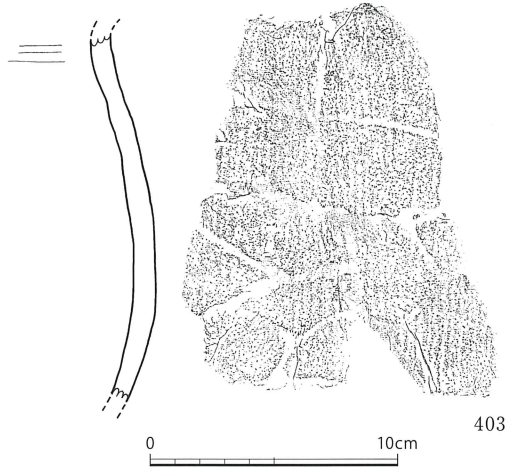
第128図 ST01

5 土坑

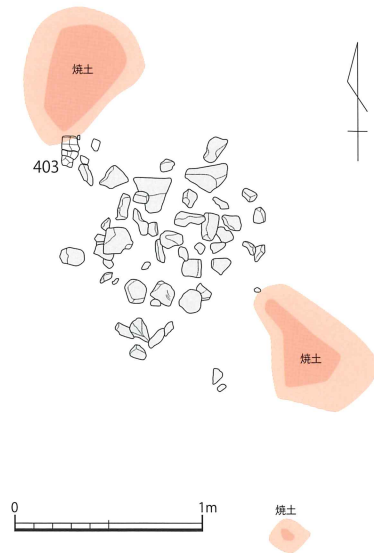
□SK05(第129図)

SB16の東に隣接してある集石遺構である。本来掘り込みがあったと考えられるので、土坑として扱う。径が0.7mほどの焼土2カ所に挟まれて礫が集中している。

礫の間から第130図403が出土している。403は土師器甕の胴部である。



第130図 SK05出土遺物

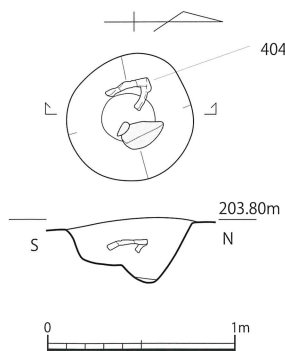


第129図 SK05

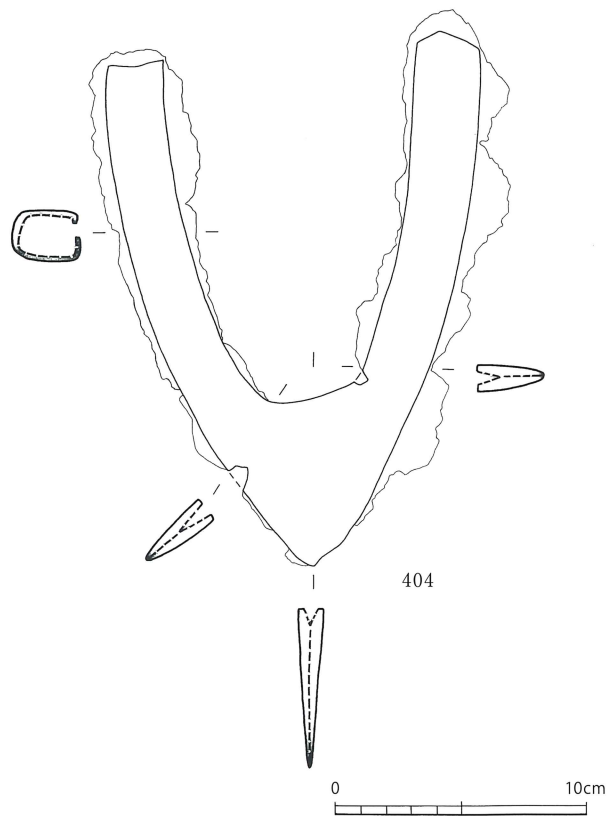
□SK06(第131図)

SB16の内側で検出された土坑である。大きさは東西0.65m、南北0.64mの円形を呈する。深さは0.32mである。内部からは鉄製の鋤先が出土した。鋤先の用途を考えると、この土坑はSB16の建築か、または背後の斜面を造成し整地した際の地鎮の遺構である可能性が高い。

第132図404が鋤先である。全体に錆が進み、表面が浮いていることもあり、細部は不明である。全長20.5cmである。



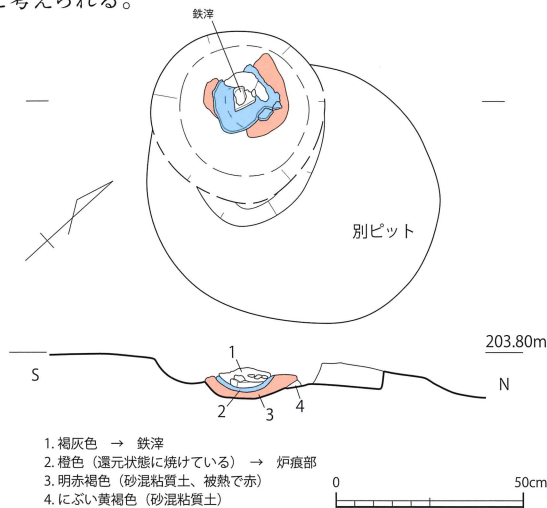
第131図 SK06



第132図 SK06出土遺物

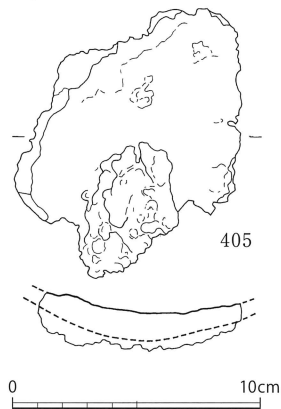
□SK07(第133図)

大きなピットを切って作られた直径0.45mの土坑である。深さは0.1m程度しか残っていなかったが、床面は表面が還元状態で橙色に硬化し、その下側は黄褐色土が被熱で赤化していた。また、橙色に硬化した面の上面には厚さ1cmほどの鉄滓が残されていた。さらに、周囲の土壌からは鍛造薄片や粒状滓が検出されたことから、この土坑は鍛冶炉であると判断した。近接する場所に焼土塊が堆積したSK07があるので、一連の工程に係る遺構群と考えられる。



第133図 SK07

鉄滓(第134図405)は、炉底に溜まっていたもので、ほぼ均等な厚さで碗型に反っており、裏側(下側)には炉壁材が付着していた。

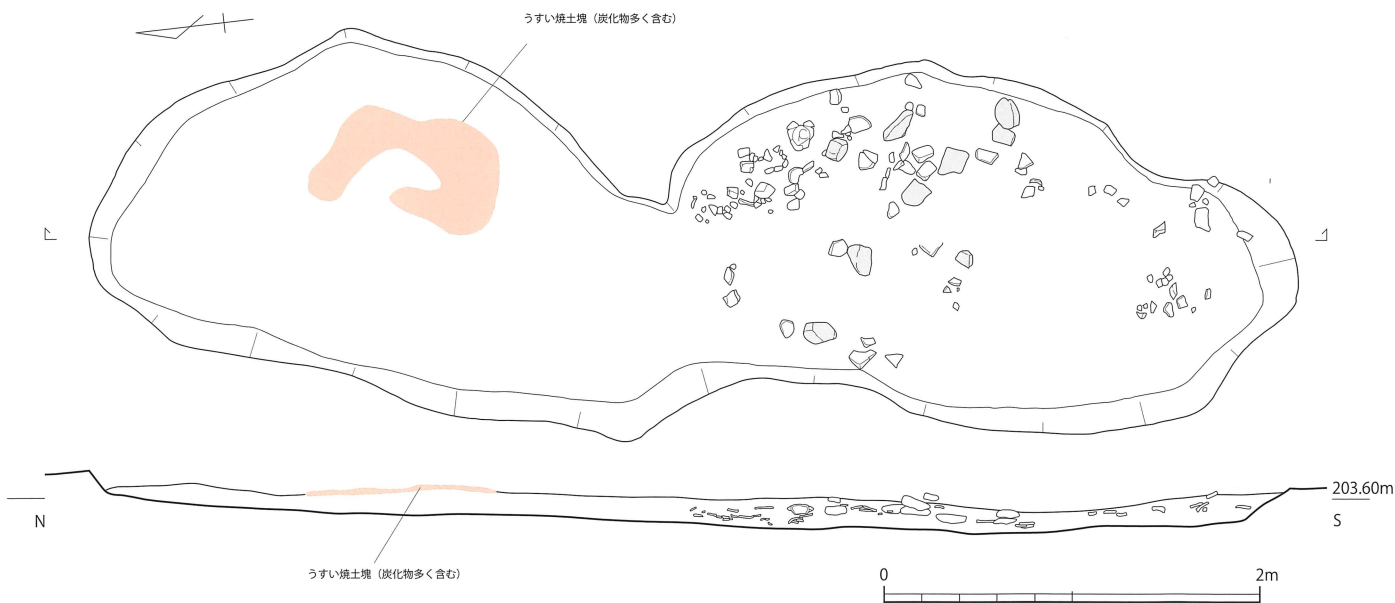


第134図 SK07出土遺物

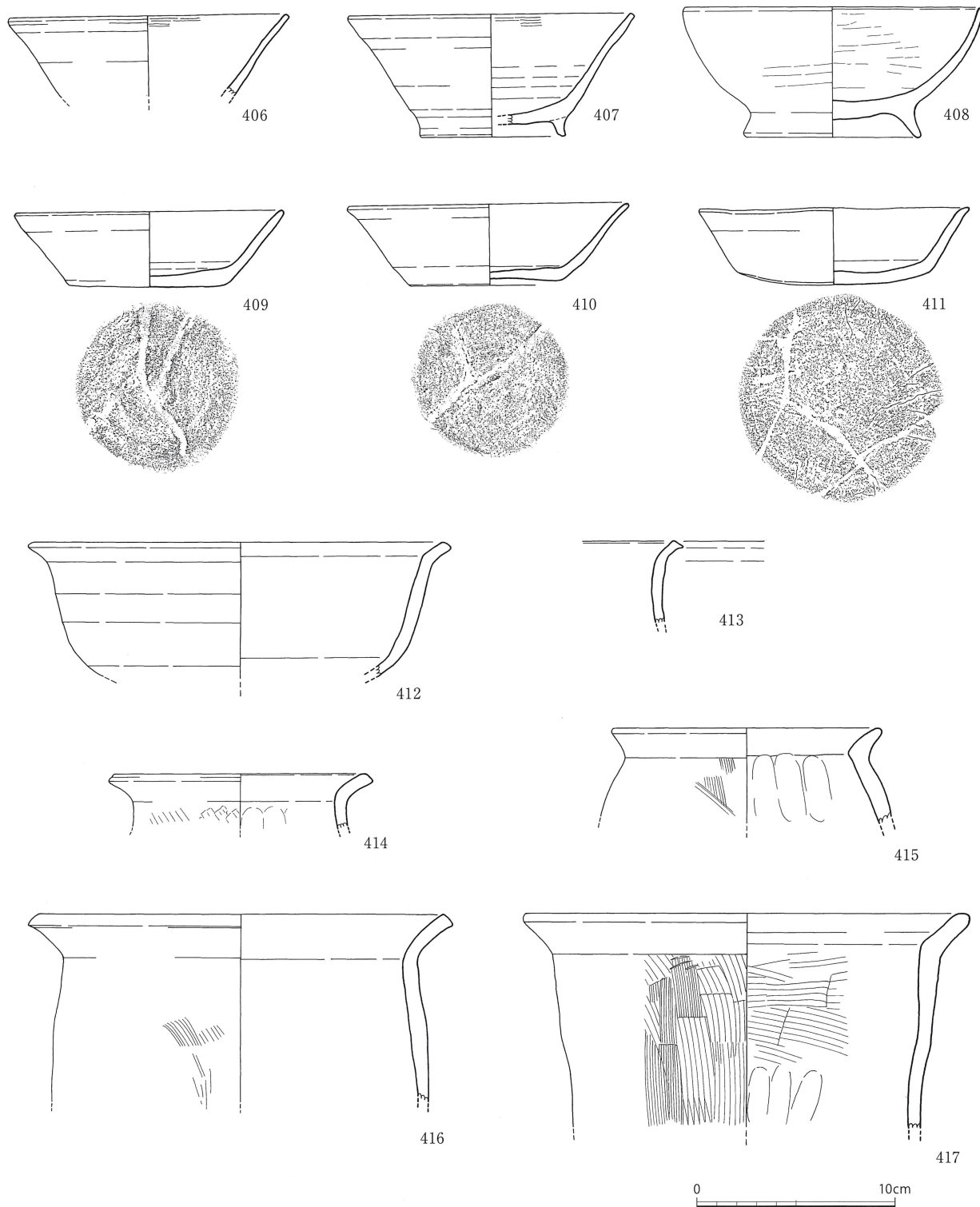
□SK08(第135図)

SK06の南側1mのところにある土坑で、二つの土坑が重なっていると考えられるが、平面的にも土層断面でも確認できなかった。北側部分は焼土塊が広がっており、南側部分は土器などの遺物が多く出土した。北側部分は、近接する鍛冶炉であるSK07との関連が考えられよう。

出土遺物は第136図406から417である。406は黒色土器A類の碗である。407と408は碗で、前者は直線的に体部が開き、後者は内湾して開く。408は胎土が在地系である。409から411は坏で、底部が平底のもの(409、410)とやや突出するもの(411)がある。412は鍋、413から417は甕である。甕は胴が張るもの(415)と、胴部が張らずに長胴気味になるもの(416、417)がある。



第135図 SK08

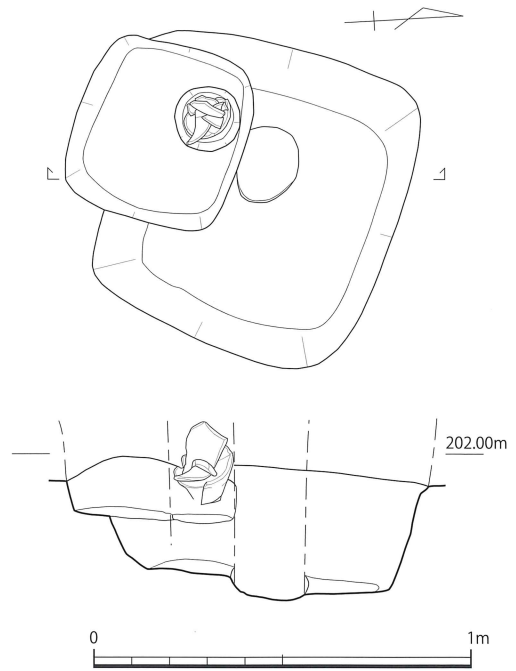


第136図 SK08出土遺物

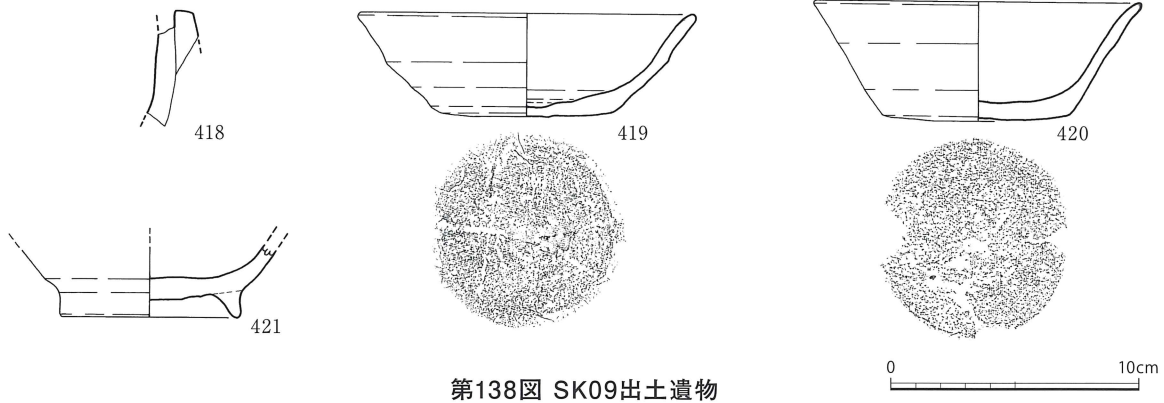
□SK09(第137図)

SB24の柱穴掘方を切って掘られた土坑である。一辺約0.45mの方形で、深さは0.2mほどである。土器が集中している箇所はやや底面が窪むことから、柱を建てた柱痕か、または別のピットであった可能性もある。

出土遺物は第138図418から421である。すべて重なった状態で出土している。418は須恵器で、縦に把手がつく壺胴部。SB24などで出土しているものと同一個体の可能性がある。419と420は土師器坏である。底部はヘラ切りで、419には板状の圧痕がある。421は土師器碗である。



第137図 SK09

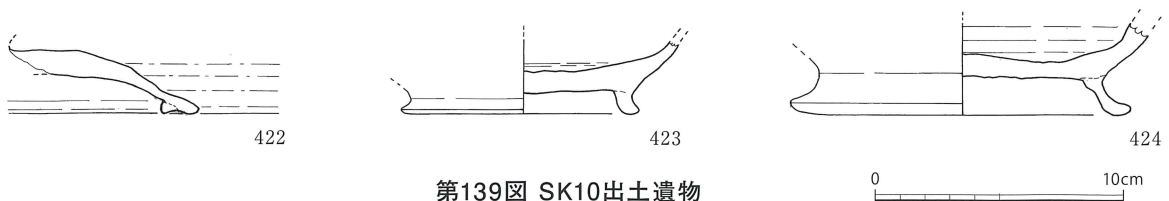


第138図 SK09出土遺物

□SK10

明確な掘り込みは確認できなかったが、凝灰岩が集まり、そこに土器が集中していたので、一括資料としてここで扱う。凝灰岩は整形したと考えられる方柱状のものと、未加工のものが混在している。周辺の掘立柱建物が建っていた時には、地表面下にあったものと思われる。

出土遺物は第139図422から424である。いずれも須恵器で、422は返りのある坏蓋で、天井部には摘まみが剥がれた跡がある。423は高台付き坏で、高台部は端部がやや外方向に開き、体部は腰を作らずにそのまま開く。424は壺の高台部であろう。高台は端部で大きく外に開く。

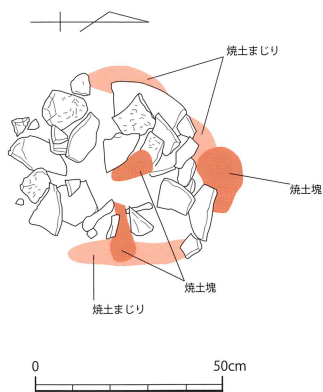


第139図 SK10出土遺物

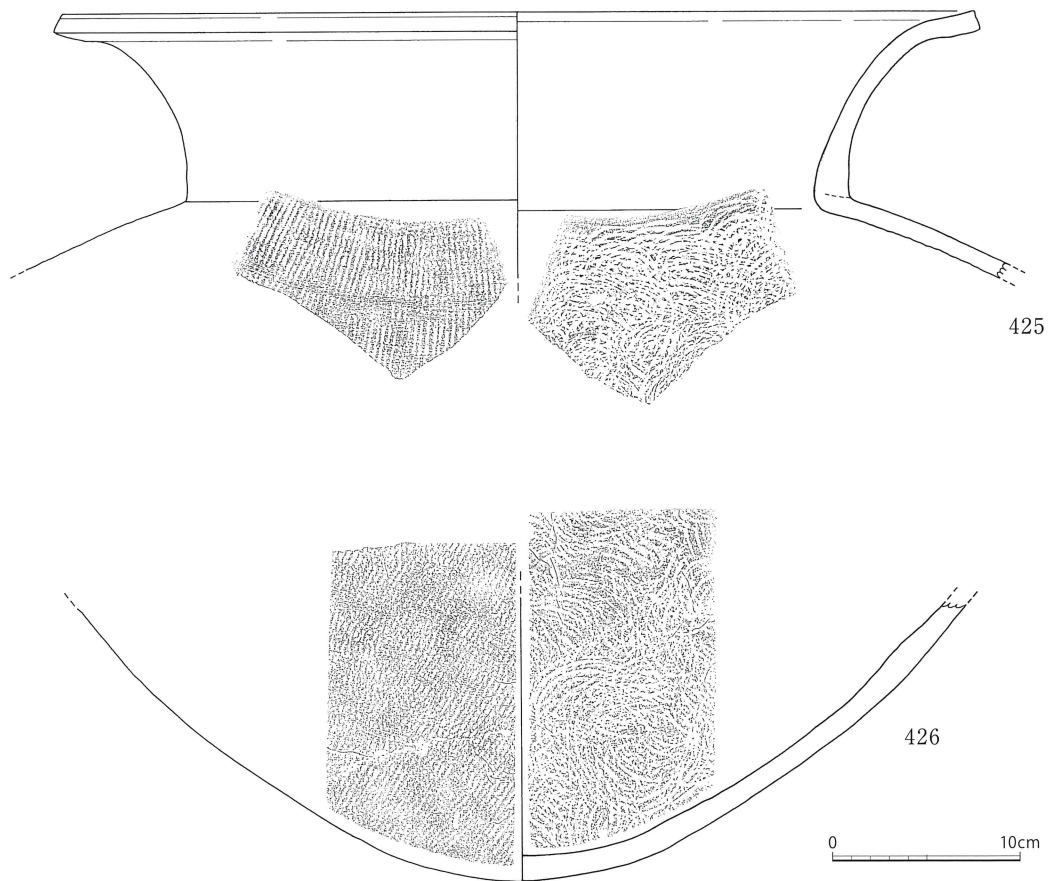
□SK11 (第140図)

SB24とSB25が重なる部分で検出された須恵器大甕を据えた土坑である。不用意に取り上げたため、断面図はないが、甕の底部が据えられた状態であった。

第141図425と426が甕で、両者は同一個体である。口縁部は水平に近く開き、胴部内面青海波文、外面平行タタキである。



第140図 SK11



第141図 SK11出土遺物

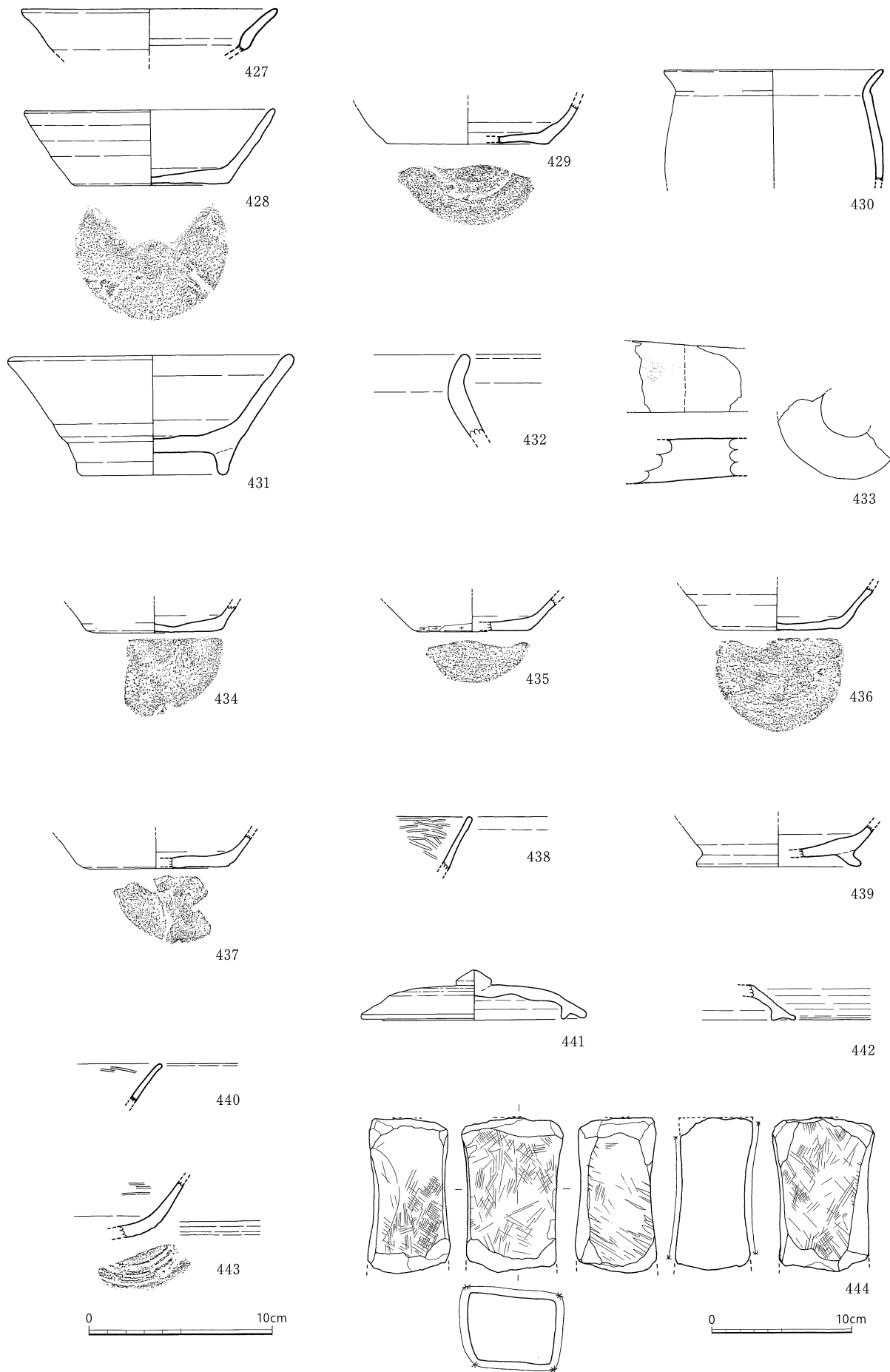
6 ピット出土遺物

ここでは、建物を構成しない柱穴から出土した遺物の説明を行う。第142図427から第145図493までである。第142図427は龍泉窯青磁皿I類である。428と429は土師器坏。底部ヘラ切り。430は土師器甕である。431は土師器碗で、やや厚手の器壁で体部は直線的に開く。432は甕である。433はフイゴの羽口で、図の左側が変色しており、左側が炉内に差し込まれた部分になる。434から437は土師器坏でいずれも底部ヘラ切りである。438は内面が磨かれており土師器の碗か。439は須恵器の高台付き坏。脚部は外側に広がる。440は黒色土器A類。441は須恵器坏蓋で、擬宝珠状の摘まみが付く。442は須恵器付き蓋で返りを持つ。443は黒色土器A類で、体部下位にロクロ痕を持つ。444は砂岩製の砥石である。

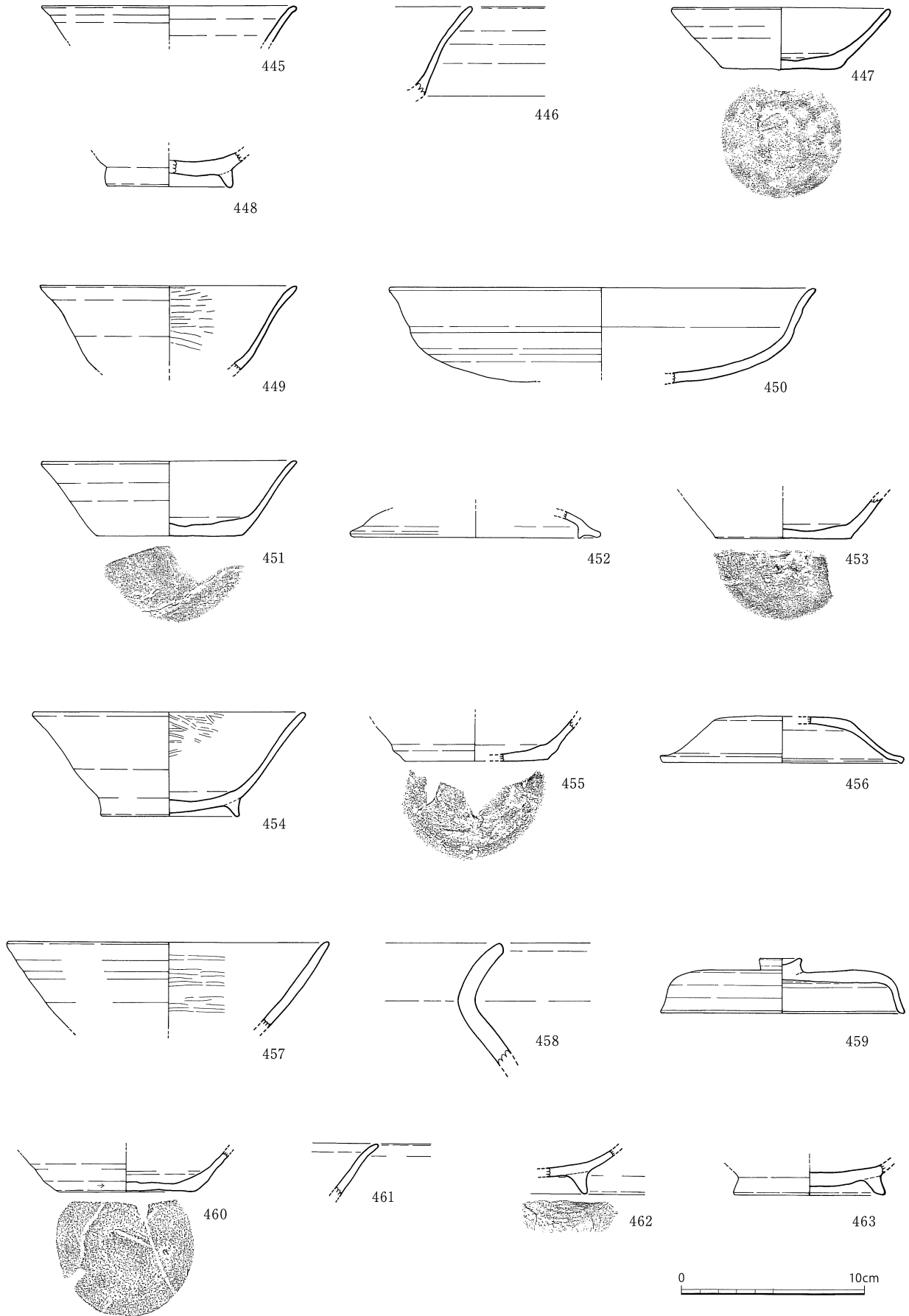
第143図445から447は土師器坏で、いずれも体部はナデ調整。448は土師器碗である。449は黒色土器A類で、内面にミガキがある。450は須恵器の大型の鉢である。復元口径は23.0cmである。451は土師器坏。452は須恵器の坏蓋で、返りを持つ。453は土師器坏。454は黒色土器A類で、内面にミガキが施される。455は土師器坏。456は土師器の坏蓋である。457は土師器碗で、内面にミガキが施される。458は土師器甕。459は須恵器の蓋で、ボタン状の摘まみが付く。460は土師器坏で、底部の外周部のみ調整。底部に板状圧痕が付く。461は土師器坏。462は土師器碗で、高台が比較的高く伸びる。463は黒色土器A類の碗。

第144図464は土師質の碗。外面は半分ほど黒色に燻されている部分がある。底部は厚い円盤状のもので、回転糸切りである。体部はほぼ直線的に開き、先端部が細る。体部下位の高台に接する部分にはロクロ痕が残る。胎土は精選されているが、茶褐色(鉄錆?)の斑点が器表に見られる。このタイプは今回の調査では唯一の資料である。467は黒色土器A類の碗である。468から470は土師器坏で、いずれもヘラ切りで体部はナデ調整。471は土師器碗で、体部下半が横に張り出してから開くもので、8世紀代である。472と473は土師器坏、いずれも底部ヘラ切りで体部ナデ調整。474は黒色土器A類の碗。口径は17.0cmと大きい。475は土師器の鉢か。476から479は土師器坏。480は黒色土器A類の碗で、復元口径は15.0cmである。481は須恵器坏蓋で、天井部はヘラ切り離しのままである。482は土師器坏で、底部は回転糸切りである。483は須恵器の短頸壺。

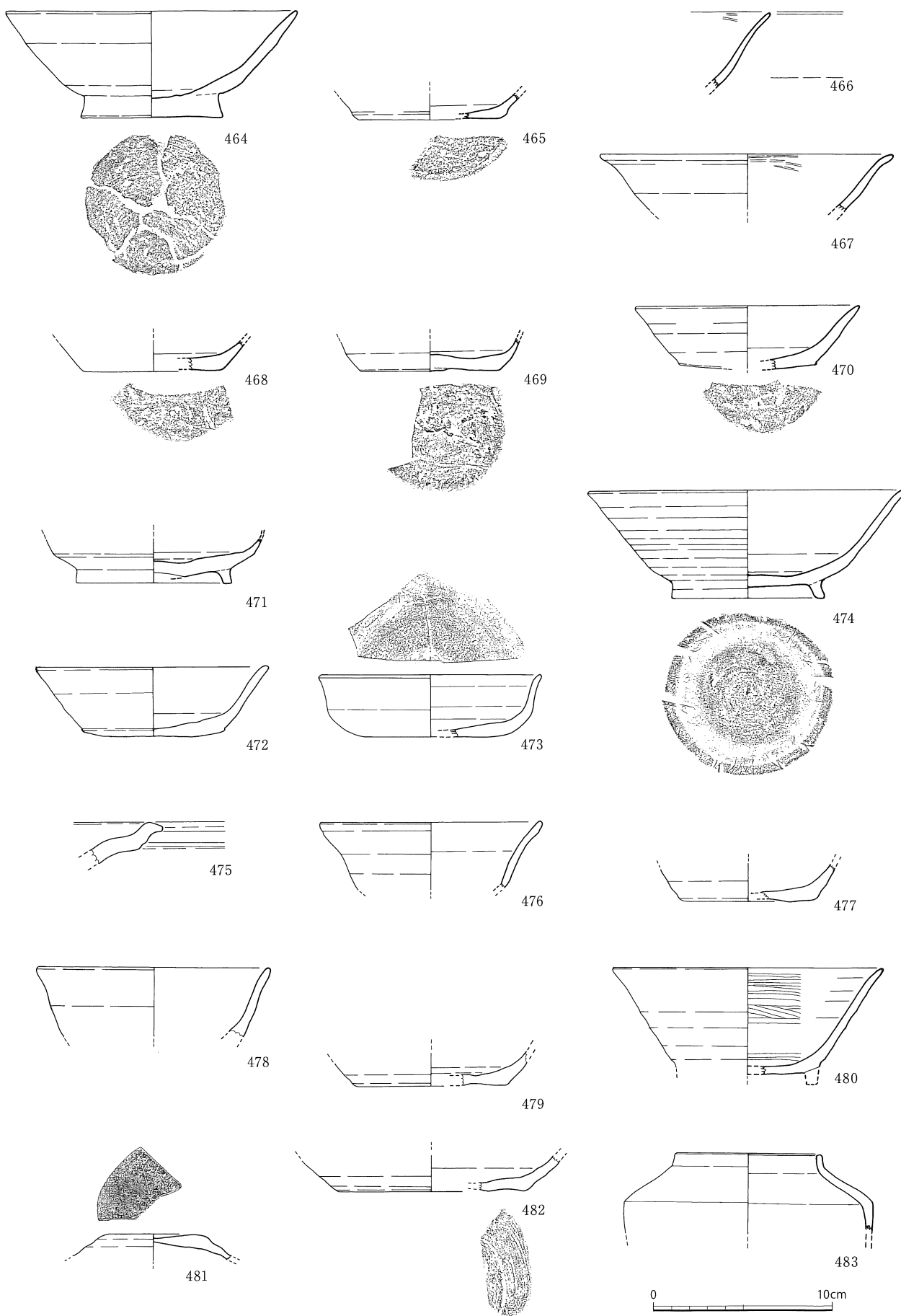
第145図484は土師器甕。485から488は土師器坏。底部ヘラ切り、体部はナデ調整である。489は須恵器甕である。大きく外反しながら開く口縁部。490は古墳時代の土師器で、外面はミガキが施される。491は須恵器坏蓋で、外面に段があり、口縁部内面には稜がある。492と493は同一ピット出土。492は青白磁の合子蓋。493は土師器坏である。



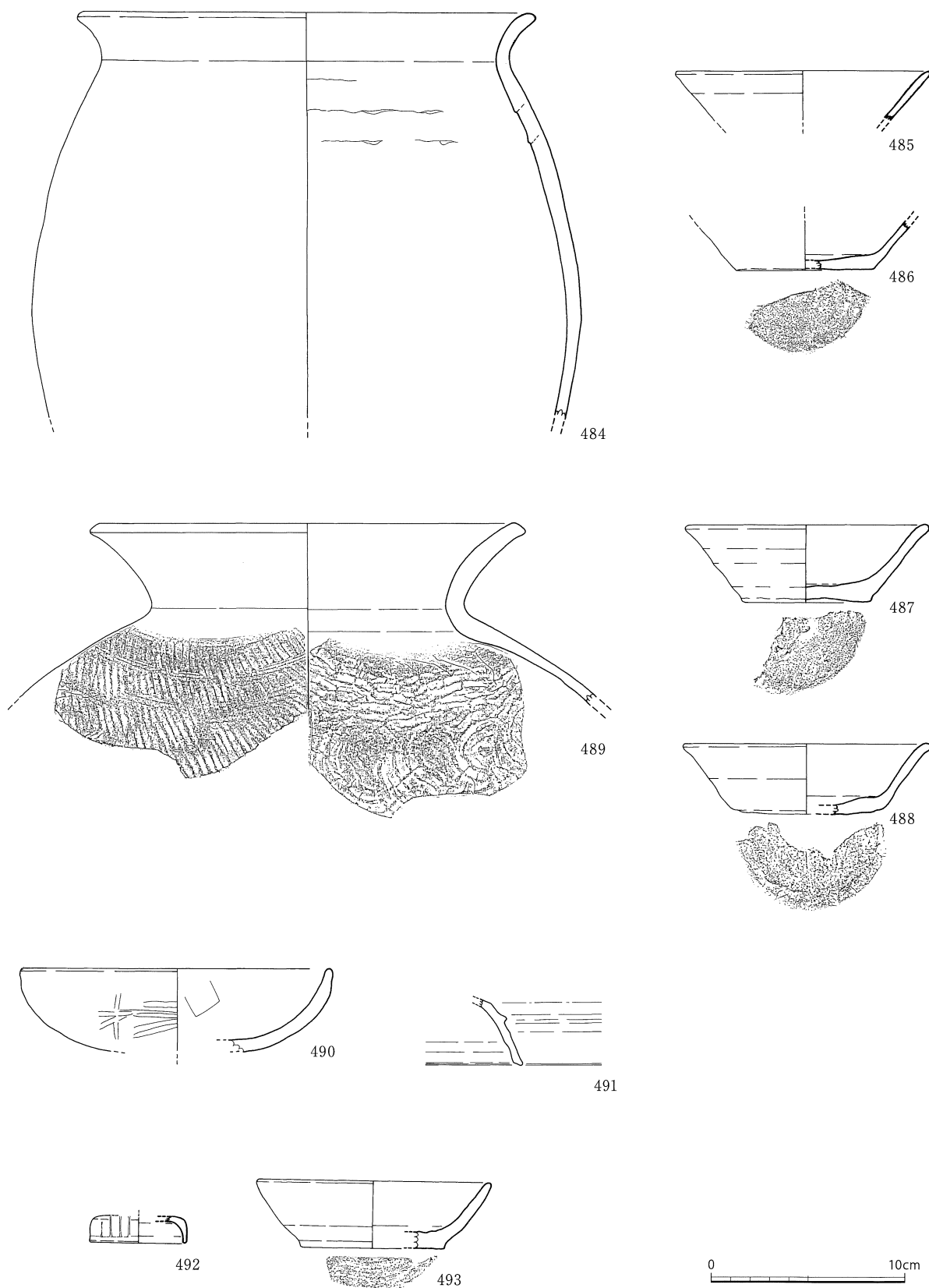
第142図 C区ピット出土遺物(1)



第143図 C区ピット出土遺物(2)



第144図 C区ピット出土遺物(3)



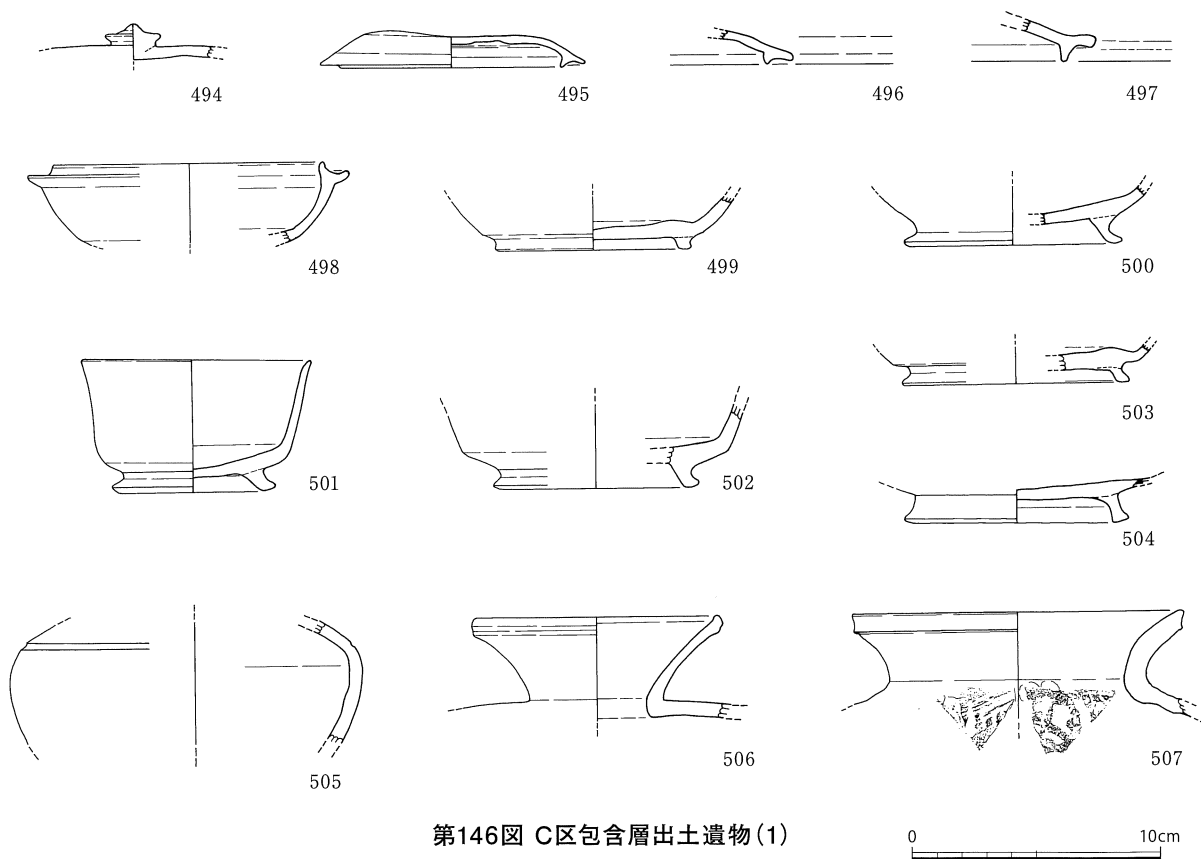
第145図 C区ピット出土遺物(4)

7 包含層出土遺物

第146図494から第148図542が包含層出土遺物である。494から507が須恵器である。494から497は坏蓋で、494には擬宝珠状の摘まみが付く。495から497はいずれも返りがある。498は坏身。499から504は高台付きの坏である。高台が小さなものから大きく外に開くものまである。501は小型のもので、類似の資料は豊後高田市の西田古墳で出土している*。505と506は壺、507は甕である。

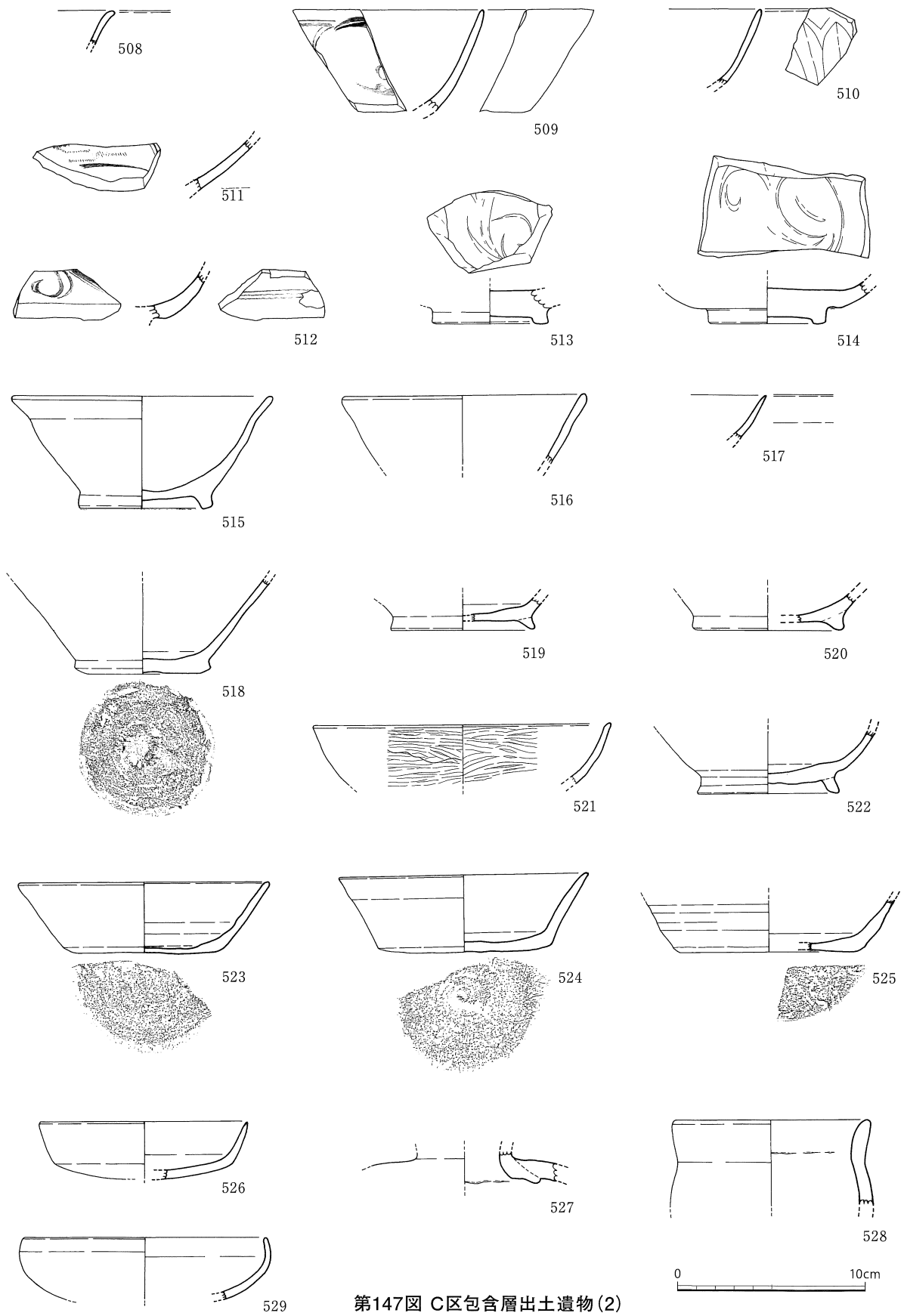
第147図508から514は陶磁器。508はC区で唯一の越州窯青磁碗の口縁部。端部が外反しながら開く。被熱で内外面とも輝きを失っている。胎土は灰色で、黒色粒が僅かに含まれる。511を除き509から514は龍泉窯青磁。514は内面に花文を描く。510は外面に鎬蓮弁文を描く。511は同安窯青磁の碗である。515は土師器碗で、高台部がしっかりし、口縁部は端部で外方に折れ開く。516も土師器碗か。517は土師器坏。518は底部が円盤状となり、直線的に開く体部を持つ土師器坏。越州窯青磁碗の写しか。519と520は土師器碗。521は内外面ともよく磨かれた黒色土器A類の碗。器壁は薄く、口縁端部内面に稜を持つ。522も黒色土器A類の碗。523から526は土師器坏である。527は土師器の壺頸部。528は土師器の鉢。529は古墳時代の土師器鉢である。

第148図530から534は甕である。口縁部は緩やかに屈曲するものが多い。535は甌。536は土師器の把手である。537は泥岩製の砥石。538は安山岩製の石斧。539は安山岩製の叩き石である。540から542は鉄釘である。



第146図 C区包含層出土遺物(1)

*6 『佐野地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市教育委員会 2002



第147図 C区包含層出土遺物(2)



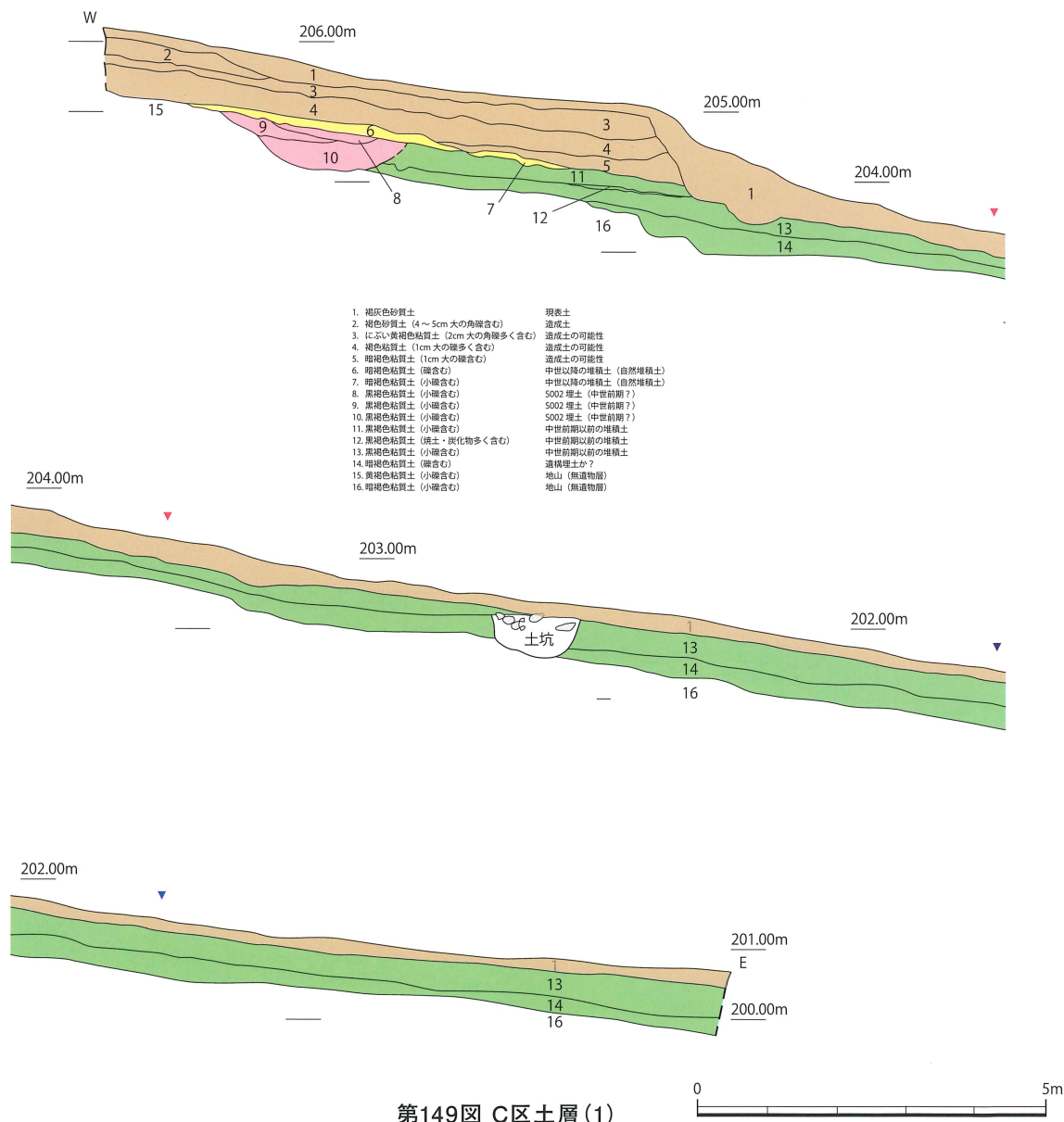
第148図 C区包含層出土遺物(3)

8 土層説明

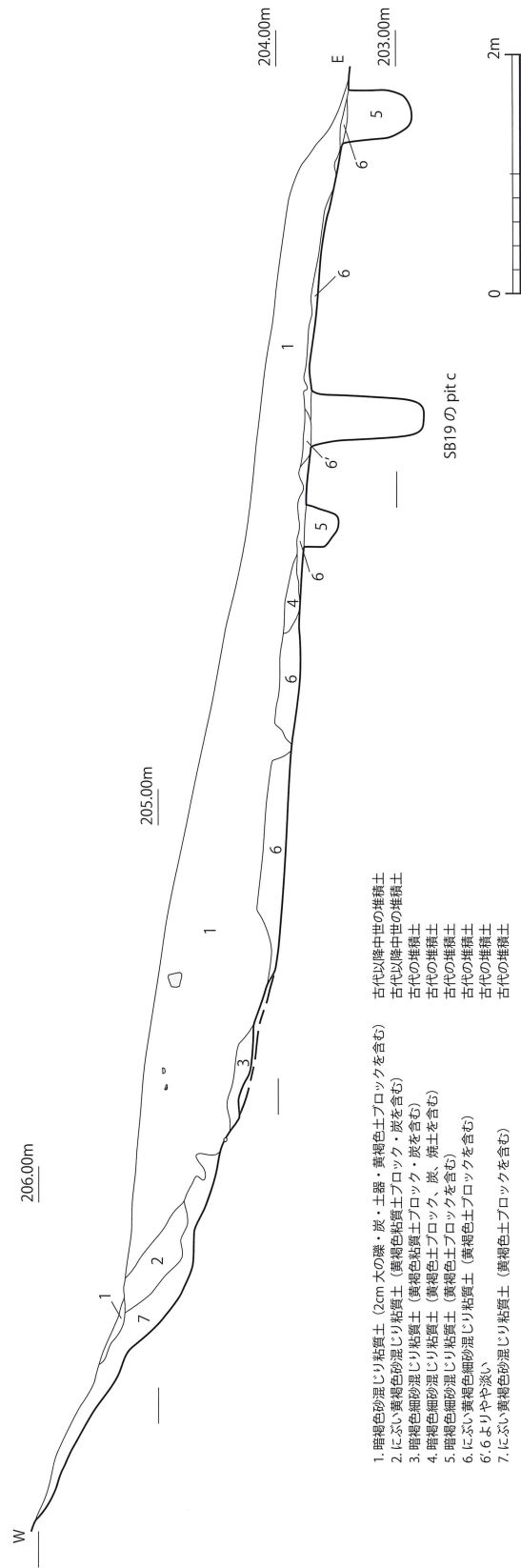
ここでは、C区の北壁の土層(第149図)、および古代の掘立柱建物が建っていた整地された部分の土層(第150図)の説明を行う。

まず北壁である。重機による表土除去は行っていない部分なので、調査前の表土から図示している。1層から5層は現在の畑地に伴う耕作土および造成土である。特に2層から5層はある段階での段々畑造成を示しているが、時期は不明である。8層から10層は、中世初期の建物(SB15)に伴う溝である。この溝が切っている11層から14層が古代の遺物包含層で、この中で遺構面も形成されているため、遺構ラインの識別が非常に困難となっている。

また、第150図はX=3135付近の断面図である。(第96図に表示)ここで地山となるのは黄褐色ローム土で、7層の堆積以前に黄褐色ローム土を削り平坦面を作り出しているのがわかる。7層はその後の風化土である。黄褐色ローム土の直上に載る6層は整地土である。地山を含むので、削りだした土を利用したことが分かる。その上部に載る1層は北壁の11層から14層に相当する古代から中世にかけての堆積土である。北壁ほど分層できなかった。すぐ北側にあるST01(墓)の礫は、この1層の中程に積まれていた。



第149図 C区土層(1)



第150図 C区土層(2)

9 小結

C区は、加原遺跡の中でも、古代に関しては中心的な地区となる。総柱の倉庫が並ぶ一角と、板張りの住居と考えられる建物、そして庇を有する主屋と考えられる建物がコンパクトにまとまる。建物は、1度建て替えられているものがあるので、半世紀近くは存続したものと考えられる。通常の村落では無い、有力者の居住した「屋敷」と言えるだろう。また、中世初期にも掘立柱建物群があり、青磁碗を副葬した土坑墓が作られるなど、有力者が引き続き居住したことがわかる。しかし、鎌倉時代以降は全く遺物が無く、この地は耕作地などになったものと思われる。集落は現在のように、さらに山側に移ったのであろう。

なお、B区で確認された稲作に関わる土層や、弥生土器の包含層はC区では認められなかった。

(4) D区

D区はC区の南にあり、最も狭い調査区である。調査区全体からは溝以外明確な遺構が検出されなかった。やや谷地形となっていたためか、黒褐色粘質土が東端では1.5m以上も堆積し、黄褐色ローム土が確認できないなど、本来遺構が形成されていなかった可能性が高い。遺物も図化できるような遺物がほとんど出土しなかったことからそう言えるであろう。

しかし、特にC区に隣接する部分では、掘立柱建物を構成する柱穴がD区まで伸びていたことが想定されるので、黒褐色粘質土の中で遺構検出が困難だった点もあるだろう。その点を考慮しても、C区の掘立柱建物群がC区とD区の間で終結していたことは間違いない。

1 溝

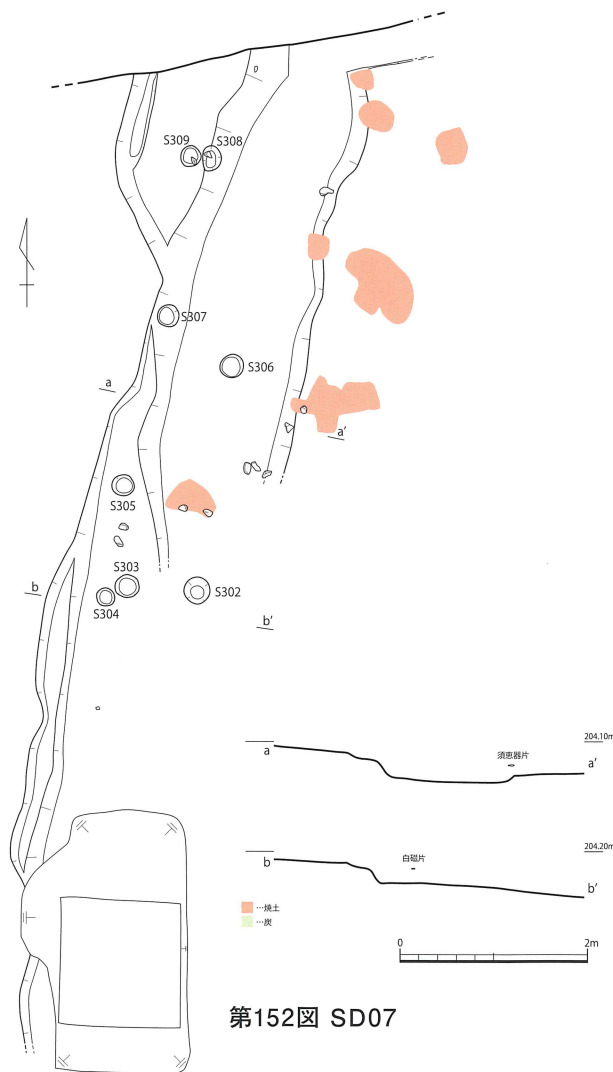
□SD07(第152図)

調査区の西側で、段落ちに沿って南北に延びる溝である。調査区内で21.0mほど確認しているが、東側の立ち上がりが確認された部分は8.9mである。その部分の幅は0.25mから0.30mほどで、深さは約0.1mである。北側のC区では東側の立ち上がりは確認されておらず、溝として認識していないが、本来は崖面を削ってきた平坦部に溝を設けていたものであろう。

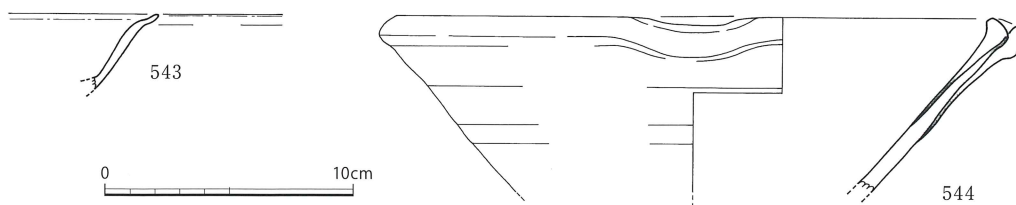
出土遺物は第153図543と544である。543は白磁の小皿で、口縁部は内面端部が6mmほど口禿となる。544は東播系須恵器鉢である。口縁端部が僅かに上方に伸びる。小皿は山本分類IX類の小皿であり、今回の出土遺物の中では最も新しい13世紀後半から14世紀前半の遺物ということになる。



第151図 D区遺構配置図



第152図 SD07



第153図 SD07出土遺物

2 小結

D区は遺構の多いC区とE区に挟まれた地区であるが、遺構は少ない。このことは、黒褐色粘質土が1.5m以上も堆積していたことわかるように、本来両側のC区とE区に比べてやや谷状に低くなっていたことが要因であると考えられる。古代の遺構が無く、SD07のように13世紀後半から14世紀前半段階での遺構の形成が見られることを考えると、この谷地形が中世になってからほぼ埋まりきって、土地利用が可能になったことを示していると考えられる。

(5) E区

今回の調査では最も南に位置する調査区である。南側は現道にすり付く形で細くなっている。このE区もやはり黒褐色粘質土が堆積していたが、あまり厚くなく、遺構検出はその下の黄褐色ローム土で行った。

出土遺構は、竪穴建物2基、掘立柱建物3棟、溝6条、柱穴列2条、墓1基、土坑6基である。

1 竪穴建物

□SH23 (第155図)

調査区の北側で確認された竪穴建物である。東側は後世の削平により壁が無くなっている。規模は南北4.0mで、西側の一番深いところで深さは0.3mである。西側壁の中央付近には壊された竈の残骸が床に堆積していた。柱穴などは確認できなかった。また、竪穴の西側の外には、溝SD10が竪穴と平行して掘られており、SH23と関係があると考えられる。

図示できる遺物は出土しなかった。



第154図 E区遺構配置図

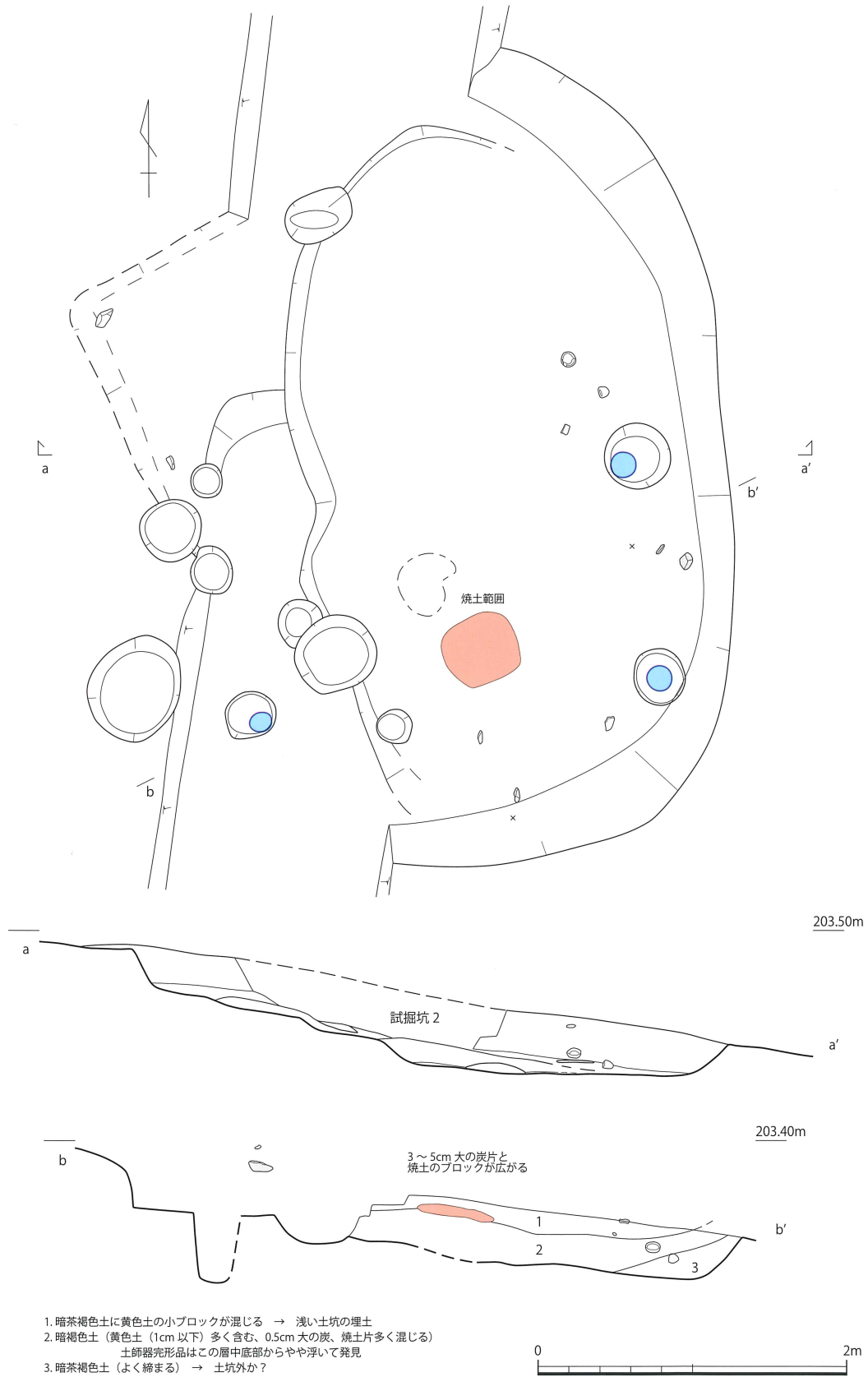


第155図 SH23

□SH24(第156図)

調査区のほぼ中央で確認された、隅丸方形を呈する竪穴建物である。試掘時のトレンチで一部壊されているが、南北方向には5.3mの長さがあったと想定される。深さは0.3mほどあり、床面は川側(東側)に向かって若干傾斜している。

出土遺物は第157図545から547である。545は須恵器大甕の口縁部である。546は鉢で、547はミニチュア土器である。



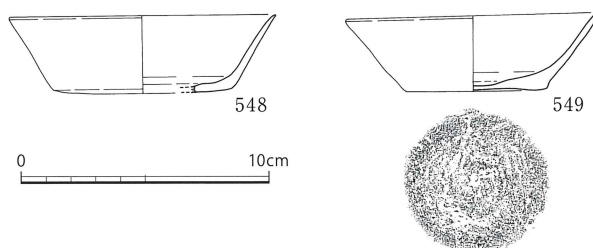
第156図 SH24

2 掘立柱建物

□SB27(第158図)

調査区の北寄りで確認された掘立柱建物である。2間×2間で、南北3.4m、東西2.6m、面積8.8m²である。柱穴の大きさは直径0.4mから0.5mほどで、深さは深いもので0.4mある。柱穴からの出土遺物は無い。西側(山側)にはあたかもSB28を囲むようにSD10がある。これは、B区やC区の建物とその背後の溝の組み合わせから見て、中世段階での共通する建物のあり方なので、このSB28も、柱穴規模からしても中世の所産といえるであろう。

出土遺物は第159図548と549である。いずれも土師器坏である。底部はヘラ切り離しである。

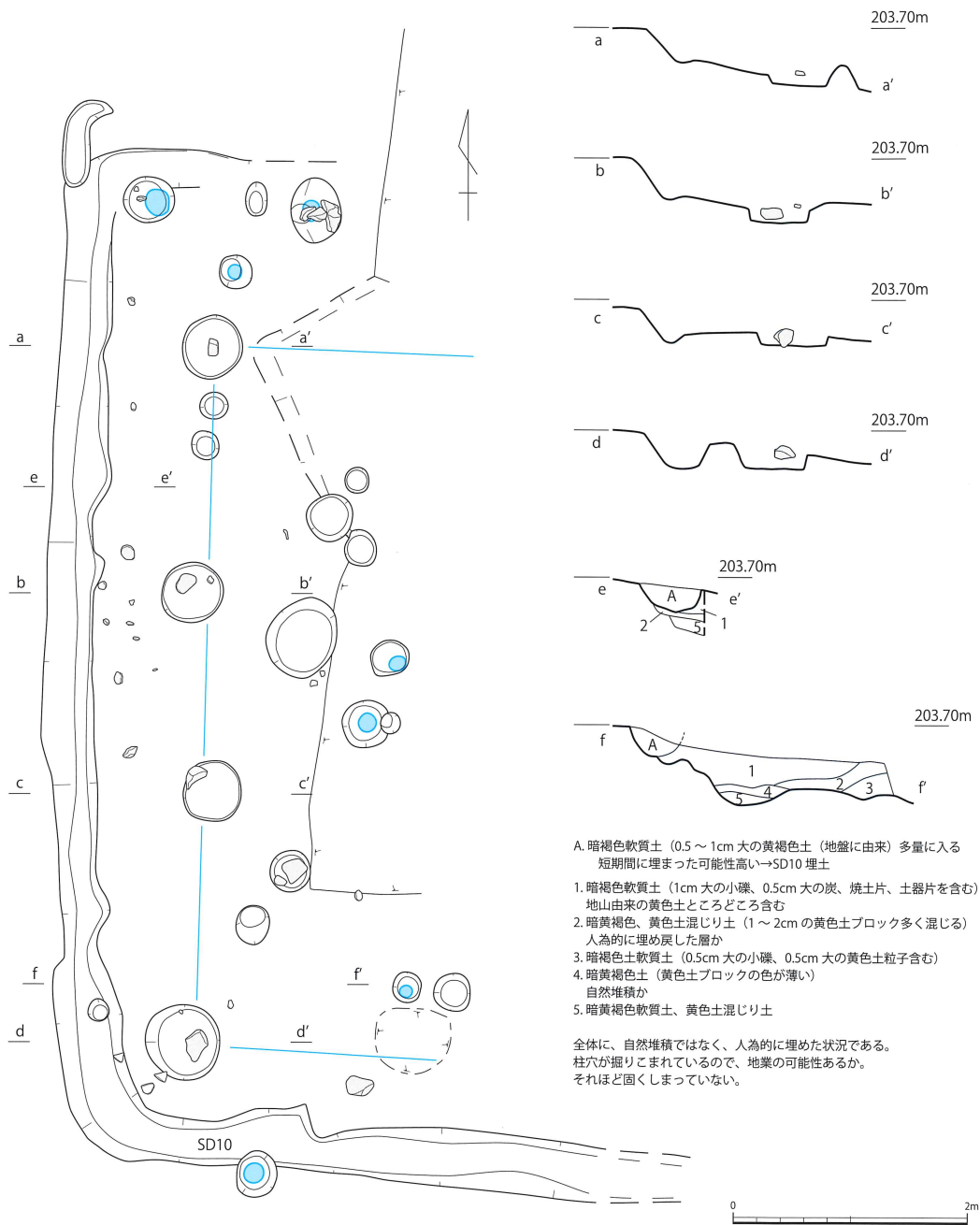


第159図 SB27出土遺物

□SB28(第160図)

調査区のほぼ中央で確認された掘立柱建物である。南北方向に3間確認できたが、東西方向は削平のため柱穴を確認することはできなかった。しかし、山側(西側)のSD10との関係を考えると、SB28同様に掘立柱建物があったと考えられる。柱穴は直径0.5mから0.65mの円形で、深さは0.1mほどしか残されていない。南北の規模は5.8mである。

柱穴からの出土遺物は無い。しかし、状況から中世のものと考えられる。



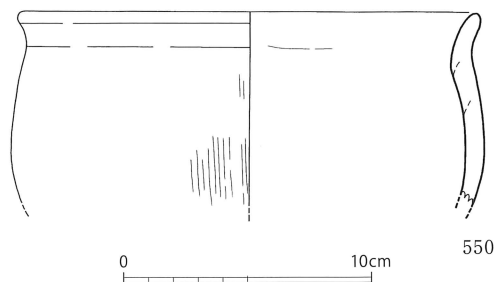
第160図 SB28

3 溝

□SD08

調査区の北側の西壁に沿って検出された溝である。SD27を囲むように「コ」字状に伸びる。南北方向に10.2mで、幅0.4m、深さは0.1mである。途中で一端途切れるが、そこにはST02の土坑墓がある。ただし、切り合い関係は不明である。

図示できる出土遺物はない。



第161図 SD09出土遺物

□SD09(第155図)

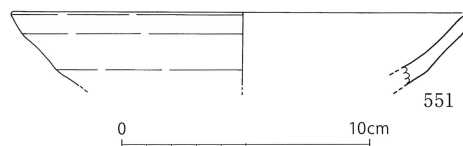
SH23の西側に沿うように伸びる溝である。幅は0.5mから0.6m、深さは0.2mである。南北の両端は、南側は攪乱で不明であるが、北側はSH23と同じ位置で終結している。SH23との関連が考えられる溝である。

出土遺物は、第161図550の土師器甕である。口縁部が緩やかに屈曲する。

□SD10(第160図)

SB25の西側を囲むように伸びる溝である。段差のすぐ下で、幅0.4mから0.5m、深さ0.3mで等高線に沿って南北方向に8.1m伸び、南側で直角に曲がり、東に約4m伸びて傾斜によって消滅している。北側は、やはり直角に折れ東に向かうが、すぐに溝は消滅している。いずれも本来はもう少し東に伸びていたと思われるが、後世の削平により消滅したものであろう。SB25に対して、山側からの水を切る役目を果たした溝であろう。

出土遺物は第162図551である。551は土師器坏である。

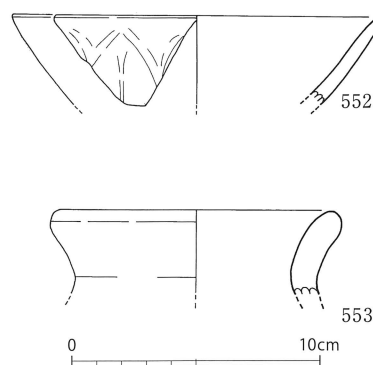


第162図 SD10出土遺物

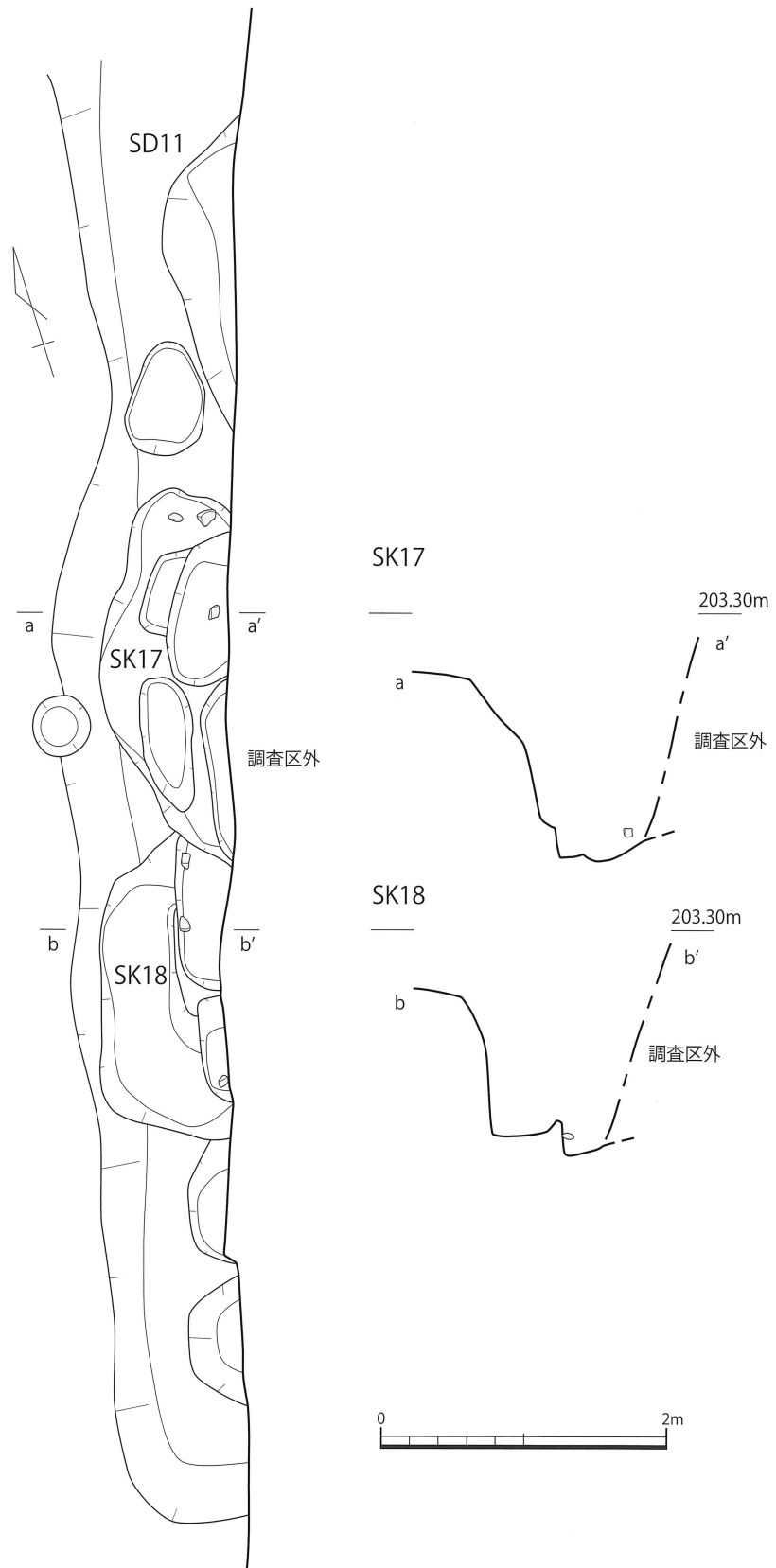
□SD11(第164図)

調査区の南東部の壁に沿うようにして検出された溝状遺構である。東側の立ち上がりが調査区外となるため、厳密には溝となるかはわからないが、南端で終結する状況から溝状遺構と考えた。全長は27.0m確認している。

出土遺物は第163図552と553である。552は鎬蓮弁文を持つ龍泉窯青磁碗である。553は土師器甕の口縁部。やや厚手のものである。



第163図 SD11出土遺物



第164図 SD11

4 柱穴列

□SA02

SB28の西側に3本並ぶ柱穴列である。柱穴は0.35mほどの円形で、深さは0.4mほどある。後述のSA03と一体になることも考えられるが、わずかに軸が異なるので、別と考える。

□SA03

SB28の西側に3本並ぶ柱穴列である。柱穴は0.3mから0.4mほどの円形で、深さは0.4mほどある。前述のSA02と一体になることも考えられるが、わずかに軸が異なるので、別と考える。

□SA04 (第165図)

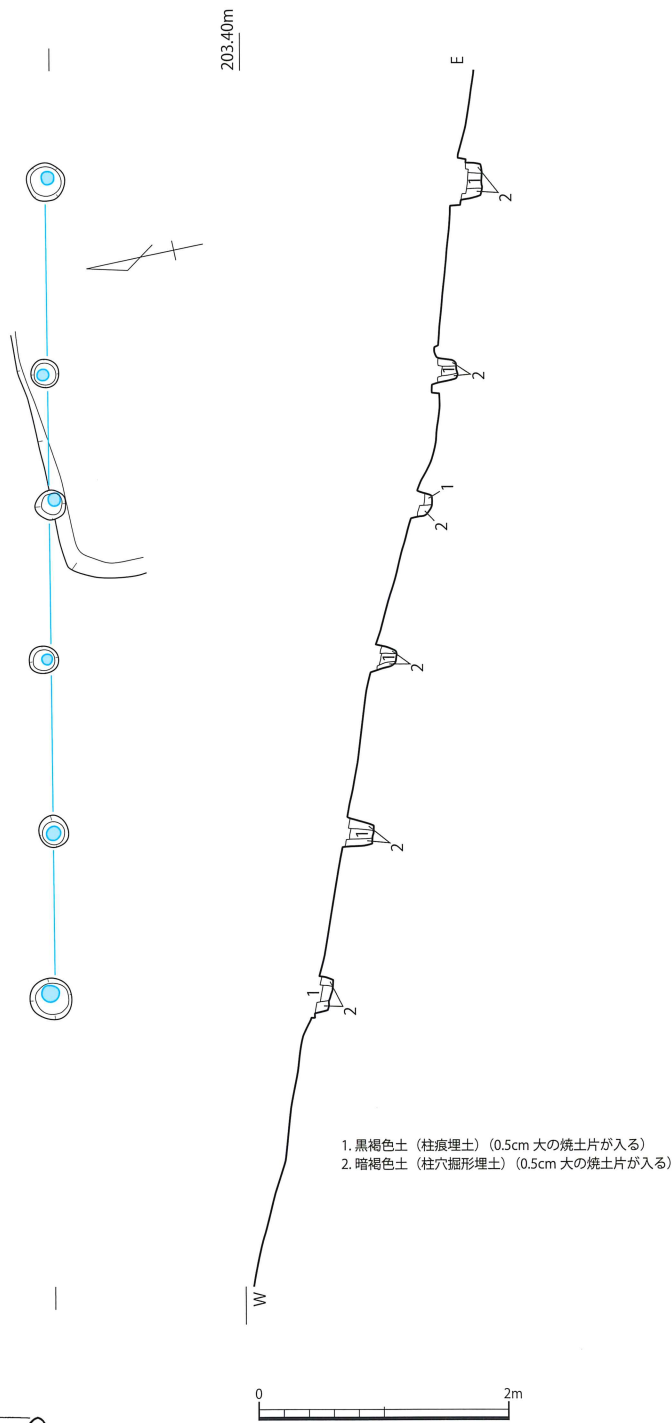
調査区の北側で、東西方向に伸びる柱穴列である。6本の柱穴が、6.5mに並ぶ。最も西側と最も東側では約1.5mの高低差がある。柱穴は0.2mから0.3mの円形で、深さは0.15mから0.2mである。

□SA05 (第167図)

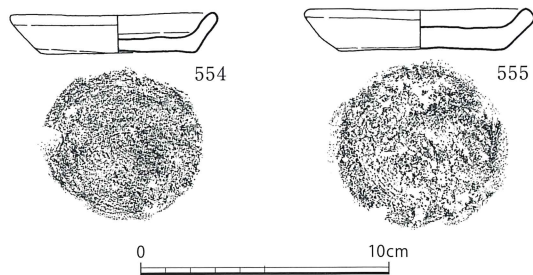
調査区の中央やや西寄りで見出された柱穴列である。直径80cmほどの大型の柱穴3本で構成される。最も南側の柱穴から土師器小皿が置かれた状態で出土している。

このSA05も含め、この箇所は複雑に遺構が切り合っている。検出層位から見て、重なる位置にあるSB28の柱穴が最も新しく、間にSK14を挟んでSA05が最も古い。

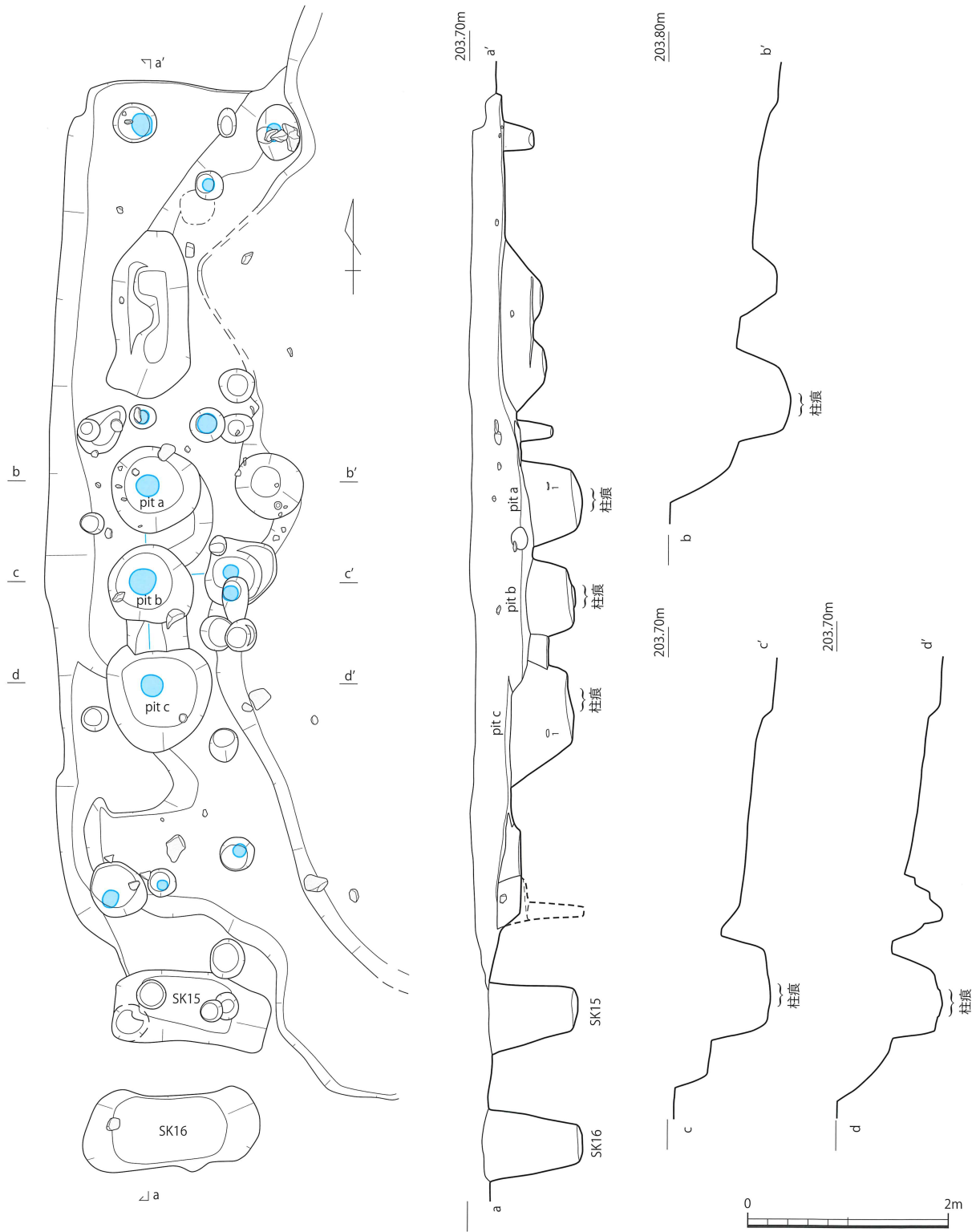
出土遺物は第166図554と555である。いずれも底部糸切りの土師器小皿である。



第165図 SA04



第166図 SA05出土遺物



第167図 SA05

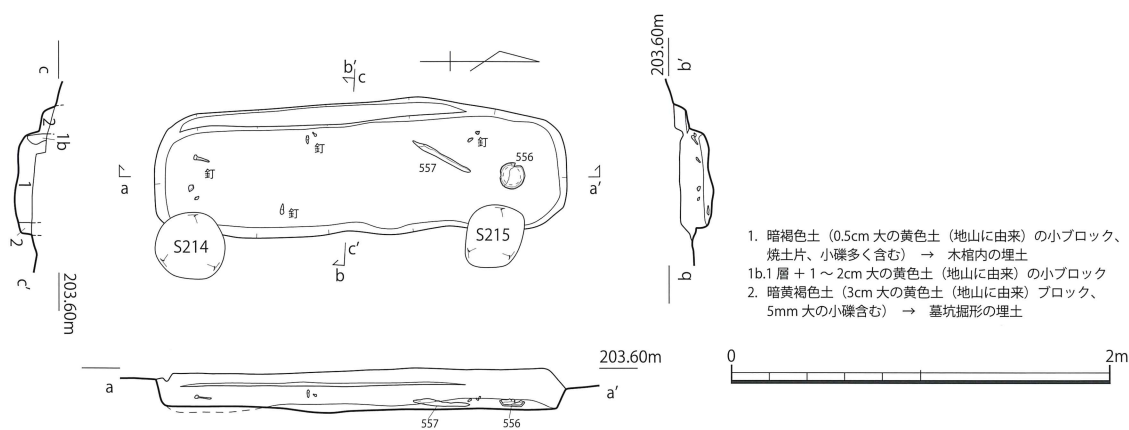
5 墓

□ST02(第168図)

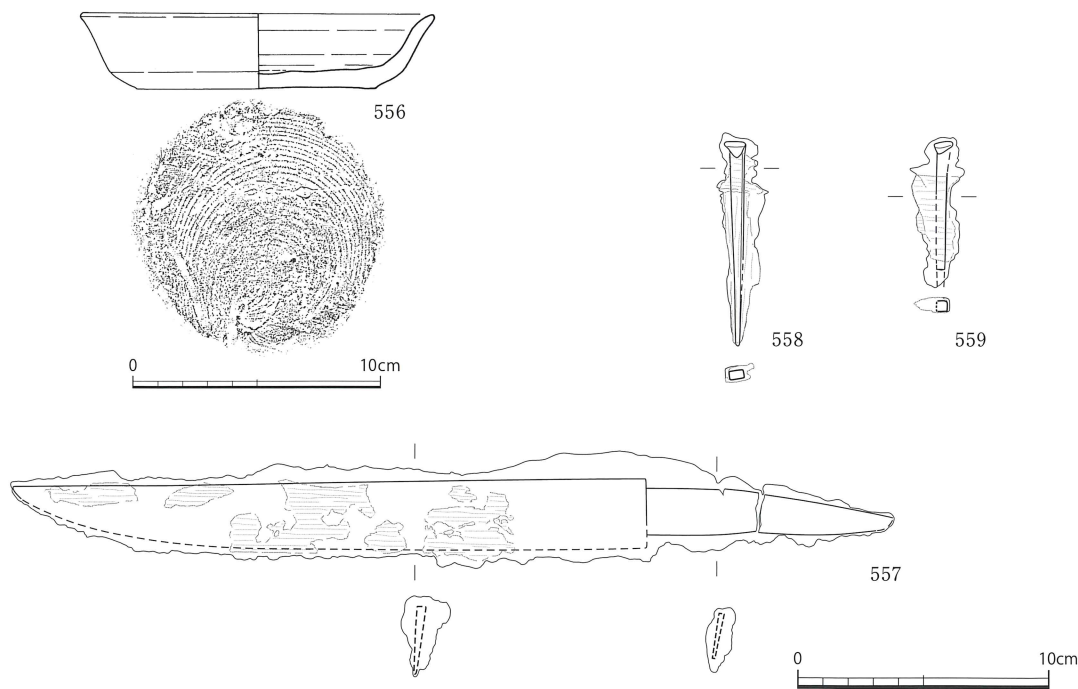
調査区北側の西壁沿いで確認された土坑墓である。全長2.15m、幅0.30mで、深さは0.2m前後であった。床面からは完形の土師器坏1個体、鉄刀1振りが出土した。また、図示するように床からやや浮く形で壁に近いところから鉄釘が6本出土している。木棺があったことがわかる。木棺の規模を復元すると、全長1.80mほどとなる。そのことは横断面の土層でも確認できる。

出土遺物は第169図556から559である。556は、土師器坏である。口径は14.3cmあり、口縁端部は小さく外反する。口縁部に2カ所の打ち欠きが認められる。557は鉄製の小刀である。全長は35.0cm。558と559は鉄製の釘である。

この墓は、土師器から見て12世紀代と考えられる。



第168図 ST02



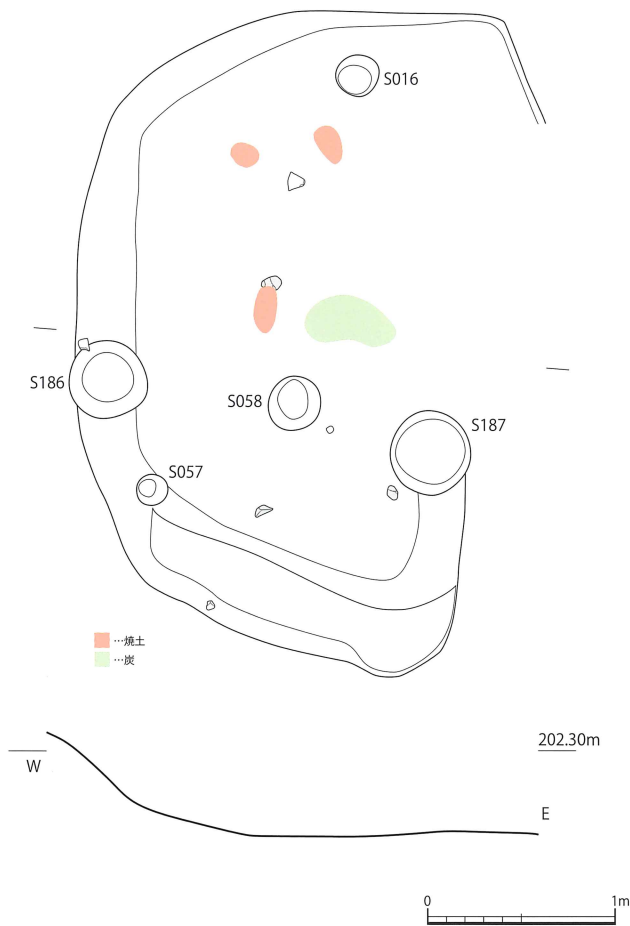
第169図 ST02出土遺物

6 土坑

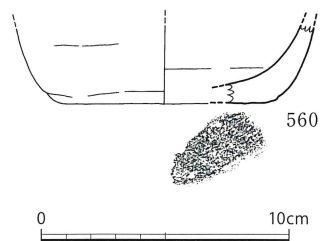
□SK12(第170図)

調査区の北寄りで確認された大型の土坑である。南北6.5m、東西4.8mの不整楕円形を呈しており、深さは0.9mで、断面は皿状を呈す。埋土は1層で、炭と焼土を大量に含む暗茶褐色土である。平面的にも焼土や炭化物のブロックが認められた。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物は第171図560の土師器坏である。底部は不明瞭ではあるが、回転糸切り離しである。



第170図 SK12

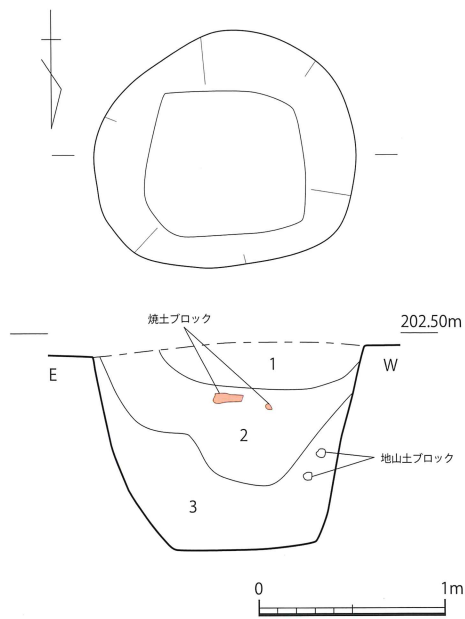


第171図 SK12出土遺物

□SK13(第172図)

調査区中央やや東寄りで検出した土坑である。南北1.2m、東西1.35mの略方形を呈する土坑である。深さは1.1mあり、埋土は自然堆積状態である。第2層からは若干の焼土が検出された。

出土遺物は図示できるものは無かった。



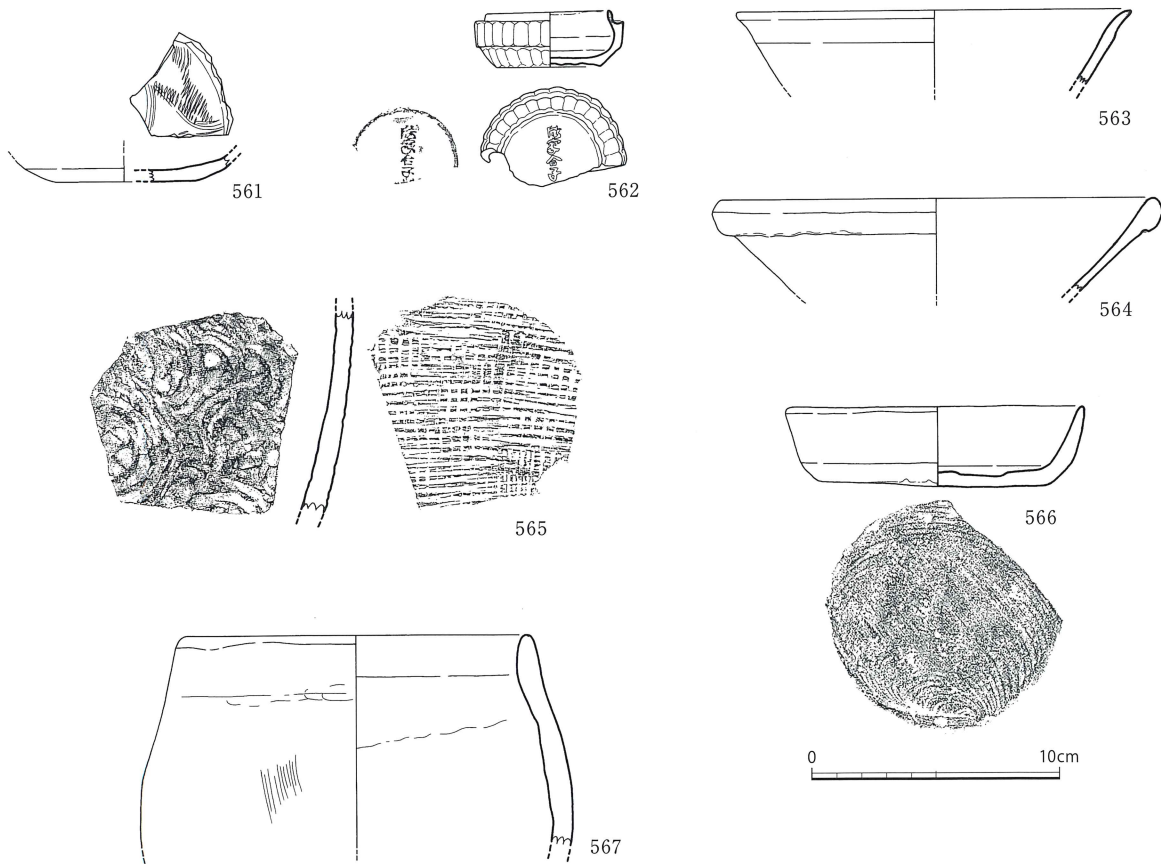
- 1. 暗褐色軟質土（微細な炭、焼土片と1～2cmの地山土の小ブロックを点々と含む）
- 2. 暗褐色土（炭、焼土、土器片多い）と地山土ブロック（0.5cm～3cm大のブロック）の混層
- 3. 暗褐色軟質土（炭、焼土片は少ない、5cm大のブロック含む）

第172図 SK13

□SK14

調査区の中央付近で確認された土坑である。立ち上がりが不明瞭なため遺構ラインが明示できないが、遺物が集中的に出土しているの、土坑として扱う。床面は凹凸があることから土取り土坑の可能性はあるが、床面のレベルの違いから、3から4基の土坑が複雑に切り合っていると思われる。

出土遺物は第173図561から567である。561は同安窯青磁の皿。562は青白磁の合子で、底面には「葉家合子□」と型押しされている。563と564は白磁碗で、563は山本分類V類、564は同IV類である。565は須恵器甕の破片。566は土師器坏で、底部は回転糸切りである。口径は11.9cm。567は土師器の壺か。

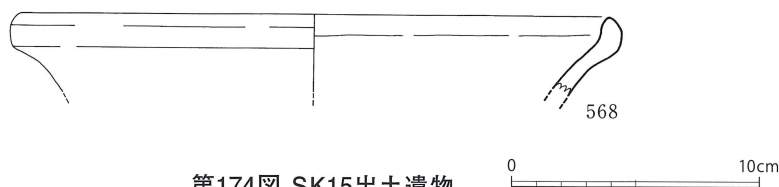


第173図 SK14出土遺物

□SK15(第167図)

調査区南寄りでSK16と並んで検出された土坑である。東西方向に長く1.5m、南北幅は0.6mで、深さは0.8mである。平面形状は長方形を呈する。床面は平らである。土層断面を見ると、北側から流れ込んだ状態である。

出土遺物は第174図568の須恵質土器鉢である。

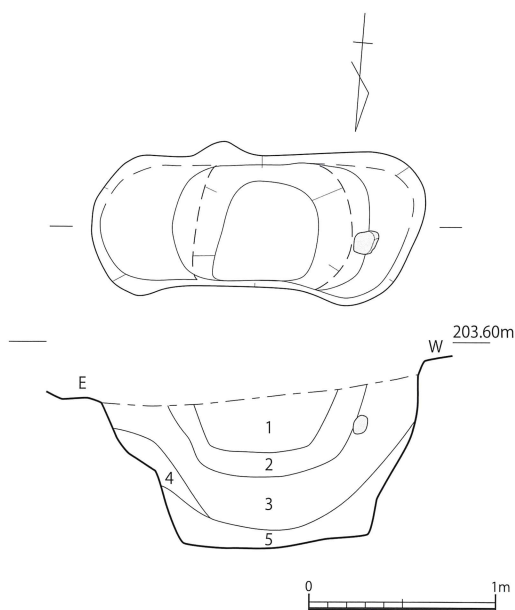


第174図 SK15出土遺物

□SK16(第175図)

調査区南寄りで、SK15と並んで検出された土坑である。東西方向に長く、1.8m×0.7mの隅丸の長方形を呈する。深さは0.7mで、自然堆積状態であるが、中央部だけ一度掘り返された可能性がある。

出土遺物は無い。



第175図 SK16

1. 暗褐色軟質土 (炭 (1cm 大が多い)、焼土多く混じる)
2. 暗褐色土と地山ブロック (黄色土、3~10cm 大) の混土层
3. 暗黄褐色土層 (粘質強い)、3~5cm 大の黄色土ブロック点々と混じる
4. 暗灰褐色土 (3cm 大の地山土ブロック多い)
5. 暗褐色軟質土 (黄色土ブロック入)

□SK17(第164図)

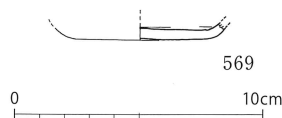
調査区の南東部で確認された土坑で、東側は調査区外に伸びる。SD11を切っている。調査区内では南北に2.6mで、深さは検出面から1.2mである。

出土遺物は無い。

□SK18(第164図)

調査区の南東部で確認された土坑で、東側は調査区外に伸びる。SD11を切って、SK16に切られている。調査区内では南北に2.08mで、深さは検出面から0.9mである。SK16も含めて、粘土採掘坑の可能性はある。

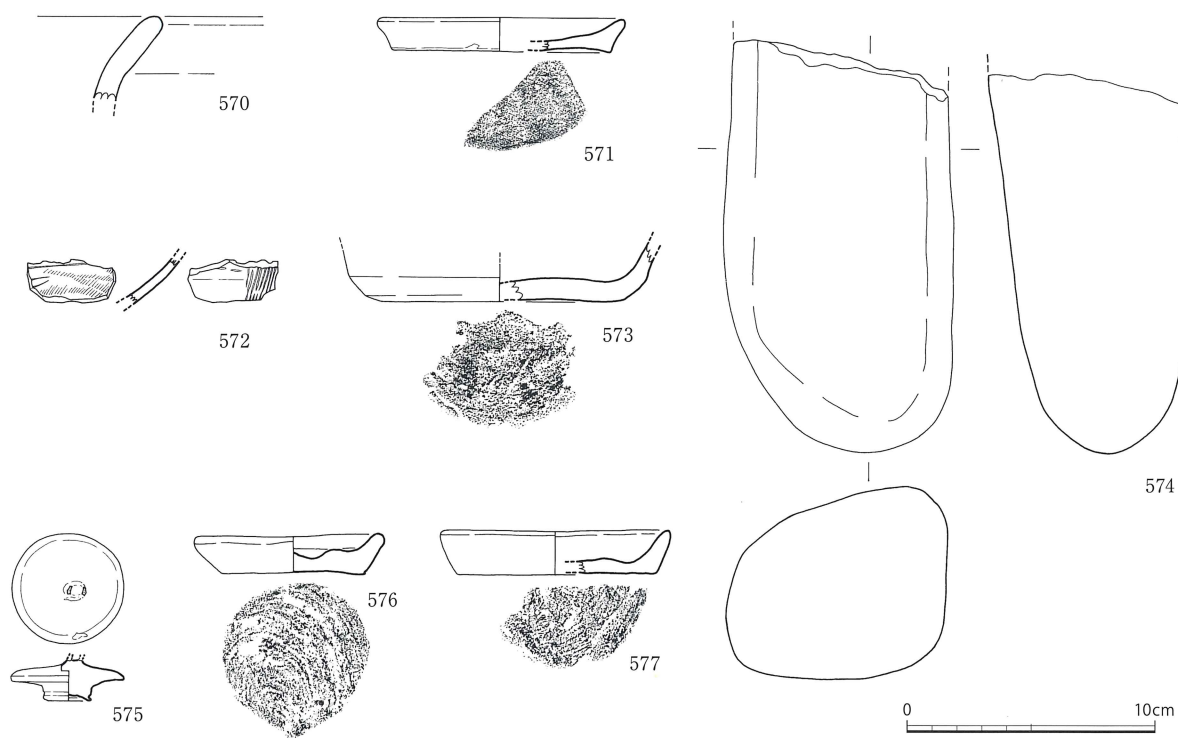
出土遺物は第176図569で、白磁の皿である。底部まで施釉している山本分類のIX1類である。



第176図 SK18出土遺物

7 ピット出土遺物

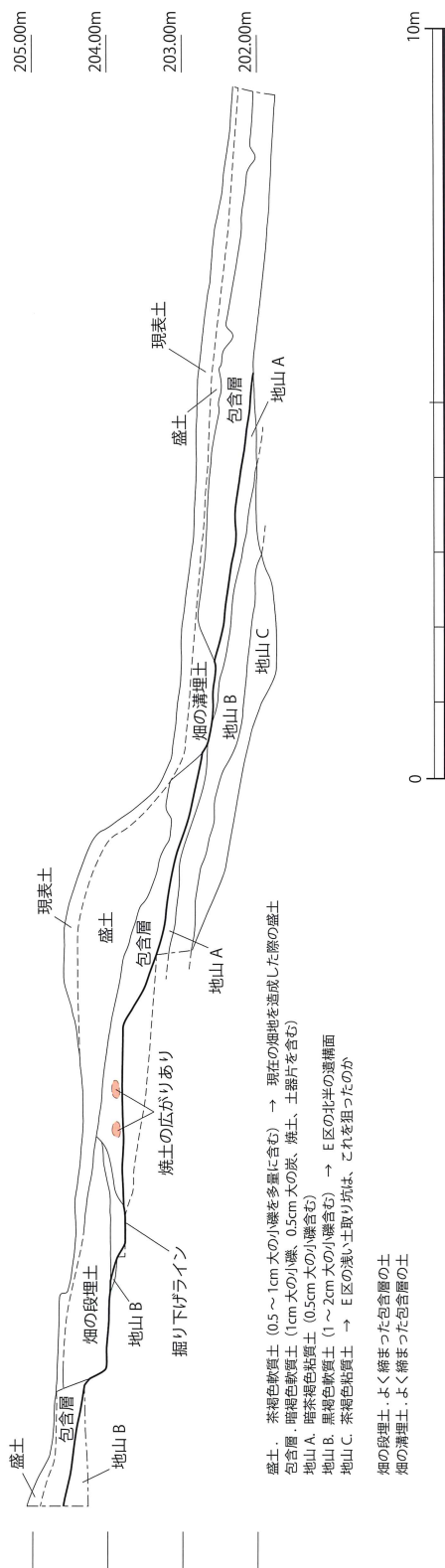
第177図570から577は、建物を構成しないピットから出土した遺物である。570は土師器の甕口縁部。571は土師器小皿。572と573は同一ピット出土。572は同安窯系の青磁碗、573は土師器の坏である。底部糸切り離し。574は被熱で赤変した蛇紋岩製の台石である。575から577は同一ピット出土。575は白磁の蓋で、摘まみが欠けている。576と577は小皿で、いずれも糸切り離しである。



第177図 E区ピット出土遺物

8 土層説明

E区は、他の調査区同様に緩斜面を平坦に削り出している。最も新しいものが、現在の畑地造成に伴うもので、削りと盛り土によって大きくは2段に形成されている。その下部には中世以前の造成に伴う土層が見られる。包含層としたものは、古代から中世にかけて漸次堆積した暗茶褐色土で、下部には焼土の広がりが見られる。これは古代のものであろう。地山は茶褐色の粘質土で、土取りの対象となった土層である。



第178図 E区土層図

9 小結

今回の加原遺跡の調査では、最も南側の調査区になる。ほとんど遺構の無かったD区を挟み、また古墳時代から中世の遺構が確認された。おそらく、等高線に沿ってさらに遺構は南側と東側に展開するものと考えられる。

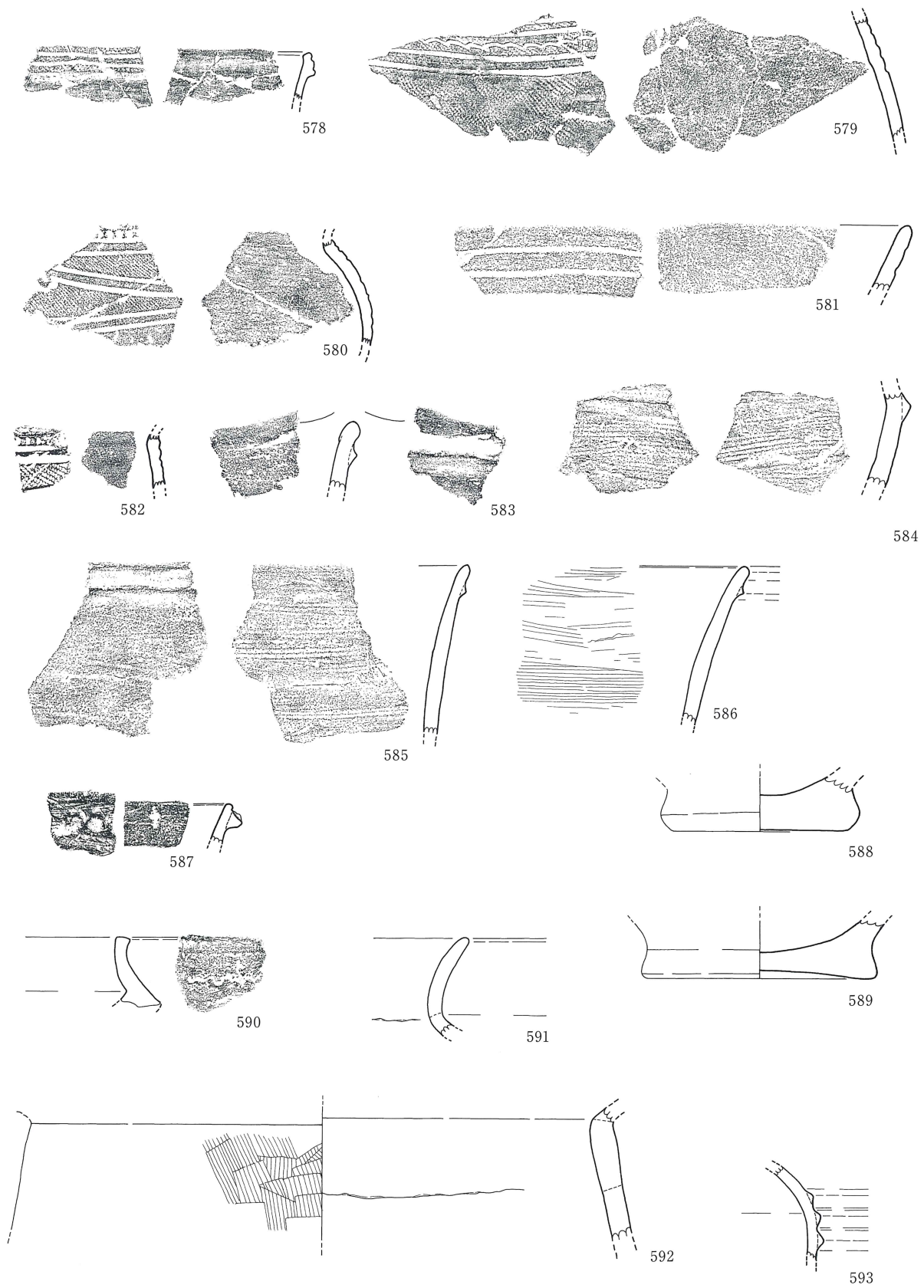
しかし、古代の遺物・遺構は希薄であった。古代に関して言えば、B区やC区で展開した遺構群はこのE区に及んでいないか、またはさらに川側(東側)で展開したのか、が考えられるが、B区、C区の古代の遺構形成時には斜面を削り、平坦面を作り出したため、遺構は小さな崖状の傾斜面のすぐ下から始まっていることを考えると、このE区ではそれが見られないので、前者である可能性が高いと考える。

第3節 その他の遺物

古代から中世の遺構や包含層に混じり、縄文時代から弥生時代の遺物が出土しているので、ここで一括して扱う。

578から589は縄文土器である。578~580、582は磨り消し縄文を持つ後期の西平式土器、581は晩期前半の浦久保式、583から586は無刻目突帯を持つ深鉢で、晩期後半の上菅生B式である。588と589も縄文晩期のものである。

590から593は弥生土器である。590はいわゆる安国寺式土器の口縁部、591は緩やかに外反する甕の口縁部、592は粗製甕タイプの甕胴部であるが、ハケ調整が見られる。593は小型壺の胴部破片で、3条の突帯が巡る。これらは弥生時代後期後半のものである。



第179図 縄文土器・弥生土器

第4章 自然科学分析の成果

はじめに

加原遺跡は、丘陵を開析する谷の緩斜面上に立地し、これまでの発掘調査により、古墳時代後期の集落跡や古代の豪族層の居宅と考えられる掘立柱建物跡等が検出されている。本報告では、弥生時代～古墳時代の遺物が出土する堆積層の年代に関する資料を得るため、堆積層中から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施する。また、弥生時代後期の遺物が出土する層準から古代までの土地利用状況を検討するための植物珪酸体分析、古墳時代や古代の建築部材と考えられる炭化材の木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

第1節 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、弥生時代～古墳時代の堆積層中から出土した炭化材2点(資料1,2)である。資料2は、資料1の低位20cmの層準から採取されている。

(2) 分析方法

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

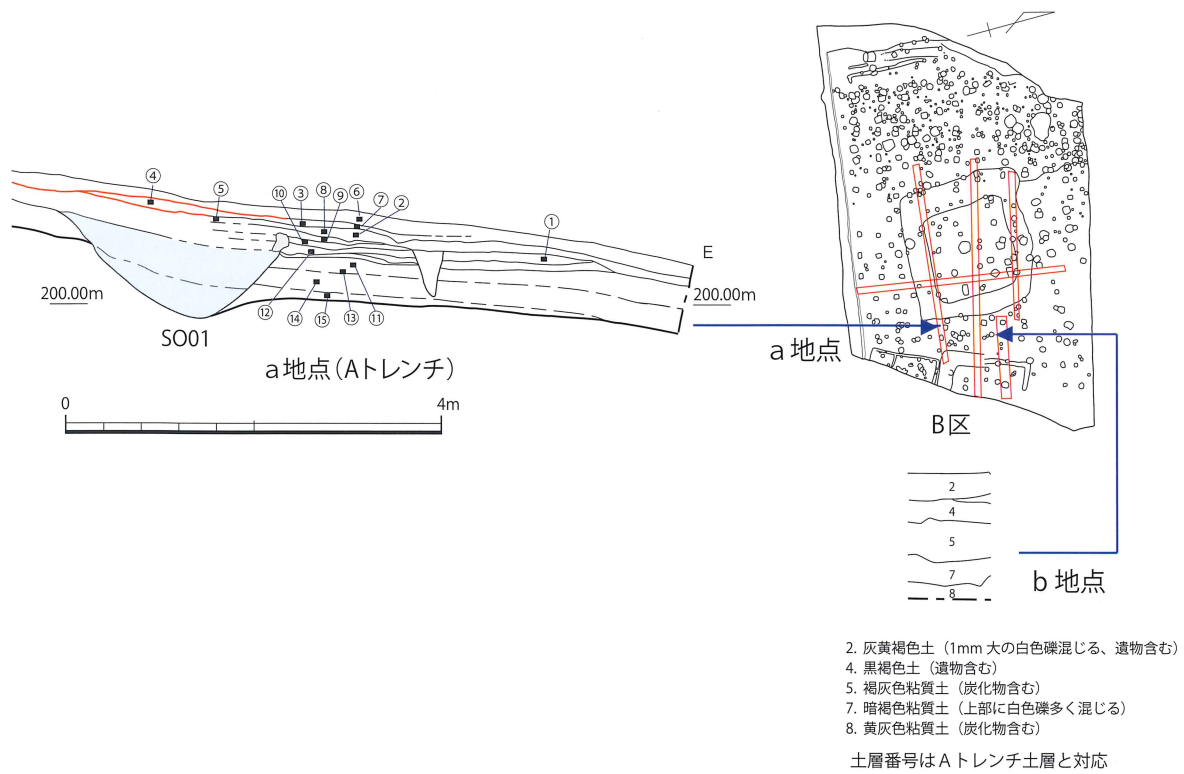
測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NECPelletron9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(OneSigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBONCALIBRATIONPROGRAMCALIBREV6.0.0(Copyright1986-2010MStuiverandPJReimer)を用い、誤差として標準偏差(OneSigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 結果

放射性炭素年代測定結果及び暦年較正結果を第5表、較正暦年代の確率分布(2σ)を第181図に示す。同位



b 地点の土柱



褐色土壌とその偽礫・微小ブロックからなる。古代の客土?

暗褐色泥質砂～砂質泥とその偽礫微小ブロックからなる。
 上部で粗粒砂・細礫混じる。
 根成孔隙が密に分布する。

←14C-1

土壌生成が進行している層準。母材は下位の人為的営力により形成された偽礫・微小ブロック

←14C-2

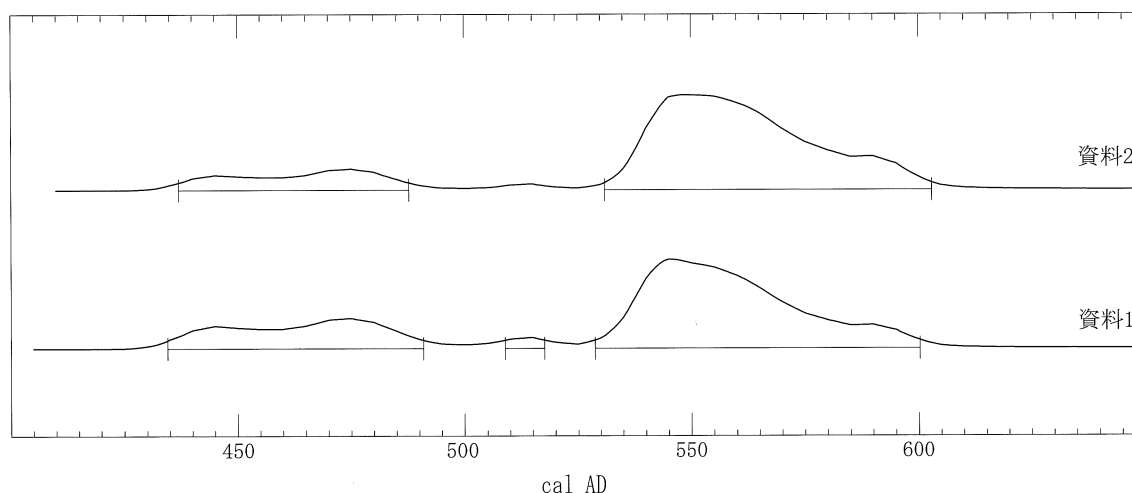
人為的掘削により生じた偽礫・微小ブロック

第180図 試料採取位置

第5表 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	処理方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果			Code No	
						誤差	cal BC/AD	cal BP		相対比
資料1	炭化材 (モミ属)	AAA	1,570 ± 20	-27.65 ± 0.31	1,530±20 (1,526±22)	σ	cal AD,467 - cal AD,481 cal AD,534 - cal AD,582	cal BP 1,483-1,469 cal BP 1,416-1,368	0.111 0.889	IAAA-122616
						2σ	cal AD,435 - cal AD,491 cal AD,509 - cal AD,518 cal AD,529 - cal AD,600	cal BP 1,515-1,459 cal BP 1,441-1,432 cal BP 1,421-1,350	0.255 0.019 0.727	
資料2	炭化材 (ヤマグワ)	AAA	1,650 ± 20	-32.67 ± 0.30	1,520±20 (1,520±21)	σ	cal AD,537 - cal AD,584	cal BP 1,413-1,366	1.000	IAAA-122617
						2σ	cal AD,437 - cal AD,488 cal AD,531 - cal AD,603	cal BP 1,513-1,462 cal BP 1,419-1,347	0.161 0.839	

- 1) 処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である。
- 9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第181図 暦年較正結果

体効果の補正を行った年代測定結果 (補正年代) は、資料1が1,530±20BP、資料2が1,520±20BPである。また、測定誤差を 2σ で計算した暦年較正結果 (確率1) は、資料1がcalAD529-600、資料2がcalAD531-603である

(4) 考察

炭化材が出土した層準は、弥生時代～古墳時代と考えられており、資料2は資料1の下位20cmから出土している。

年代測定の結果、炭化材はほぼ6世紀代の年代を示しており、古墳時代後期頃の炭化材と考えられる。2点の試料には、年代差はほとんど認められず、暦年較正結果をみてもほぼ同時期の炭化材と考えられる。

試料には年代差がほとんど認められず、暦年較正結果をみてもほぼ同時期の炭化材と考えられる。

第2節 植物珪酸体分析

(1) 試料

試料は、土層から採取された土壌16点（試料番号1～15,古代盛土直下）である（第6表）。

(2) 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量の変化を図示する。

(3) 結果

結果を第7表、第182図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。試料番号14を除き、各試料からは栽培植物のイネ属が産出し、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は試料番号1、2、7で多く、いずれも5,000個/gを超える。また試料番号3や6では3,000個/g前後、試料番号4や8では1,000～2,000個/g程度である。試料番号9～12および古代盛土直下では1,000個/g未満である。また試料番号1～7および古代盛土直下では短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体に珪化組織片である短細胞列や機動細胞列が見られ、糊（穎）に形成される穎珪酸体も認められる。試料番号8、9、11、12では短細胞列が見られる。

イネ属の他には、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。この中では各試料でメダケ属を含むタケ亜科の産出が目立つ。

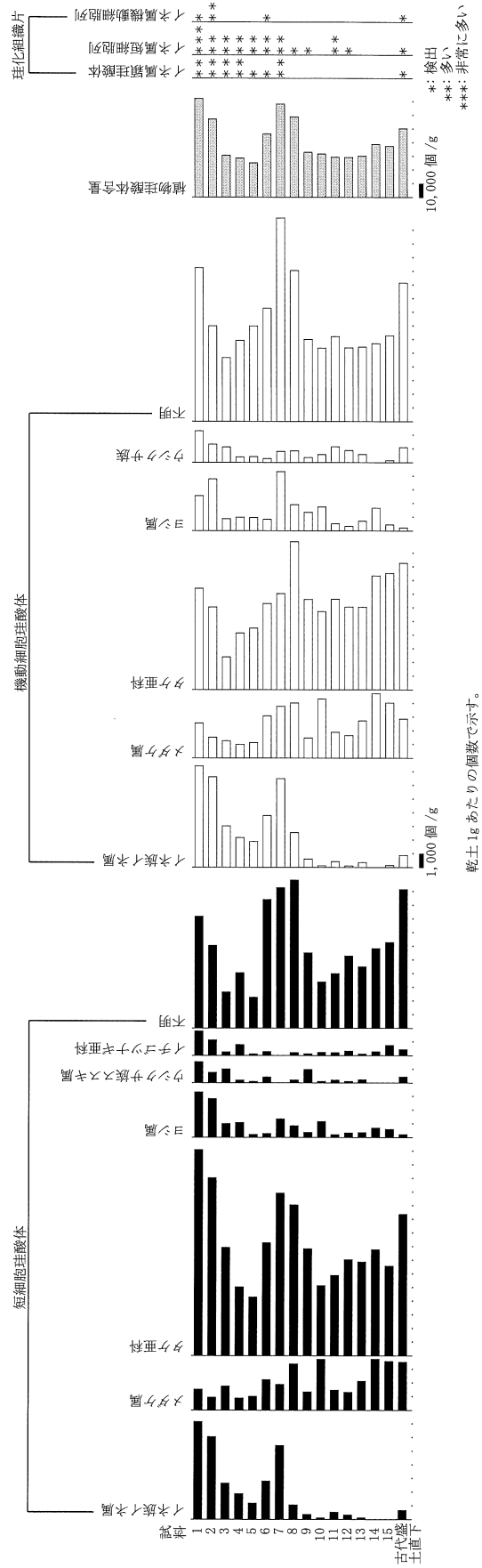
第6表 植物珪酸体分析試料

地点	試料/層位	
区域2	1	発掘面の上位(1層位上)
	2	発掘面の直上
	3	発掘面の上位(2層位上)
	4	5の上位(3と同層準?)
	5	凹部
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	
	11	
	12	
	13	
	14	
	15	
古代盛土	直下	1や2と同層準

第7表 植物珪酸体含量

分類群	区域2															古代盛土 直下
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
イネ科葉部細胞珪酸体																
イネ族イネ属	7,200	6,100	2,600	1,900	1,200	2,800	5,400	1,100	400	100	500	300	100	-	700	
メダケ属	1,500	900	1,800	900	1,000	2,200	1,900	3,400	1,300	3,700	1,500	1,300	2,100	3,800	3,500	
タケ亜科	15,100	13,000	7,900	5,000	4,300	8,300	11,900	11,000	7,800	5,100	5,900	7,100	6,900	7,800	10,400	
ヨシ属	3,300	2,800	1,000	1,100	200	300	1,400	800	400	1,200	200	300	400	700	200	
ウシクサ族ススキ属	1,500	800	1,000	200	100	400	-	200	1,000	100	200	100	200	-	400	
イチゴツナギ亜科	1,800	1,100	300	800	100	300	-	200	100	200	200	300	100	300	400	
不明	8,200	6,100	2,600	4,100	2,300	9,400	10,300	10,800	5,500	3,400	4,000	5,300	4,500	5,800	10,200	
イネ科葉身機動細胞珪酸体																
イネ族イネ属	7,400	6,600	3,000	2,200	1,900	3,800	6,500	2,500	600	100	400	100	400	-	900	
メダケ属	2,600	1,500	1,300	1,000	1,100	3,100	3,800	4,000	1,500	4,300	1,900	1,700	2,700	4,700	2,900	
タケ亜科	7,400	6,100	2,400	4,200	4,500	6,300	7,000	10,800	6,600	5,700	6,600	6,100	6,000	8,300	9,300	
ヨシ属	2,600	3,800	900	1,000	1,000	800	4,300	1,900	1,300	1,800	500	300	700	1,700	200	
ウシクサ族	2,300	1,300	1,100	400	400	300	800	800	400	600	1,200	900	600	-	1,100	
不明	11,300	7,000	4,700	5,900	7,000	8,300	14,900	11,000	6,000	5,400	6,200	5,400	5,500	5,700	10,200	
合計																
イネ科葉部細胞珪酸体	38,600	30,800	17,300	13,900	9,200	23,700	30,900	27,600	16,500	13,900	12,500	14,800	14,300	18,400	25,800	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	33,500	26,300	13,400	14,600	15,900	22,600	37,400	31,200	16,400	17,900	16,900	14,400	15,900	20,400	24,500	
合計	72,100	57,100	30,700	28,600	25,100	46,300	68,300	58,800	32,900	31,800	29,400	29,200	30,200	38,800	50,300	
珪化組織片																
イネ属短珪酸体	**	**	**	**	*	*	**	-	-	-	-	-	-	-	*	
イネ属短細胞列	**	**	**	**	**	**	**	*	*	-	**	*	-	-	*	
イネ属機動細胞列	*	**	-	-	-	*	-	-	-	-	-	-	-	-	*	

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後丸めている
 - : 未検出, * : 検出, ** : 多い, *** : 非常に多い



第182図 植物珪酸体含量

(4) 考察

調査した土層では、試料番号14の層位を除き、栽培植物のイネ属が産出し、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られた。そのため、これらの層位が形成される過程でイネ属の混入がうかがえる。稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量（植物珪酸体密度）が高くなる。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている（杉山, 2000）。今回の試料では試料番号1、2、7がいずれも5,000個/gを超えており、これらの試料が採取された層位では稲作が行われた、あるいは稲作耕土が混入した可能性が考えられる。また試料番号3や6では3,000個/g前後、試料番号4や8では1,000～2,000個/g程度であり、前述の指標と比較して少ないと言える。ただし、指標を下回る点については耕作期間が短い、生産性が悪いなどの影響で、堆積物中に植物珪酸体が多く蓄積されなかったことが想定される（株式会社古環境研究所, 1999）。これらの層位についても、稲作が行われていたものの、イネ属の植物珪酸体が蓄積しにくい状態のあったことが想定される。試料番号9～12の層位では1,000個/g未満であり、稲作の存在した可能性を積極的に支持することが難しいものの、何らかの形でイネ属の利用がうかがえる。なお今回の結果については植物珪酸体の混入・埋積の過程を考慮する必要があり、今後さらに各土層の堆積環境や形成過程を含めて検討することが望まれる。

古代盛土直下でもイネ属が産出し、短細胞珪酸体が約700個/g、機動細胞珪酸体が約900個/gであり、珪化組織片である短細胞列や機動細胞列、穎珪酸体も認められた。前述の指標と比較すれば少ない含量であり、稲作の存在した可能性を積極的に支持することが難しいものの、何らかの形でイネ属の利用がうかがえる。

ところで、これらの土層や古代盛土直下ではメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められたことから、これらを含むイネ科植物の生育がうかがえる。この中では各試料でメダケ属を含むタケ亜科の産出が目立った。タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986）、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。今回の産状は、タケ亜科が土壌中に相対的に多く残留したためと考えられる。なお、湿潤な場所に生育するヨシ属も見られたことから、調査区周辺に湿潤な場所の存在がうかがえる。

第3節 樹種同定

(1) 試料

試料は、古墳時代の住居壁材4点（住居壁材1～4）、古墳時代の焼失住居跡から出土した構築材1点、年代測定を実施した炭化材から分割した2点（資料1,2）、5地点南側から出土した炭化材1点の合計8点である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を第8表に示す。炭化材は、針葉樹1分類群(モミ属)と広葉樹3分類群(ヤマグワ・イスノキ・カエデ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属(*Abies*) マツ科

試料は、いずれも年輪界で割れている。

軸方向組織は仮道管のみで構成される。

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

・ヤマグワ(*Morusaustralis*Poiret) クワ科クワ属

試料は小片のため、電子顕微鏡による観察ができず、実体顕微鏡による観察のみ。環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2-4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

・イスノキ(*Distyliumracemosum*Sieb.etZucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。柔組織は、独立带状または短接線状で、放射方向にはほぼ等間隔に配列する。

・カエデ属(*Acer*) カエデ科

試料は小片で保存状態が悪く、電子顕微鏡による観察ができなかったため、実体顕微鏡による観察のみ実施した。散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

第8表 樹種同定結果

地点	遺構	試料名	種類
		住居壁材1	イスノキ
		住居壁材2	イスノキ
		住居壁材3	イスノキ
		住居壁材4	イスノキ
	古代の焼失住居	構築材の炭化したもの	モミ属
5地点		資料1(14C-1)	モミ属
5地点		資料2(14C-2)	ヤマグワ
5地点南側		14C-1と同層準	カエデ属

(4) 考察

炭化材には、合計4種類が認められた。各種類の材質等についてみると、針葉樹のモミ属は、木理が直線で割裂性が高く、加工は容易であるが、保存性は低い。落葉広葉樹のヤマグワとカエデ属は、重硬で強度が高い。常緑広葉樹のイスノキは、重硬・緻密で強度や耐水性が比較的高い。

時期別にみると、古墳時代の住居跡から出土した壁材1~4は、出土状況から同一部材の可能性が指摘されている。この炭化材は、全てイスノキに同定され、同一部材の可能性を支持する結果となった。イスノキの材質から、強度・耐水性の高い木材を選択・利用したことが推定される。

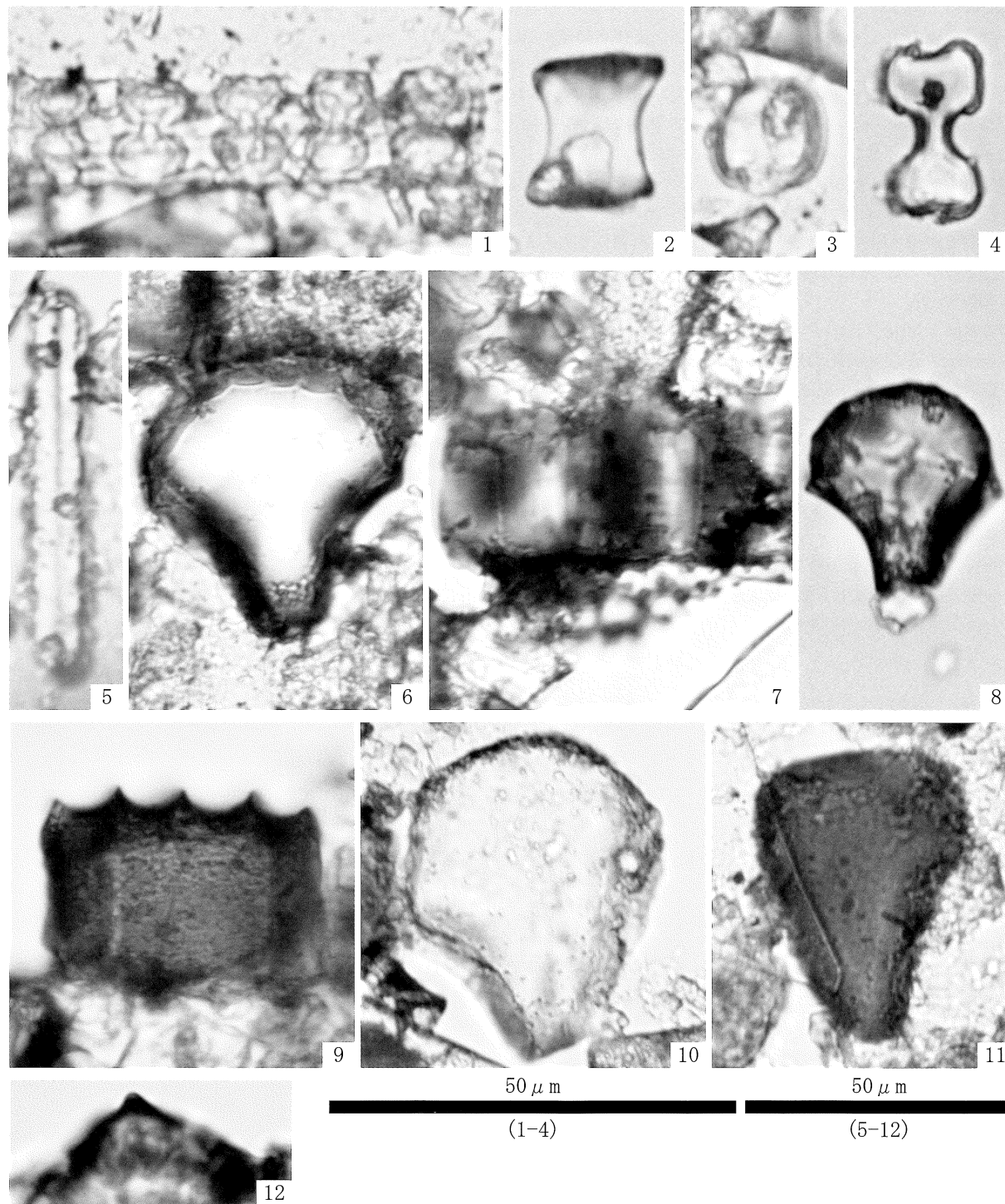
一方、古代の住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材は、針葉樹のモミ属であった。モミ属の材質を考慮すれば、強度を要する部位ではなく、割裂性を利用して板状の部材等に利用された可能性がある。

大分県内では、飯塚遺跡の奈良時代~平安時代初頭とされる柱材にクスノキ、ケヤキ、クリ、ツブラジイが確認された例があるが、堅穴住居跡の建築部材については調査事例がほとんどない(伊東・山田,2012)。そのため、時期別・地域別の用材傾向などについては、今後さらに資料を蓄積していくことが重要である。

引用文献

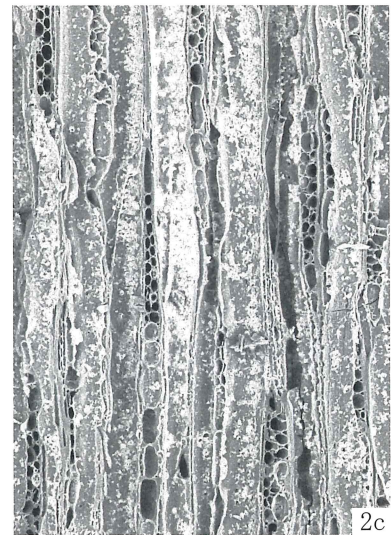
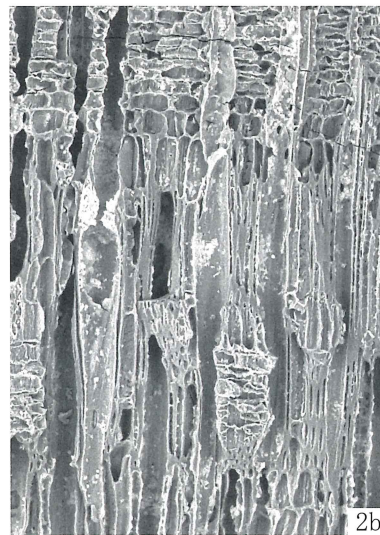
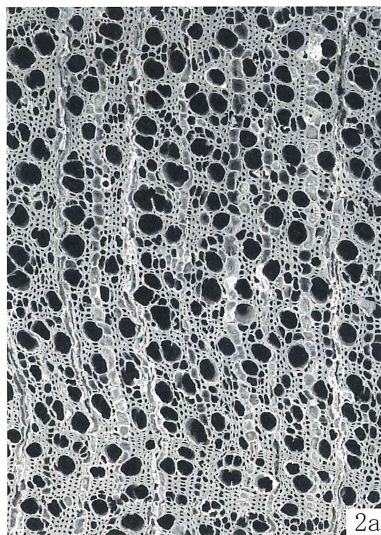
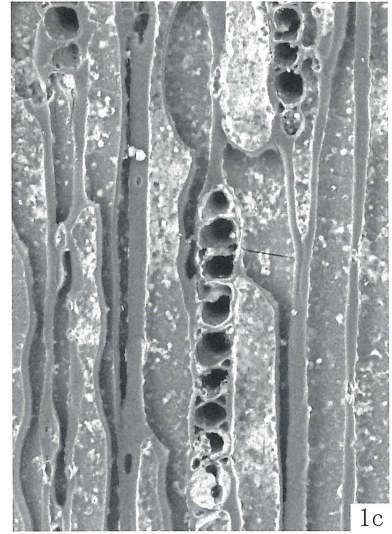
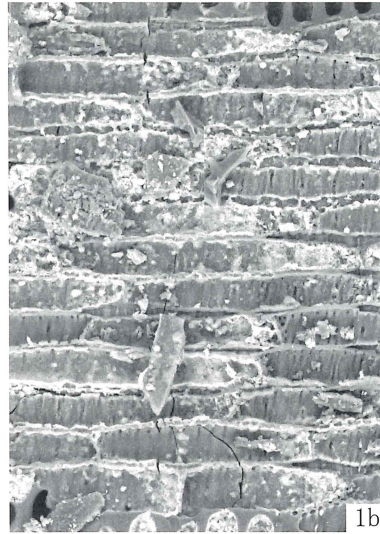
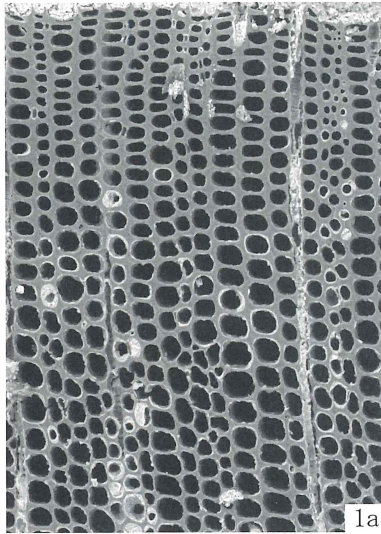
- ◎林昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- ◎伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- ◎伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- ◎伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- ◎伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- ◎伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- ◎伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学出土木製品用材データベース.海青社,449p.
- ◎株式会社古環境研究所,1999,プラント・オパール分析から見た静岡バイパス関連諸遺跡.静岡・清水平野の埋没古環境情報「考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相」-一般国道1号線バイパス埋蔵文化財発掘調査1984~1993-,財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所,83-86.
- ◎近藤謙三,1982,Plantopal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書,32p.
- ◎近藤謙三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- ◎RichterH.G.,GrosserD.,HeinzI.andGassonP.E.(編),2006,針葉樹材の識別IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[RichterH.G.,GrosserD.,HeinzI.andGassonP.E.(2004)IAWAListofMicroscopicFeaturesforSoftwoodIdentification].
- ◎島地謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- ◎杉山真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻誠一郎(編著)「考古学と自然科学3考古学と植物学」,同成社,189-213.
- ◎杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-.考古学と自然科学,19,69-84.
- ◎WheelerE.A.,BassP.andGassonP.E.(編),1998,広葉樹材の識別IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p. [WheelerE.A.,BassP.andGassonP.E.(1989) IAWAListofMicroscopicFeatures forHardwoodIdentification].

図版1 植物珪酸体



- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (区域2;1) | 2. メダケ属短細胞珪酸体 (区域2;4) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (区域2;4) | 4. ススキ属短細胞珪酸体 (古代盛土直下) |
| 5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (区域2;4) | 6. イネ属機動細胞珪酸体 (区域2;2) |
| 7. イネ属機動細胞列 (区域2;1) | 8. イネ属機動細胞珪酸体 (古代盛土直下) |
| 9. メダケ属機動細胞珪酸体 (古代盛土直下) | 10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (区域2;4) |
| 11. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (区域2;5) | 12. イネ属穎珪酸体 (区域2;1) |

図版2 炭化材



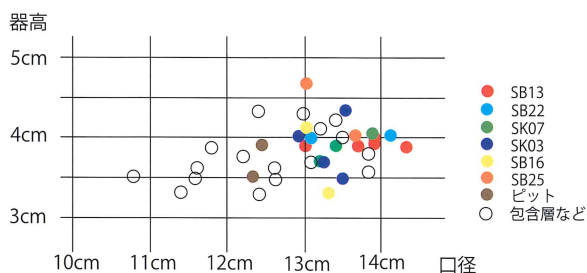
1. モミ属(古代の焼失住居)
 2. イスノキ(住居壁材1)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m: 2a
 200 μ m: 1a, 2b, c
 100 μ m: 1b, c

第5章 総括

第1節 遺物

加原遺跡では、前章までに述べたように、古墳時代から中世にいたる遺物・遺構が出土している。ここでは、遺構の変遷を考えるために、遺物の帰属時期についてまず触れておきたい。後述のように加原遺跡の変遷をI期からXI期にわけると、I期からV期は須恵器がメルクマールとなるので、従来の研究成果に従って時期変遷を追える。しかし、VI期以降は須恵器が基本的に無くなり、土師器主体となるので、土師器の編年が主体となる。しかし、当該地の古代土師器の編年は、遺跡が少ないこともあって確立したものとはなっていない。その中では豊後という広範囲で行った坪根・塩地両氏による編年作業^{*7}が基本となる。細かな地域性の抽出はできていないものの、後述のように加原遺跡出土土師器も概ね同様の変遷を示すことがわかるので、まず坪根・塩地編年をベースに加原遺跡の土師器の変遷を簡単に示した上で、各期の説明を行う。



第183図 土師器の大きさ

古代の土師器の変遷

第183図は、加原遺跡出土の土師器を、口径と器高の要素でドットを落としたものである。そうすると、口径は11cm未満から14cmを越えるものまでであることがわかる。それらは遺構ごとにある程度の傾向を認めることができる。坪根・塩地編年では、このレンジに収まる時期は9-III期から10-I期になる。すなわち9世紀第3四半期から10世紀第1四半期ということである。加原遺跡では、グラフには表示しなかったが、包含層出土で口径16cmに復元できる個体も2個体あった。この16cmという数値は坪根・塩地編年の9-II期に該当する。そうすれば、加原遺跡出土の土師器は9世紀第2四半期から10世紀第1四半期に相当するものとなる。16cm代から14cm前後への口径の縮小は急激であり、そこに何らかの画期があると認められるが、それ以後は順調に型式変化を遂げる。型式組列を次に示す(第184、185図)。



第184図 土師器の型式(1)

- 1式: 1例のみであるが、口径16cmで、体部内外面にミガキは無いが、丁寧にナデ調整されている。体部下半は形を整えるように比較的丁寧なヘラ削りが施される。口縁部内側に稜を持つ。
- 2式: 口径が14cm前後で、口縁部は直線的に開き、口縁内面に僅かに稜を有するものもある。外面はナデ調整のみで、ヘラ削りは認められない。底部外面はヘラ切り離し跡を消し、きれいな平底になるように調整されている。
- 3式: 口径が13.5cm前後で、口縁部は直線的に開くが、中にはやや外反気味に開くものも現れる。体部の調整は2式と同様であ

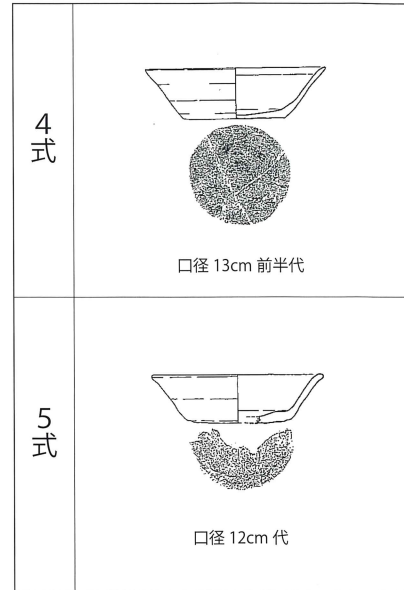
^{*7} 坪根伸也・塩地潤一「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会 2001

る。底部外面はヘラ切り離しの後、比較的丁寧に調整しているが、板状圧痕を残すものもある。

4式: 口径が13cm前半代で、口縁部を外反させるものが多くなる。体部の調整は2式と同様である。底部外面はヘラ切り離しの後、外周部のみ調整するものから、ほとんど調整しないものまである。やや器高が高く、底径の大きなものもある(4式b)。

5式: 口径が12cm代と小さくなる。体部が稜を持って立ち上がるもの(5式a)と、そうでないもの(5式b)がある。底部はヘラ切り離しのみあまり調整しないものが多いようである。

古代については、以上の土師器杯の型式変化に基づいて時期の設定を行い、一括資料に基づいて他の組み合わせる土器についても触れたい。



第185図 土師器杯の型式(2)

加原遺跡の時期設定

【I期】

第185図は6世紀代から7世紀にかけての遺物である。最も古いものは、B区のピットから出土した一群で、6世紀前半に位置づけられる。須恵器杯(182)は口縁内面に段を有し、口径は13.5cmである。それに伴う土師器は、口縁部を内湾させながら開く鉢(187、186)、高杯(188)、甕(190)である。甕は系譜が追えない。まだこの段階では、調査区内では他に堅穴建物は出現していない。調査区外に展開していた可能性がある。

【II期】

次いで、堅穴建物がA区において出現する時期で、6世紀後半である。SH04、SH05、SH07、SH16が該当する。須恵器は杯(70、14)、杯蓋(36)の他に甕(37)、高杯(50)がある。甕は最大径を中位に持つ。高杯は口縁部のシャープさを失っている。土師器は鉢(2、6)、蓋(39)、高杯(27)、大型の鉢(41)、甕(8、9)がある。鉢は前時期までと違って内湾することは無くなる。蓋は、須恵器杯蓋を模倣するものである。高杯は、中実で長脚となり、裾部で大きく開くと思われる。大型の鉢は、口縁部が緩やかに開き、丸底である。甕は球形胴のものと長胴のものがある。

【III期】

6世紀末から7世紀初頭にもA区の建物群は存続する。SH03、SH09、SH06が該当する。須恵器杯(10、13、44)は口径を減じて平底を呈するようになる。一括資料では須恵器は他に器種が無く、土師器も高杯(18)のみしかないが、飛鳥Iに該当する時期である。この時期を最後にA区の堅穴建物は姿を消す。

【IV期】

次いで、C区において堅穴建物が作られる時期となる。7世紀前半代である。SH19やSH22が該当する。天井部がドーム状になるもの(330)が古く、扁平になるもの(338)は新しく位置づけられる。44、46などの高台付きの杯が伴う。脚部端部が小さく外方に屈曲する。土師器は、皿(332)が伴う。いわゆる都城系土師器であるが、やや厚手で口縁端部は丸く収める。色調は赤みがかった橙色となる。

【V期】

また、遺構は確認できなかったが、須恵器杯蓋で返りが無くなり口縁端部が断面三角形になるもの(84、86)

が見える。また、高台付き坏(90、91)は高台部が低く、坏部は腰で折れて開くものである。これらは8世紀代から9世紀初めにかけての時期に位置づけられよう。

【Ⅵ期】

次いで、第186図は主に掘立柱建物群に伴う時期のものである。ここからは、土師器坏の変遷が時期のメルクマールとなる。最も古いと考えられるのは、包含層から出土した坏(286)である。前記した1式で、これらは太宰府系の坏dに祖型を辿れるものであろう。年代的には9世紀前半代を当てておく。ただし、遺物が包含層出土であるため一括性が担保できず、Ⅶ期の遺物と供伴することもあり得るので、一時期として成り立つかどうかは不明である。また、同様に包含層出土ではあるが、同じ形態の黒色土器A類碗(521)もあるので、セットをなすものと考えられる。

【Ⅶ期】

次は、坏(150、151)の口径が14cm前後と小さくなる2式である。前時期に比べ形態的には底径が大きくなったことで、安定感を与える器形となる。しかし、口縁端部は僅かに内面に稜を持つなど、前時期の影響も残している。時期は坪根・塩地編年の9-III期に該当し、9世紀第3四半期をあてる。この一括資料は、掘立柱建物SB13を建てる際に柱穴に埋置したもので、掘立柱建物群の初現期は9世紀の中頃を少し過ぎた頃とすることができよう。

【Ⅷ期】

この時期は掘立柱建物群の中心をなす時期で、加原遺跡では遺物が最も多い時期である。坏(409、167、352など)は、口径が13.5cm前後から13cm前半代となり、小型化する3式と4式である。碗は2形態あり、口縁部が内湾しながら開くもの(408)とほぼ直線的に開くもの(160)である。前者は、胎土から明らかに在地産で、包含層出土のものも含めてこの形式のものは数は少ない。主体は後者である。また、口径10cmの小型の坏も存在する。黒色土器は、碗形態のもの(407、161、349)と坏形態(371)がある。いずれも内面のみ黒色のA類である。碗の器形は土師器と全く変わらず、両者が同一系譜上にあることを示している。黒色土器の坏は口径が15cm以上あり、大型であるが、器形的にはこの時期の土師器坏と同じである。

また、甕(416、417、173)はあまり一定の形態を示さず、個体差が激しい印象を受ける。鉢(412)は口縁部が短く開くものである。甑は直線的に外傾する口縁部である。この時期に、内外面ともよく磨かれた大型の碗(378)が伴う。特殊な用途に用いたものと思われる。

さらに、この時期に越州窯青磁碗が伴うものと思われる。唯一掘立柱建物(SB13)の柱穴から出土したもの(233)は、体部下半は露胎で、見込みには細長い目跡が6カ所付く。底部はやや突出気味の平底である。周辺の包含層(SB13の火災処理層)出土のものと接合しており、他の越州窯青磁片と共に本来SB13に帰属していた可能性が高い。SB13の建設はⅦ期になるが、火災に伴う廃絶は当時期まで下ると考えられる。

この時期はⅦ期に後続する9世紀後葉とすることができよう。

【Ⅸ期】

坏(488、487、181)は小型化し、口径は12cm代となる5式である。黒色土器は碗形態のものがある。180は黒色に燻された耳土器で、高い高台が付く。179は越州窯青磁の合子で、被熱を受けている。

この時期は、坪根・塩地編年の9-IV期から10-I期にかけての時期と考えられるので、9世紀末から10世紀初め頃を当てておきたい。

【Ⅹ期】

この時期は、加原遺跡で唯一出土した底部ヘラ切りの小皿(141、142)、白磁の碗(140)がある。坪根・塩地編年では、小皿の出現は10-Ⅲ期とされるので、この時期は10世紀後半以降となる。豊後において、土師器の坏お

よび小皿で糸切り底のものが出現するのは11世紀代であるが、未だ細かな時期まで追えないのが現状である。そのため、この期は10世紀後半から11世紀代のある段階、としか言えない。それに伴う小さな玉縁の白磁の碗は、口縁部のみであり形式の比定が難しいが、やや青みがかった発色であり山本編年のXI類と考えられ、その時期は10世紀後半から11世紀中頃である。

【XI期】

口径が14.3cmの糸切り底の土師器坏(556)が副葬されている墓の時期である。豊後の土師器坏で口径14cm代の糸切り底のものは12世紀代に見られるが、加原遺跡ST02出土の土器は型式からみてやや新しく、12世紀でも後半代のものであろう。そうすれば、ST01出土の龍泉窯青磁碗(401)の時期とも符合する。

以上からわかるように、竪穴建物が造られなくなった7世紀後半代から8世紀にかけて僅かに遺物が出土しているが、その後、9世紀前半代に遺物が散見し、9世紀中頃から後半に突如掘立柱建物群が登場するまで、1世紀以上は空白の期間があることになる。さらに、調査範囲という限られた中ではあるが、その掘立柱建物群は10世紀初頭頃には姿を消し、その後わずかな遺物しか出土しなくなる。その後、10世紀、12世紀後半代と散発的に生活の舞台となるが、12世紀後半代に姿を消してからは、加原遺跡の調査地が再び居住地となることは無かった。

第2節 遺構

古代以前

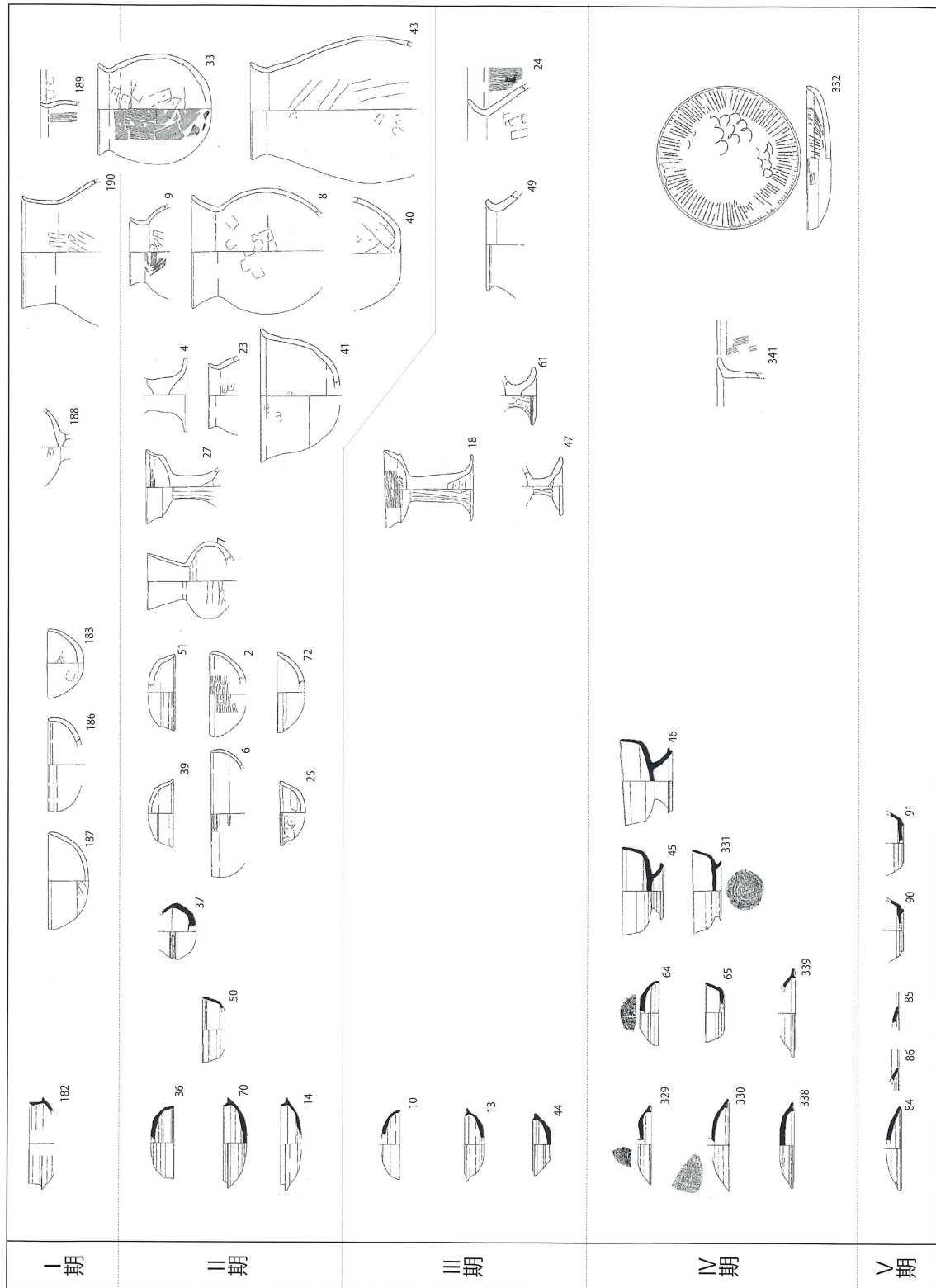
加原遺跡では、1縄文時代晩期、2弥生時代後期、3古墳時代前期、4古墳時代後期から終末期、5平安時代前期、6平安時代終わりから鎌倉時代初め、という6つの時代で断続的に遺跡が形成されていた。この内、縄文時代晩期と弥生時代に関しては遺構が確認されておらず、詳細は不明である。しかし、従来はこの地域の弥生時代の遺跡が台地上でのみ確認されてきたことを考えれば、狭小な谷底平野の緩斜面で遺物が出土したことの意味は大きい。すなわち、当該時期に低地での水田耕作も指向していた可能性を具体的に論議できることになるだろう。

また、この谷底平野の緩斜面で古墳が確認されたことも大きな意味を持つ。それは、従来全く予想されなかったような立地条件の場所で確認されたことと、厳密には時期を決しがたいが、この地域では数少ない古墳時代中期の古墳である可能性が高いこと、の2点である。古墳時代後期の墳墓は、この地域では多くは凝灰岩の露出した崖に穿たれる横穴墓である。中期の横穴墓も数は少ないが確認されているので、それらとの関係が問題となろう。また、この地域には前期とされる前方後円墳「坊の原古墳」がある。主体部は凝灰製の箱式石棺で、すでに盗掘を受け詳細は不明である。しかし、古代の大野郡大野郷域では唯一の前方後円墳で、前方後円墳が6基集中する三重郷とはやや格差があるものの、大野郷では中心的位置を占めていたことがわかる。

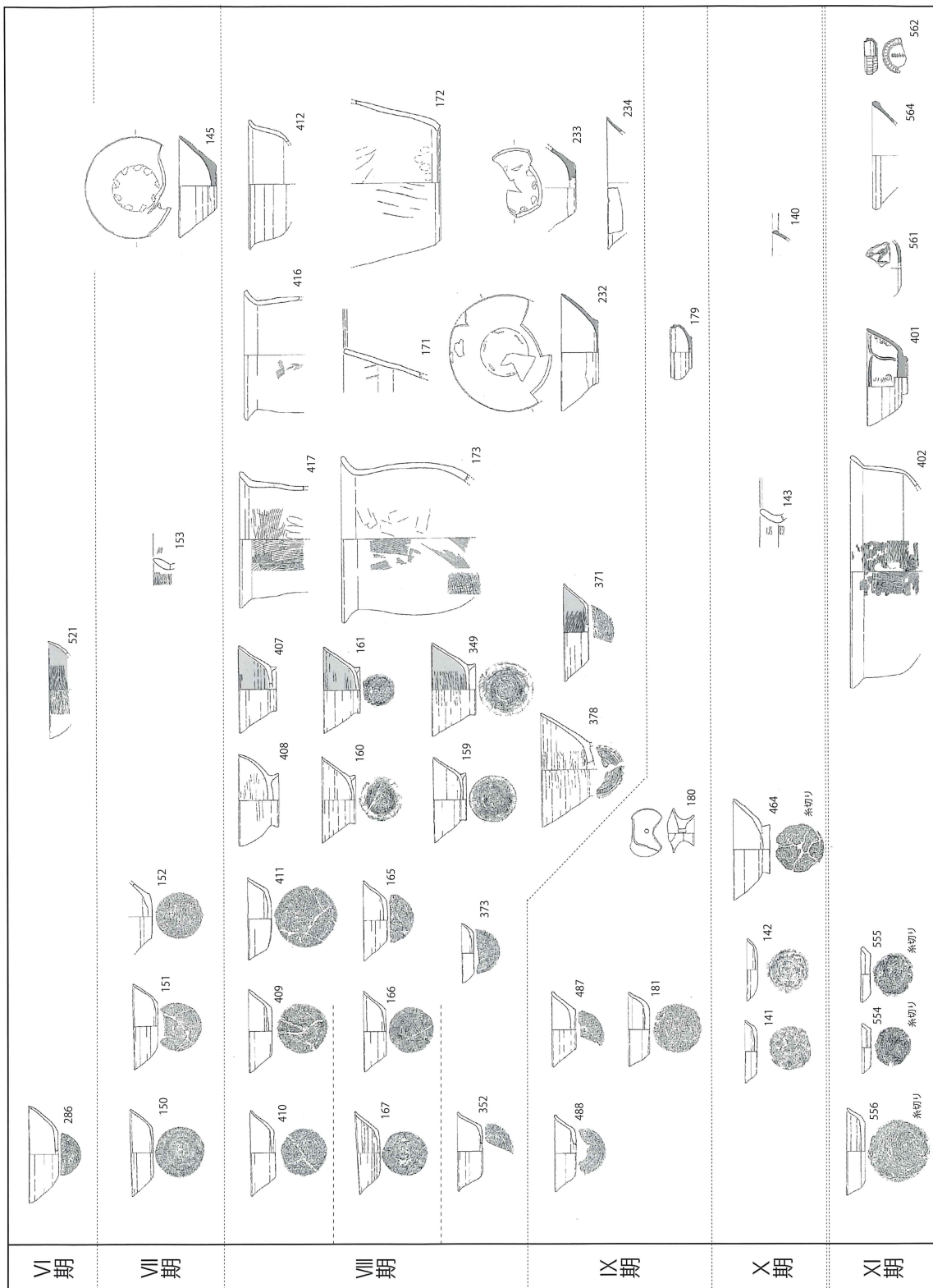
古墳時代後期から終末期は、今回の調査で竪穴建物が計24基確認された。特に他の該期の集落と異なる点は無いが、大野川流域ではほとんど同時期の調査事例が無い。この加原遺跡や至近の田村シゲツキ遺跡などでは古墳時代後期の集落が確認されているなど、大野川の支流沿いの谷部の平地が集落として利用されていたことが知られる。

古代から中世

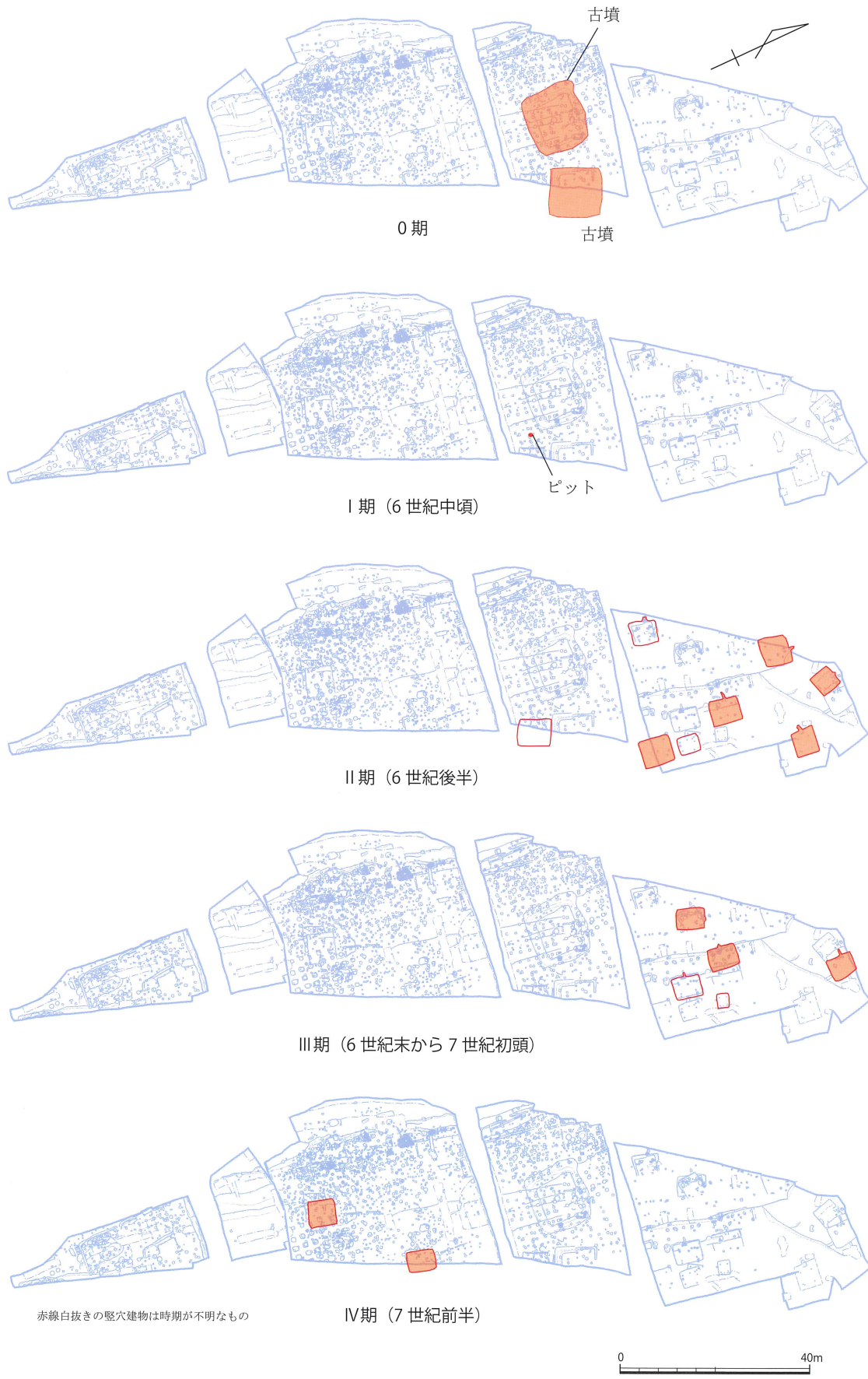
5つの調査区で、計27基の掘立柱建物を調査した。この中には、10基程度中世に属するものがあるので、それらを除くと17基が古代のものとなる。時期的には9世紀代、その中でも後半が主体となることが想定された。建物は2ないし3回の切り合い関係が認められるので、ある程度の時期幅は想定せざるを得ないが、切り合いの場合も、ほとんどが同位置での建て替えと考えられるので、時期は極めて限定されたものとなろう。前節で検討した遺物の時期や建物の配置などから、中世まで含めて建物の変遷を考えてみよう(第188、189図)。



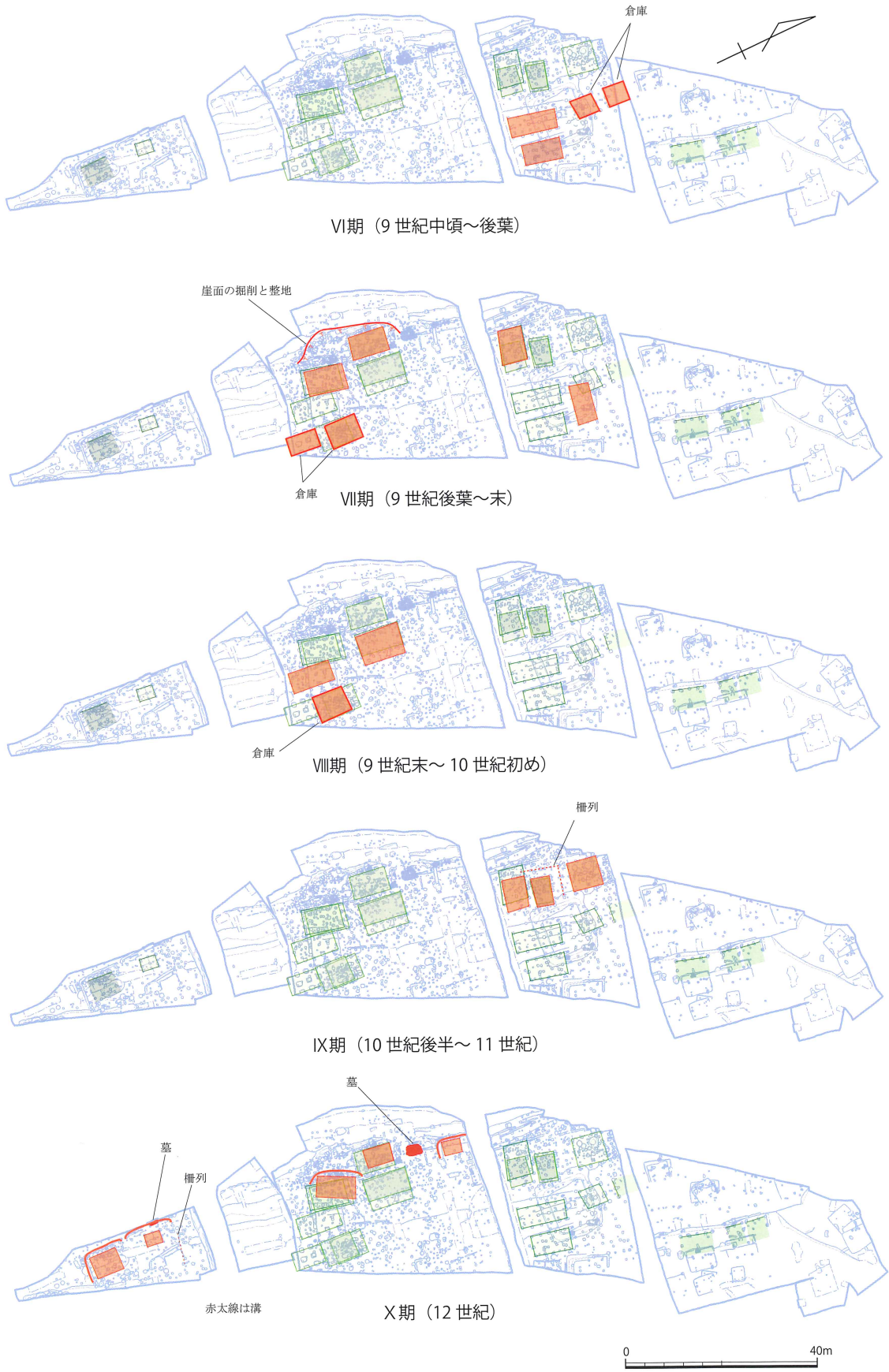
第186図 加原遺跡出土遺物の変遷(1)



第187図 加原遺跡出土遺物の変遷(2)



第188図 加原遺跡の遺構の変遷(1)



第189図 加原遺跡の遺構の変遷(2)

(建物の変遷)

第I段階(9世紀中頃から後葉)

SB13の柱穴内一括資料から、この時期に建物の建設が始まったことがわかる。隣接するSB14は柱穴から資料は出土していないが、建物の軸線が揃っており同時期のものとした。これに伴うものとして、やや軸は異なるものの倉庫であるSB06とSB05を加え、一つの単位と考えた。これらは周囲に広く焼土が広がり、火災に遭って廃絶したと考えられる。その時期は次の第II段階である。

第II段階(9世紀後葉～末)

B区の建物群が廃絶し、C区に建物群が出現する。崖を削って平坦面を作り出した上に建ったSB16と、それと軸をほぼ同じくするSB21、倉庫のSB24、SB26である。また、火災に遭ったB区にも、SB07とSB11の建物が建ったと考えられる。

第III段階(9世紀末から10世紀初め)

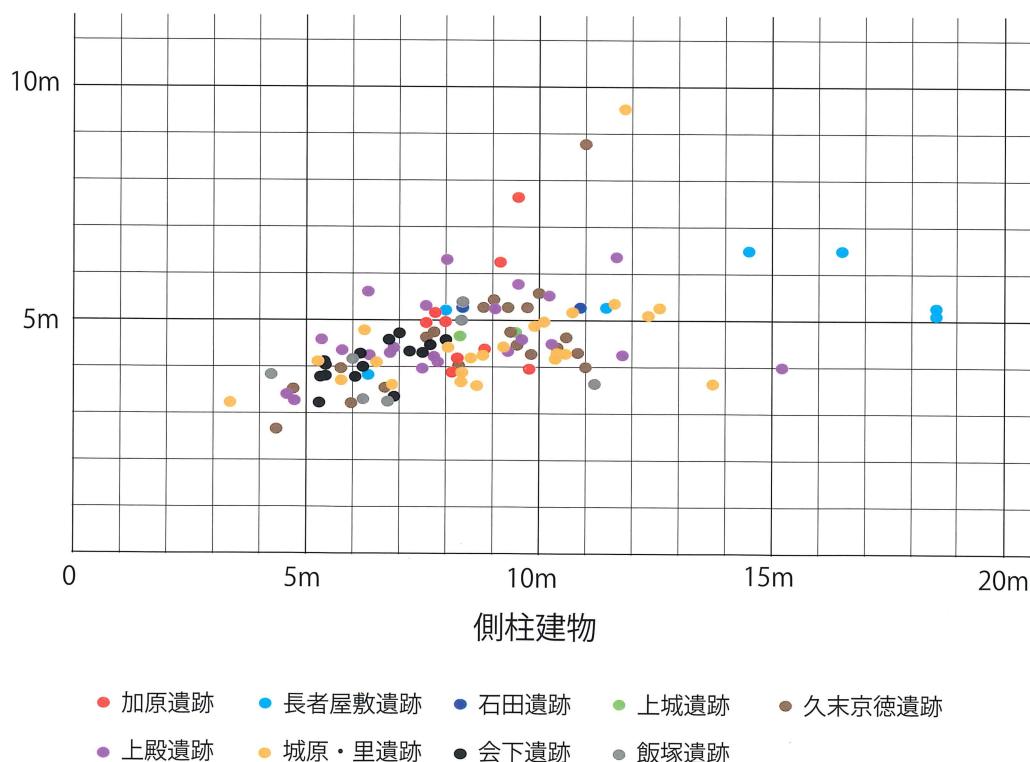
C区において、主屋と考えられるSB18が平坦地の中央に建ち、倉庫はSB25となり、それに平行するSB23も同時期と考えられる。

第IV段階(10世紀後半から11世紀)

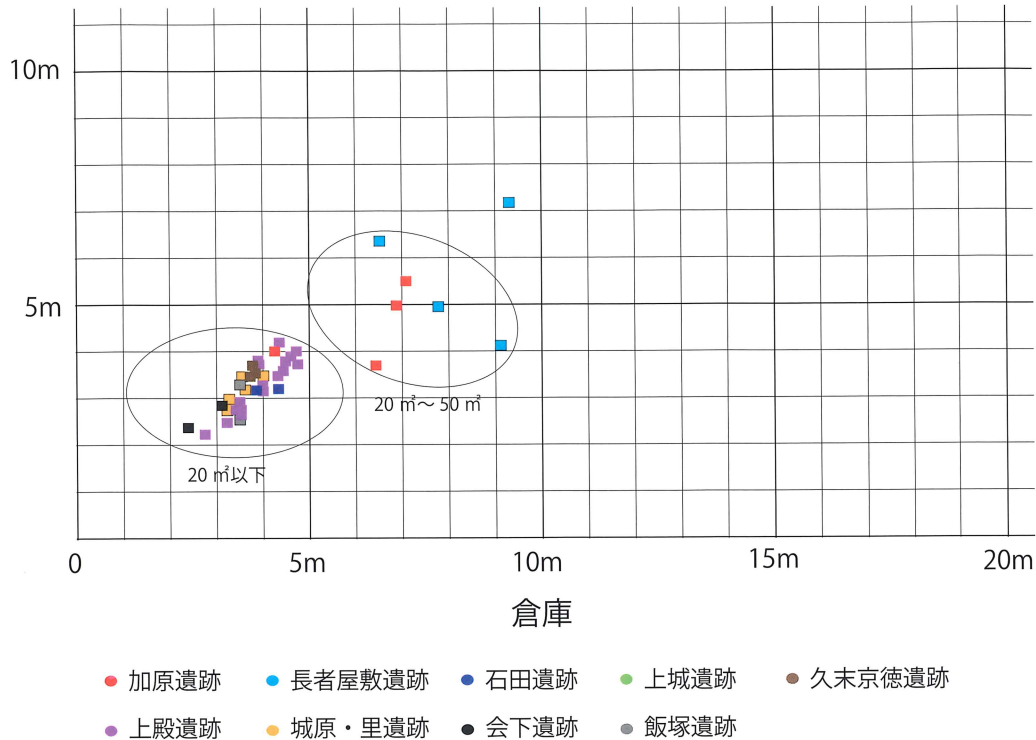
B区において、SB09から12、SB04が該当すると考えられる。

第V段階(12世紀)

崖際に建物が点在するように、B区とC区でSB08、SB15、SB17、SB21が建ち並ぶと考えられる時期である。E区でもSB28、SB29はこの時期と考えられる。C区に1基、E区に1基の土坑墓があるのはこの時期で、調査区内で複数の生活単位があったことがわかる。



第190図 側柱建物の規模比較

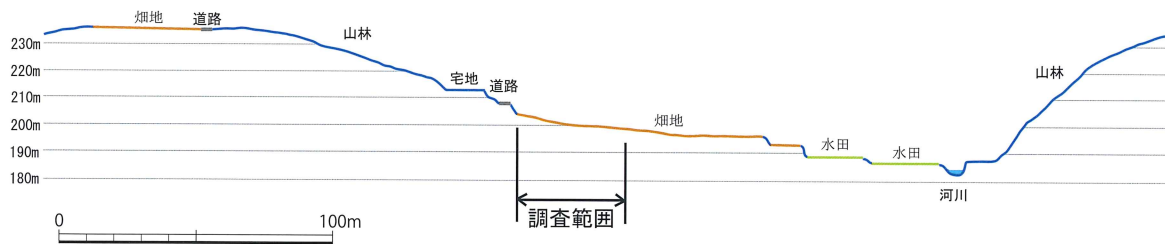
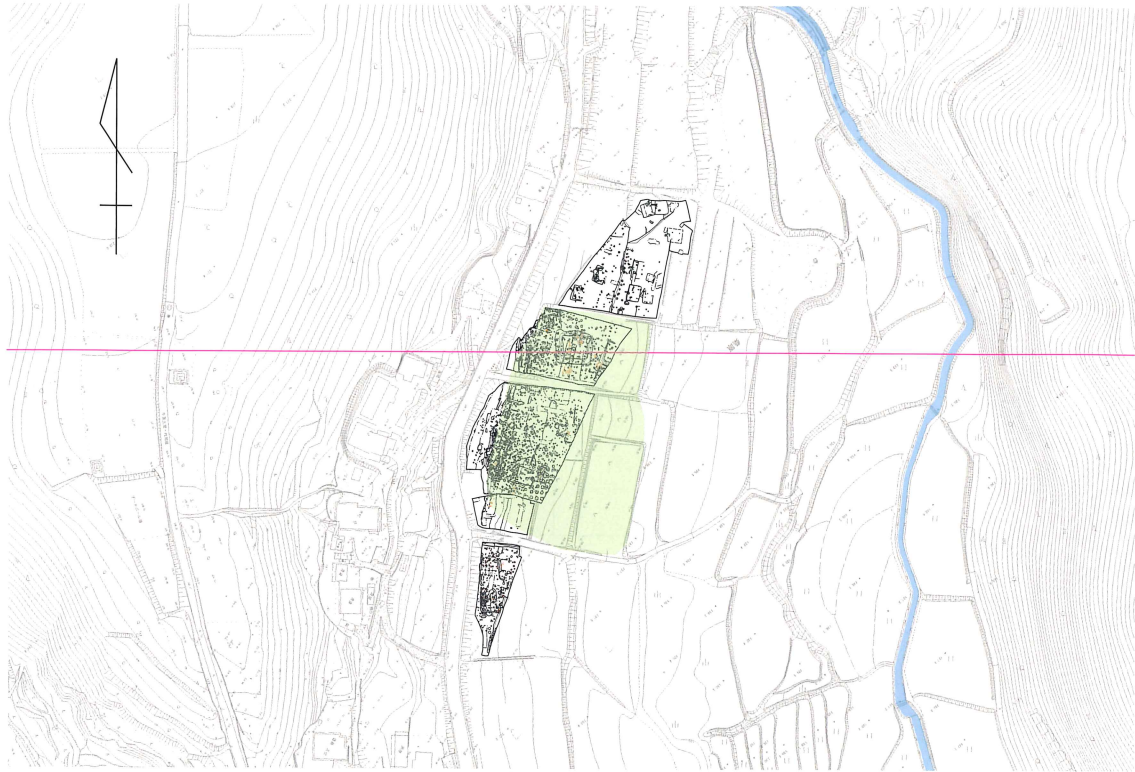


第191図 倉庫の規模比較

(建物規模)

次にこれらの建物群の歴史的意味について考えるために、大分県内（豊後と豊前南部）の古代遺跡の内、一定規模以上の建物が検出されている遺跡の建物規模と、加原遺跡の建物規模を比較してみよう。第190図のグラフは、倉庫を除く掘立柱建物を桁行、梁行でメートル単位でドットを落としたグラフである。これを見ると、加原遺跡の建物群が、中規模からやや大型の掘立柱建物で構成されているのがわかる。しかし、長者屋敷遺跡や城原・里遺跡でわかるように、検出された遺構が、遺跡全体の中でどの位置に相当するのかわかることによって、建物規模が左右されることが考えられるので、各遺跡とも遺跡全体が把握されている訳ではなく、この規模の比較はあまり意味が無いかもしれない。

そこで、第191図の倉庫の規模比較グラフを見てみよう。すると、明らかな傾向が読み取れる。すなわち、多くの遺跡では桁行5m以下、梁行4m以下で、床面積20m²以下に集中する。つまり多くの倉庫が2間×2間ということである。その一方、20m²を越える倉庫も散見される。ここに加原遺跡の3棟が入るが、他は下毛郡の正倉院と考えられる長者屋敷遺跡（中津市）のものである。注目されるのは、長者屋敷遺跡の倉庫はいずれも8世紀末から9世紀中頃のもので、加原遺跡は9世紀後葉から10世紀初頭にかけてのものというように、8世紀代で終わる遺跡には大型の倉庫が無いことがわかる。久末京徳遺跡のように、9世紀代に続く遺跡でも倉庫は小さいままのものもあるので、必ずしも規模が拡大するわけではない。そのため、一概には言えないが、加原遺跡の大型の倉庫は、加原遺跡の社会的位置付けという背景に加えて、時代的な要因も作用していたとも考えることができよう。すなわち、倉庫の規模が大きいため、過度の評価は慎まねばならない。



第192図 加原遺跡の横断面と古代遺跡の推定範囲

(遺跡の範囲)

次に、今回は検出できなかったこれらの建物群を区画する施設、あるいは範囲はどう考えられるであろうか。

それぞれ西側は「切岸」のような段差、東側は調査区外としても、南北では調査区同士の間で調査ができなかった道路部分や筆境の下に溝や柵列が存在した可能性もある。第192図の遺跡周辺の地形は現況ではあるが、圃場整備などは行われておらず旧地形が残されており、調査区ごとの遺構のあり方を見ると、道路や筆境で異なっているようにも見える。これらの道や筆境を詳細に見ると、まずD区とE区の間は、60mほど直線的に川方向に下って、北側に向きを変える。また、B区とC区の間は同じく60mほど下って消える。つまり、C区にD区まで含めて考えると、東西方向に60mほどの区画が取れる。C区とD区を合わせた南北幅も約60mであることから、この区画は本来一辺約60mであったと考えることも可能である。

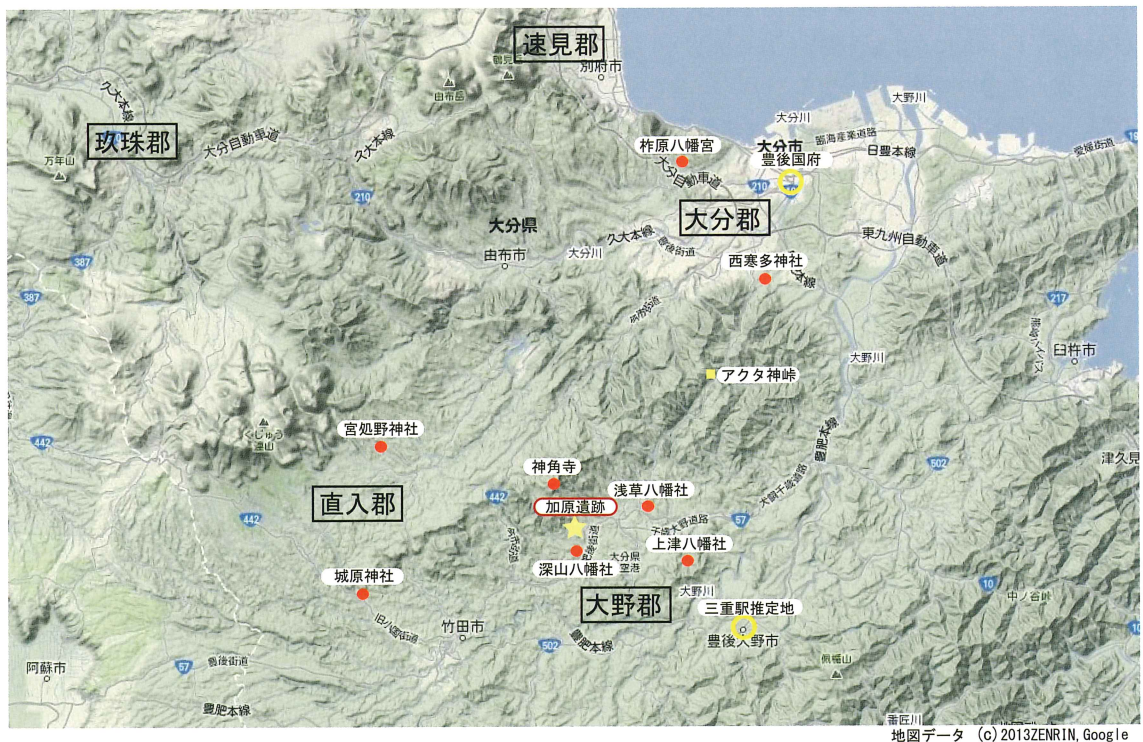
B区の建物群については、A区との間の筆境で、調査前に70～80cm程度の段差があったことから、C区・D区の約半分の30m程度の南北幅を有していた可能性が考えられるだろう。東の境を畑の段差と考えれば、東西方向の幅は約40mとなる。

(遺跡の性格)

加原遺跡は、酒井寺川の支流が開析した幅100mほどの谷の斜面に立地している。現在の川水面より十数mほど高く、背後には凝灰岩が露頭する山塊が迫る。遺跡調査地点の傾斜角度は約10度であり、かなりの傾斜を有している(第192図)。加原遺跡の場所は、地理的環境の項で記したように、古代では豊後国大野郡大野郷にあたる。大野郡衙の所在地については、二箇所の推定地がある。ひとつは、延喜式で駅の所在地としてあげられている三重郷、もうひとつは「郡山」の地名が残る大野郷である。有力なのは前者である。しかし各地にある「郡山」の地名が郡衙所在地を指し、実際郡衙と考えられる遺跡が発見される場合があることから、後者も決して軽視できる説ではない。「郡山」は大野原と呼ばれる大野郡でもっとも大きな台地の端にある。「大野」という地名がこの広大な野に由来するものであれば、大野原が大野郡の中心であってもおかしくない。むしろ、郡名を冠した地名があり、そこに「郡山」という地名が残ることは偶然ではないのではなかろうか。

その「郡山」から直線で約2.5キロ北西にあるのが加原遺跡である。また、加原遺跡の位置を巨視的に見ると、豊後国の国衙があった大分郡から、現在の県道大分大野線という「あくた神峠」越えの道ではほぼ直線的に結ばれる位置にある。国府から南へ向かう現在の有力な説では、丹生駅(大分郡)―三重駅(大野郡三重郷)―小野駅(大野郡三重郷)から日向へ、というルートがあり、大野郷は官道沿いには当たらないが、大分郡と大野郡を結ぶほぼ直線の道が通り、さらに大野郡の西に広がる直入郡のことを考えると、大野郷に中継点があってもおかしくはない。直入郡でも、大規模な掘立柱建物を持つ遺跡が複数地点で見つかっており、官衙的な施設が同一郡内で複数あったことを示している。近年の考古学的な発見によって、全国的にも裏付けられつつある。

ところで、『豊後国風土記』では『日本書紀』の説話を下敷きにして、土蜘蛛征伐の話がこの大野郡と隣の直入郡を舞台にして語られている。この大野郡と直入郡は中世には「南郡」と総称されるが、その理由に両地域が共に豊後一の長さを持つ河川である大野川の流域に展開しているということがあげられる。しかし、直入郡の一部(旧直入町と旧久住町の東側、古代では朽網郷域)は大分川上流域に含まれ、土蜘蛛を征伐する時、そこに景行天皇の行宮が置かれた、と語られるのである。一方、大野川流域の直入郡祢疑野には打狻・八田・国摩侶とい



第193図 遺跡周辺の歴史的環境

う土蜘蛛が、大野郡網磯野には小竹鹿奥・小竹鹿臣という土蜘蛛がいたとされ、大野川流域と大分川流域は対照的な地域として理解されていたことが窺える。

この両地域の違いは、古代の遺跡の在り方にも如実に表れている。大分川上流域の旧久住町都野^{*8}では、近年古代（7世紀後半から9世紀前半）の遺跡が狭い範囲で相次いで確認されており、都野地域の特異性が明らかになってきた。一方、同じ直入郡でも大野川上流域に属する旧荻町柏原や竹田市禰疑野などでは、台地上をかなり広範囲にわたって埋蔵文化財調査を実施しているにも係わらず、古代の遺跡はほとんどない。大野郡に属する地域も同様の傾向にある。この遺跡の在り方からは、『風土記』や『日本書紀』に描かれた土蜘蛛説話が、何らかの歴史的事実を反映していると考えざるをえない。

これらの地域差について、西別府氏は、海部から速見、朽網（『日本書紀』では「来田見」）という大分川流域は「ひとつの政治的小世界を形成して」おり、「大和王権とより強い政治的関係をむすび、その後の豊後内陸部経営の拠点となった」とされる^{*9}。このいわば大和王権との政治的距離の違いが遺跡の在り方にも反映しているのであろう。

ところで、天長3（826）年には、太宰府管内において軍団の制度が廃止され、いわゆる「選士・選士統領制」が導入される。選士とは、太宰府や北部九州の警備のために、太宰府管内から「富饒遊手之兒」を1720人選抜し、4交代で30日間ずつ警備に付くというものである。そして大野・直入両郡の「騎獵の兒」^{*10}に対して「兵において要となす」ことが期待されたのである。この背景としては、この地域での牧の存在があげられている^{*11}。そのことを背景として、加原遺跡の建物群を考えると、次のように解釈することも可能であろう。

郡衙などの官衙や、その関連施設であれば出土したであろう墨書土器や硯などの「文字資料」が1点もないことは、この建物群の居住者が、郡司などの役人ではなかったことを間接的に示していると考えられる。そのことは、傾斜がきついという地形に左右されるとは言え、建物配置が「コの字形」などの規格性を示さないことも官衙ではない可能性を示唆している。それにも拘わらず、豊後国府周辺でも数点しか出土しておらず、太宰府や鴻臚館で集中的に出土する越州窯青磁II類の碗や例の少ない合子などを複数点所有していたことは、太宰府との直接的な関係を示唆しているように思える。

また、土坑SK02から出土した鉄鉾は、古墳時代の混入品でなければ、注目される遺物である。鉾（律令期には「槍」の字を充てる）は歩兵の武器である（打物歩兵）とする説^{*12}と、騎兵でも使用した（打物騎兵）という説^{*13}があるが、いずれにしても自備とされた大刀や弓箭などと違い、鉾は私的な保有が禁じられている武器であった^{*14}。出土遺構の時期がやや下るとはいえ、鉾が遺跡から出土するということは、加原遺跡に軍事に関わる人がいたことを端的に示しているのではなかろうか。

その想定が正しいならば、今回加原遺跡で確認された建物群の構築者は、826年に新たに設置された選士の制度（選士・選士統領制）で大きく飛躍した在地土豪層と考えることも可能であろう。弓馬の士として武力を背景としながら在地に君臨した武士団の萌芽を加原遺跡に見ることも、決して飛躍のしすぎではないのではなかろうか。

最後に中世の加原遺跡について考えてみよう。中世は、掘立柱建物3棟と墓2基が確認されている。建物はSB20を除けば、いずれも山側（西側）に排水溝と考えられる細い溝を巡らせる。さらに、それぞれの建物は離れて存在し、お互いに有意な組み合わせとはなっていないように見える。しかし、建物として拾えなかった柱穴は多く、古代との峻別もできなかったことに加え、遺構の検出が容易でなかった黒褐色粘質土（中世の遺構が黒褐色

*8 景行天皇の行宮が置かれたために「宮處野」と言われるようになった、と『風土記』では記されている。

*9 西別府元日「古代朽網郷をめぐる二、三の問題」『市第I遺跡・石田遺跡』久住町教育委員会 1996

*10 『類聚三代格』巻18

*11 西別府元日「古代朽網郷をめぐる二、三の問題」『市第I遺跡・石田遺跡』久住町教育委員会 1996

*12 近藤好和『武具の日本史』平凡社新書 平凡社 2010

*13 五十嵐基善「律令制下における軍隊編成に関する基礎的考察」『日本古代学』第5号 2013

*14 近藤好和『武具の日本史』平凡社新書 平凡社 2010

粘質土中で終わっていたら、検出できなかった可能性がある)を削らざるを得なかったことから、更に中世の掘立柱建物が存在した可能性は高いと考える。

墓はC区とE区の山側で検出した。一基には土師器坏と共に鉄刀が、もう一基には青磁碗が副葬されていた。さらに後者には上部に礫を敷き詰めるなど、墓域を意識した遺構となっていた。いずれも12世紀代と考えられ、他遺跡例でも当該期の例からして加原遺跡の墓も有力者の墓であったのは間違いない。

散在とはいえ、長さ100mに渡って展開する中世初期の建物群は、一般にこの時期に対して言われる「散村」状態では無く、むしろ、「集村」状態に近いとも言える。ほぼ同時期に集村状態を見せる八坂遺跡群(杵築市)^{*15}などもあり、荘園として立券されるようになる平安時代終わり頃の集落に対して、再考が必要かもしれない。この時期の屋敷地が区画施設を持たないことも次の時期とは大きく異なり、そのため今回検出された土坑墓も、いわゆる「屋敷墓」なのかがはっきりしない。むしろ、そのような集落景観を見せるこの時期の遺跡のあり方こそが、問題であろう。

ところで、この加原遺跡のある大野郡大野郷のその後の歴史的展開を見ると、12世紀後半には大野郷に土着した豊後大神氏に出自を持つ大野氏(大野郷司であったとされる)の3代家基の名が『吾妻鏡』に見える。この頃大野荘は成立したと考えられるが、資料が無く立券の時期や経緯は不明である。その後、大野郷域で確実に力を蓄えつつあった大野氏は、次の泰基の代になって源義経に加担したとして、源頼朝の代官中原親能(大友氏初代能直の養父)に攻められ、建久7年(1196)頃には滅んでしまう^{*16}。加原遺跡の最後の時期の動向とほとんど重なると言ってよい。12世紀代の建物群がその200年から300年前の有力者層の「遺跡」を伝承などに基いて意識的に選地して建てた可能性もあり^{*17}、そうであれば加原遺跡が大野氏に関わる遺跡である可能性も生じる。加原遺跡の位置が、大野氏が拠ったとされる神角寺山の山裾の一つであることも、そこに何らかの関連を想定させる。今後、周辺地域の調査事例が蓄積され、大野氏の動向と遺跡の消長の関係がもう少し広い範囲で解明されることを期待したい。

参考文献

- 『長者屋敷遺跡』中津市教育委員会 2001
- 『市第I遺跡・石田遺跡』久住町教育委員会 1996
- 『上城遺跡』久住町教育委員会 2002
- 『久末京徳遺跡』安岐町教育委員会 1991
- 『久末京徳遺跡』大分県教育委員会 2004
- 『上殿遺跡』『佐野地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市教育委員会 2002
- 『城原・里遺跡第5・7・8・9・12次調査報告書』大分市教育委員会 2010
- 『会下遺跡』『大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育委員会 1991
- 『飯塚遺跡』国東町教育委員会 1994
- 『大分県史古代編』大分県 1982
- 『大分県大野町史』大分県大野町史刊行会 1980
- 『大分県三重町史』三重町 1987
- 『大分県の地名』平凡社 1995
- 『角川日本地名大辞典44大分県』角川書店 1991

*15 『八坂の遺跡』大分県教育委員会 2003

*16 その後、大野荘は没官され中原親能から養子の大友能直に譲られ、その後中世を通して大友氏の根本所領として重要な庶家を輩出していくことになる。

*17 間に10世紀後半から11世紀前半に比定したX期がある。この時期に調査区外で建物群が展開していれば、遺跡としては古代から連続していた可能性も出てくる。そうすれば、地域における「武士の発生」を具体的に跡づける遺跡と考えることも可能となる。